

高槻市文化財調査概要 XX

島上遺跡群 18

上
部

1 9 9 4

高槻市教育委員会

嶋上遺跡群 18



1. 郡家車塚古墳 全景（南側から）



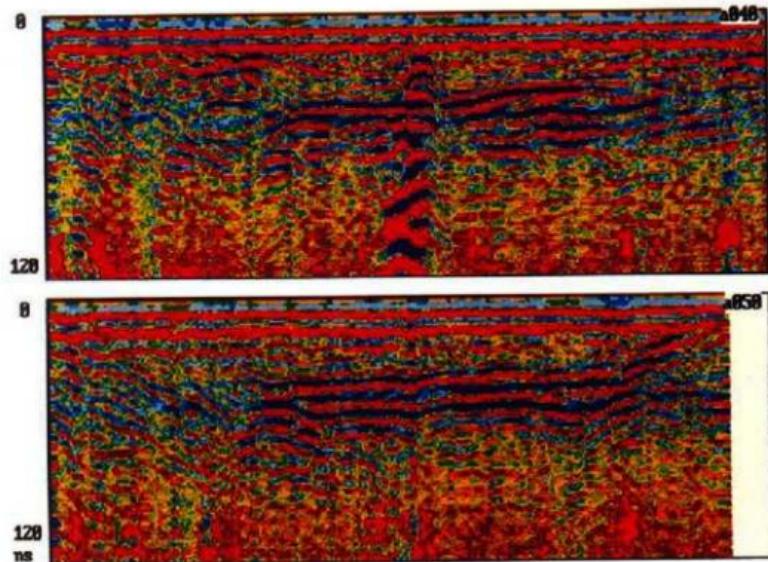
2. 郡家車塚古墳 近景（南東側から）



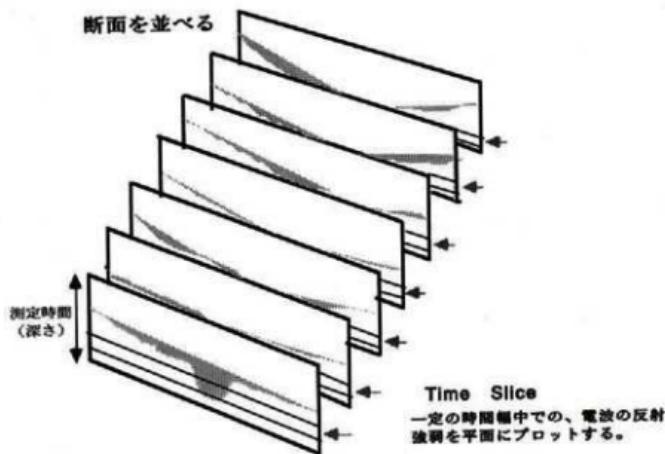
3. 郡家車塚古墳 トレンチ1・4（南側から）



4. 郡家車塚古墳 トレンチ7（北東側から）

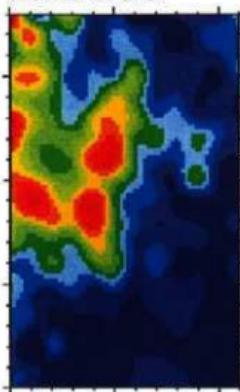


5. 郡家車塚古墳 地中レーダー探査断面画像

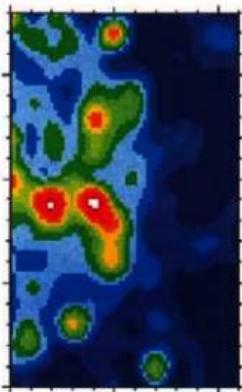


6. 地中レーダー Time Slice参考図

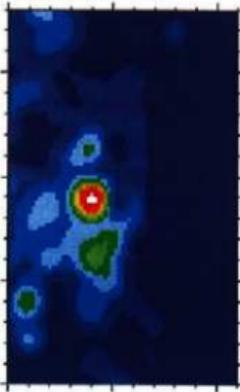
Kurumazuka Kofun
time slice (36-48 ns)



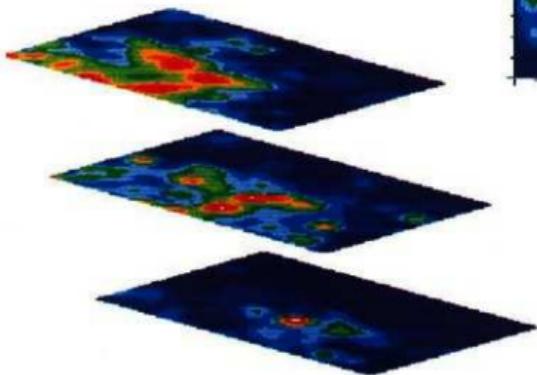
Kurumazuka Kofun
time slice (48-68 ns)



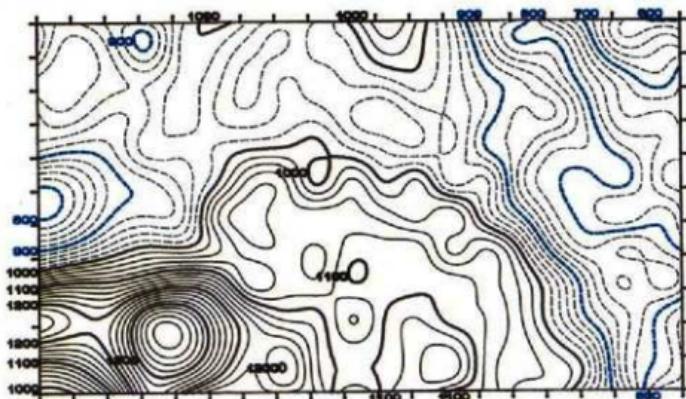
Kurumazuka Kofun
time slice (68-72 ns)



Kurumazuka Kofun
time slices 36-48; 48-68; 68-72 ns

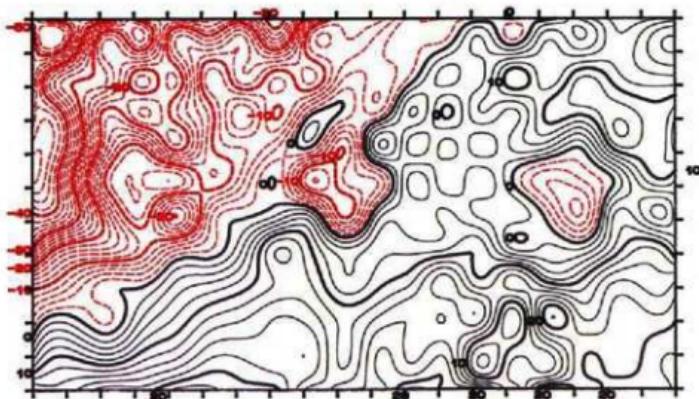


Kurumatsuka WN20



8. 郡家車塚古墳 地中電気探査

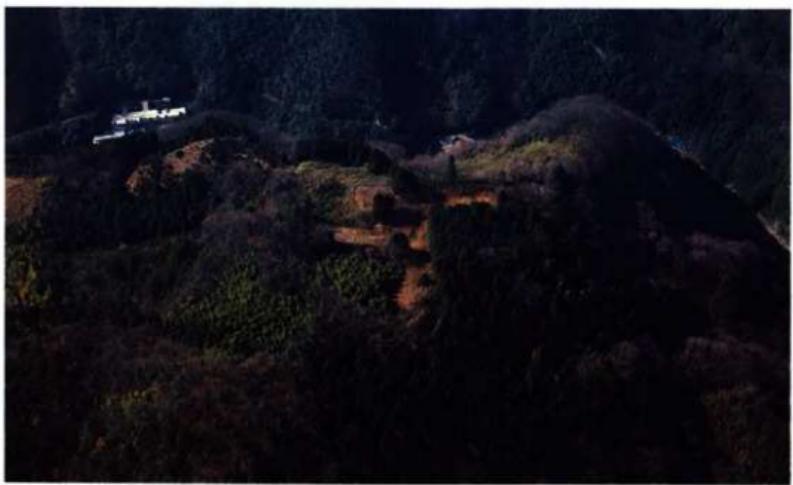
Kurumazuka Mag. FM18



9. 郡家車塚古墳 地中磁気探査



10. 芥川山城跡 全景（南側から）



11. 芥川山城跡 主郭部（東側から）



12. 芥川山城跡 郭① 空中写真



13. 芥川山城跡 郭①（北側から）



14. 芥川山城跡 C区礎石建物（西側から）



15. 芥川山城跡 東西トレンチ（南側から）

16. 土壙 1（東側から）

はしがき

平成5年度も島上郡衙跡をはじめとする市内遺跡群の発掘調査を実施いたしました。とくに島上郡衙跡に隣接する郡家今城遺跡での発掘調査に数多くの成果が得られました。この遺跡は昭和44年に発見されて以来、度重なる調査の結果、奈良時代から平安時代前期にかけての多数の建物跡や井戸などが検出されており、島上郡衙の消長と期を一にしていることが今日判明しております。今年度の調査におきましては、これまでの調査で検出した条里溝や山陽道のつづきが検出されるとともに、その周囲には奈良・平安時代の建物遺構等が検出され、この遺跡の実態にせまる手がかりを得たものと考えております。一方、島上郡衙跡では郡衙北方の小高い地域に建物跡などが検出されており、郡衙とそれを支えた古代集落の様子を具体的に知る手がかりを得ることができました。

さて、今年度は郡家車塚古墳と芥川山城跡の調査を実施しました。両者は市内遺跡群のなかでも良好に保存されている遺跡でありましたが、これまで調査の機会も少なく、その実態には不明な部分が多くありました。確認調査の結果、郡家車塚古墳は、葺石や埴輪のめぐる二段築成の前方後円墳で、全長をほぼ確認することができるとともに、本市としては初めての試みでもありますレーダーによる古墳主体部の地中探査を奈良国立文化財研究所の協力を得て実施し、大きな成果をあげることができました。

芥川山城跡は戦国時代に畿内を支配した細川氏や三好氏が拠点とした城で、今回はじめ調査する機会を得ました。その結果、主郭部で礎石建物を検出したのをはじめ、火災の後に整備していたことも確認されました。発掘調査と並行して、郭の配置や防御施設について山城跡全体を踏査したところ、新たに石垣や石切場が発見されるなど多くの成果を得たところです。

このように開発行為にともなう発掘調査にとどまらず、市内遺跡群の調査・研究の基礎的資料の蓄積も念頭におきながら事業を実施してまいりました。その概要報告をまとめましたが、今年度の調査成果は今後の史跡保存整備や島上郡衙跡などの研究にとって不可欠なものと考えております。

最後に、発掘調査や本書をまとめるにあたりご協力やご教示をお願いした方々に、心から感謝を申し上げます。

平成6年3月31日

高槻市教育委員会

高槻市立埋蔵文化財調査センター 所長 富成哲也

例　　言

1. 本書は、高槻市教育委員会が平成5年度国庫補助事業（総額18,000,000円）として計画、実施した高槻市所在の史跡・島上郡衙跡附寺跡周辺部および市内遺跡群の発掘調査事業の概要報告書である。
2. 事業は、高槻市教育委員会の直営事業として実施し、大阪府教育委員会の助力を得て、平成5年6月1日に着手、平成6年3月31日に終了した。
3. 調査は高槻市立埋蔵文化財調査センターがおこなった。本書の執筆・図面作成・製図は橋本久和、森田克行、宮崎康雄、高橋公一、木曾広、中村剛彰がおこない、分担は文本に記した。出土遺物の写真撮影は清水良真が担当した。遺物整理については以下の各氏から援助をうけた。厚く感謝する。

白銀良子・真下登記子・新山知香恵・吉田美恵子・佐藤喜久子・樋村洋子・清田悦子・後藤勇子・沢田恵美子・高谷喜久代・小川隆久
4. 郡家車塚古墳の調査にあたり、遺構探査を実施し、その成果を西村康氏に執筆していただいた。なお、地中レーダー探査にあたり飛田耕児、宗必準、ディーン・グッドマンの各氏、UMGAL中島（マイアミ大学附属音響地質研究所・中島研究室）の協力を得た。
5. 芥川山城跡の遺構概要図作成にあたり、城郭談話会の中井均・高橋成計・高田徹・藤岡英礼・藤山兼治・中西裕樹の各氏の協力を得た。なお、中井均氏に遺構概要について原稿を執筆していただいた。
6. 調査の実施にあたり、以下に掲げる土地所有者の方々をはじめ、関係機関各位のご協力をいただいた。ここに記して感謝いたします。

中川真楨・栗津俊二・塩見こう・深田明久・島田一男・吉田久治・岸田敏馬・中村義一・中村銀蔵・高槻田中学園（順不同、敬称略）

目 次

I 島上郡衙跡	1
II 郡家今城遺跡	5
III 芥川遺跡	48
IV 郡家車塚古墳	49
V 芥川山城跡	74
VI ま と め	95

No.	遺跡名(地区)	調査地	面積(m ²)	申請者
1	島上郡衙跡(5-A-B)	郡家本町948-1・948-2	718.259	中川真植
2	" (48-K)	川西町1丁目953-33	66.54	栗津俊二
3	郡家今城遺跡(93-1)	郡家新町41-1	979.0	塙見こう
4	" (93-2)	郡家新町41-1	523.28	塙見こう
5	" (93-3)	氷室町1丁目769-4	114.3	深田明久
6	" (93-4)	今城町17-1	330.0	島田一男
7	" (93-5)	氷室町1丁目774-1	658.0	吉田久治
8	芥川遺跡	殿町63	222.08	岸田敏馬
9	郡家車塚古墳(93-1)	岡本町34-2	859.0	中村義一
10	" (93-2)	岡本町1	1,236.0	中村銀藏
11	芥川山城跡	大字原4,053	2,707.0	高橋田中学園

平成5年度 市内遺跡発掘調査地一覧

I 島上郡衙跡

1. 島上郡衙跡（5-A・B地区）の調査

高槻市郡家本町948-1, 948-2にあたり、小字名は東垣内と称し、現状は宅地である。今回、個人住宅建設工事が計画され、土木工事に伴う発掘届が提出されたため事前に調査を実施した。調査地は阿久刀神社の西方約150mに位置し、郡家本町の丘陵南斜面の裾部にあたる。周辺部の調査により弥生時代後期から奈良時代にかけての遺構・遺物が検出されている。また付近では調査区の南側で掘立柱建物が5棟検出されるなど（「5-E・F地区の調査」『島上郡衙跡他関連遺跡群発掘調査概要・7』1983）、これより南側の郡衙域までは各時代の遺構の密度が高くなっている。今回の調査でもこれらの関連遺構の存在が予想された。調査は南北6m×10mの調査区を設定し、重機を使用して盛土を除去した後、人力で地山面まで掘り下げて行なった。

遺構（図版第2、図2）

基本的な層序は盛土（0.3m）、暗茶褐色土（0.4m）[上部遺物包含層]、黒褐色土（0.2m）[下部遺物包含層]の2層に分かれしており、下層包含層では弥生土器のみ検出している。

地山は黄褐色土であり、礫を多く含んでいる。地山面の標高は約23mを測り南側へ緩やかに傾斜する地形となっている。

今回検出した遺構は奈良・平安時代の掘立柱建物2棟、土壙1基のほか柱穴が多数ある。

建物1は南西隅で検出した。弥生時代の包含層を切り込んでいる。西と南柱列は調査区外へ伸びており、全体を把握するには至らなかった。規模は、桁行一間以上（柱間2.6m）、梁行二間以上（柱間2.4m）、柱通りの方位はN-8°-Eである。柱穴の掘形は一辺0.5mの方形で、深さ0.3mを測る。埋土は暗茶褐色土で、弥生土器・土師器・須恵器が少量出土した。

建物2は北東隅で検出した。弥生時代の包含層を切り込んでおり、北側及び東西のほとんどの柱列は調査区外へ伸びている。規模は、桁行一間以上、梁行二間（柱間1.5m）、



図1. 5-A・B地区調査位置図

柱通りの方位はN-4°-Eであった。柱穴の掘形は一辺0.4mの方形で深さ0.3mを測る。埋土は暗茶褐色土で弥生土器・土師器・須恵器が少量出土した。

土壌1は東側壁際で検出した。隅丸方形を呈し長径1.5m以上、短径0.8m、深さ0.4mを測る。埋土は暗茶褐色土で縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器が少量出土した。

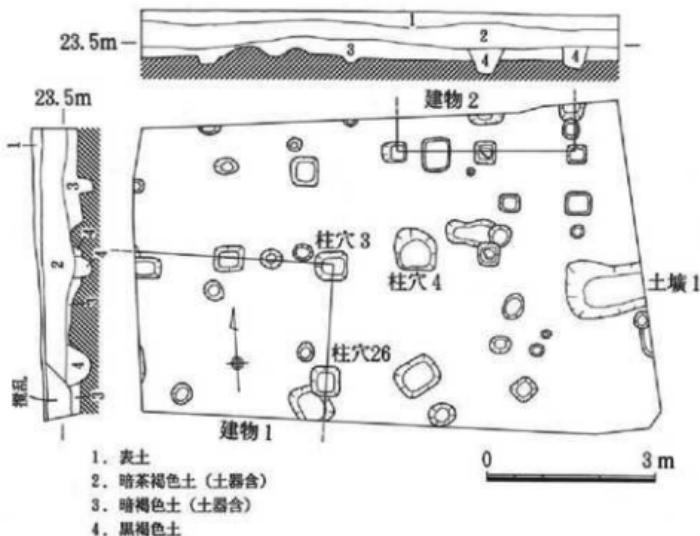


図2. 5-A・B地区 平面図・断面図

遺物(図版第3)

今回の調査で出土した遺物はごくわずかで、またその多くが包含層中のものであり、遺構に伴うものとして明確に把握されるものはほとんど検出しなかった。以下にその概略を記す。

柱穴3からは土師器の皿(9・10)、柱穴4からは瓶の把手(8)、柱穴26からは弥生土器の壺(7)、須恵器の杯(12)を検出した。柱穴3・26はともに建物1を構成する柱穴である。皿(9・10)は同一個体であろう。内面に放射状暗文をほどこし、口縁端部をヨコナデする。色調は黄褐色を呈する。(7)は弥生土器の壺の底部である。外面はタタキ成形、内面はハケ調製で仕上げている。色調は灰黄色を呈する。(12)は須恵器の杯で、短いやや内傾した口縁部をもつものである。色調は淡青灰色を呈する。

土壌1からは縄文土器(1~4)、弥生土器の壺(5~6)、須恵器の杯(11)、石器

(20) を検出した。(20) は叩き石である。全長が 8 cm の砂石製で使用痕がわずかにのこる。色調は淡灰黄色を呈する。

(13)～(16) は包含層上層、(17)～(18) は下層から出土した。(13) は広口の甕の口縁部である。土師質でつよく外反する口縁部をもち、内外面ともナデて仕上げている。色調は黄褐色を呈する。(14) は甕の口縁部である。肥厚した肩部に直立する短い口縁部をもち端部は丸くおさめる。外面はタタキ成形、内面はナデて仕上げている。色調は褐色を呈する。(15) は長胴甕の頸部である。外面はハケ調製、内面はナデて仕上げている。色調は灰黄色を呈する。(16) は綠釉陶器である。軟質・円盤状高台で底部はヘラ切り。釉は黄緑色で、全面に施釉をしている。京都の洛北窯産と思われる。(17)～(19) は弥生土器の甕の底部である。外面はタタキ成形、内面はハケ調製で仕上げている。色調はいずれも灰黄色を呈する。

小 結

今回 2 棟の建物を検出することができ、郡衙北方域における建物群の広がりを知ることができた。これらの建物は律令時代のものと考えられるが遺構に伴う遺物が少なく、また小片であるために年代の特定は困難である。

今回検出した 2 棟はいずれも柱通りの方向が東にやや振れる建物であり、併存していたと考えられる。また南側の 5-E・F 地区においては、検出した 5 棟のうち 4 棟は N-12°～20°-W におさまるものであることが報告されている。これまでの島上郡衙跡や郡家今城遺跡の調査によれば磁北にたいして西に大きく傾く群と東に若干振れる群とに分かれ、前者が 7 世紀後半、後者が 8 世紀後半から 9 世紀初めという年代が与えられている。この年代観によれば、当調査区の 2 棟の建物は 8 世紀後半、5-E・F 地区の 4 棟は 7 世紀後半の年代が与えられ、これらについては時期的に併存はしていないことがわかる。またこれら建物群の性格及び広がりであるが調査区の西側や北側などの丘陵裾部の資料が少ないため論ずることはできないものの、丘陵上では規模の大きな 8 世紀後半の建物群が検出されているなど(「1. 郡家本町遺跡の調査」「島上郡衙跡他関連遺跡発達調査概要・16」高槻市教育委員会 1992)、公的な施設の可能性が指摘されている。今回の建物に関しては、郡衙関連施設の一部と考えるよりも、むしろ郡衙域の北方に広がる郡司層の集落の一部と考えるのが妥当であろう。

今回の調査により郡衙の北方に位置する建物群の一端について新たな知見を得ることができたものの、まだ不明な点が多い。今後の周辺の調査で遺構の広がり、性格などがより明らかになることに期待したい。

(中村)

2. 島上郡衙跡（48-K地区）の調査



図3. 48-K地区調査位置図

高槻市川西北町一丁目953-33番地にあたり、小字名は川西北浦と称する。現状は宅地である。このたび、個人住宅新築工事の目的で土木工事等に伴う発掘届が提出されたため、事前に調査をおこなった。調査は小型ユンボで届出地に幅2m、長さ3mのトレッチを設け、人力で精査をおこなった。基本的な層序は盛土(1.1m)、耕作土(0.3m~0.5m)、青褐色砂質土(0.15m)でその下は黄褐色粘土の地山となる。遺構・遺物等は検出できなかった。

(木曾)

II 郡家今城遺跡

3. 郡家今城遺跡(93-1)の調査

調査地は高槻市郡家新町41-1番地に位置する。小字名は石橋と称し、現状は畠である。今回の調査は個人住宅の建設にさきだつもので、調査面積は455.22m²である。

調査地周辺では山陽道跡や掘立柱建物、井戸など奈良～平安時代の遺構が多数みつかっており、今回の調査地も同様の状況が予測された。

調査はまず重機で耕作土・整地土等を除去したのち、人力で遺構検出作業をおこなった。基本的な層序は耕作土(20cm)、床土(2cm)、黄褐色粘質土(整地土)(20cm)、黄灰色粘質土(地山)である。地山面の標高は約18.5mである。

遺構(図版第4～6、図5～7)

検出した遺構は掘立柱建物、櫛、井戸などである。以下、遺構ごとに記述する。

掘立柱建物

合計7棟検出した。これらの多くは調査区東寄りにあり、重複している。

掘立柱建物1は調査区中央で検出した東西棟である。規模は梁行2間(4.5m)×桁行3間(6.2m)、面積27.9m²である。柱穴の掘形は一辺約0.5mの方形を呈し、深さは約0.2mである。柱の方向はN-9°-Eである。掘立柱建物2と重複している。

掘立柱建物2は、掘立柱建物1の南側に重複して検出した。梁行2間(4.7m)×桁行4間(7.6m)であり、南側に幅2.2mの庇がつく。面積は身舎35.7m²、全体で52.4m²である。柱穴の掘形は一辺約1mの方形で深さは約0.3mである。直径約0.2mの柱根が依存していた。方向はN-4°-Eを示す東西棟である。

掘立柱建物3は調査区東側で検出した東西棟である。規模は梁行2間(4.2m)×桁行3間(6.0m)面積25.2m²である。柱穴の掘形は一辺0.3～0.4mの矩形を呈し、深さは0.2mである。方向はN-9°-Eを示す。約6m西に位置する掘立柱建物1の北側柱筋にあわせて建築している。

掘立柱建物4は調査区北東隅で検出した。梁行2間(4.2m)×桁行3間(5.7m)、



図4. 郡家今城遺跡(93-1-2)調査位置図

面積23.9m²をはかる。方向はN-0°-Eを示す。柱穴の掘形は一辺約0.4mの矩形である。掘立柱建物7を切っている。

掘立柱建物5は調査区北東隅にあり、掘立柱建物4・7と重複する。東側は調査区外にあるが、梁行推定2間×桁行3間(7.8m)の東西棟である。柱列軸の方向はN-12°-Eを示す。柱穴の掘形は一辺0.4~0.5mの方形ないし円形で、深さは約0.2mである。西側にある柱穴(ピット1)からは9世紀後半頃の耳皿が1点出土した。

掘立柱建物6は掘立柱建物3の南側に位置する東西棟である。梁行1間(3.8m)×桁行3間(6.9m)で面積は26.2m²である。柱穴の掘形は一辺0.6~0.8m、深さは0.2m~0.4mをはかる。方向はN-10°-Eである。

掘立柱建物7は調査区東端にあり、掘立柱建物3~6と重複している。梁行2間

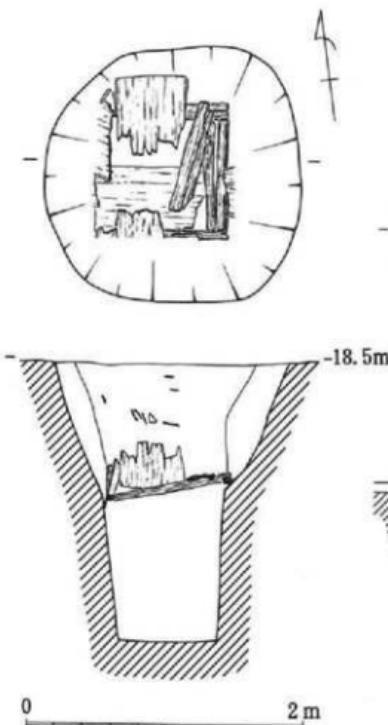


図5. 井戸1 平面図・断面図

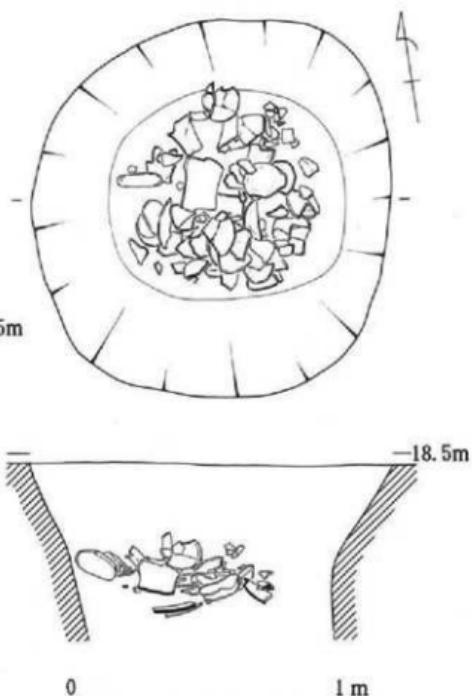


図6. 井戸1上層土器出土状態

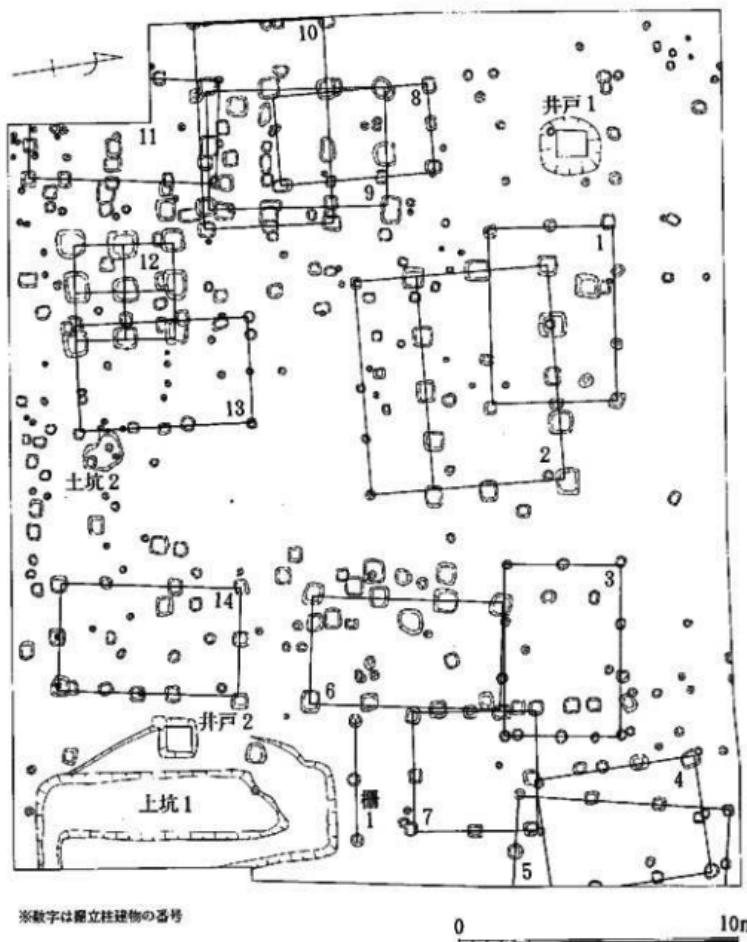


図7. 那家今城遺跡(93-1・2) 平面図

(4.2m) × 衍行 2 間 (4.4m) の規模で、面積は 18.5m² である。平面形からみて倉庫と考えられるが、東柱は検出しなかった。柱穴の掘形は一辺 0.5m、深さ 0.2m の方形である。方向は N - 7° - E である。

柵

柵 1 は調査区東側、掘立柱建物 7 の 2.1m 南側で検出した。2 間 (4.2m) 分あり、掘立柱建物 7 の南側柱列に平行する。

井 戸

井戸 1 は調査区北西隅、掘立柱建物 1 の西側で検出した。規模は、井戸枠の内法一辺 0.8m の方形で、深さは約 2m である。掘形は 2 段に掘削され、上面は一辺 1.8m の隅丸方形を呈している。井戸枠は横木と縦板を組みあわせた簡便な構造であるが、井戸の廃棄時に枠材は引き抜かれ、井戸に蓋をするような状態で埋められていた。縦板を支える横木は地山面より約 1m 下で検出している。これより下方は掘形が一辺約 0.8m の方形となり、ほぼ垂直に掘削されていた。このような状況からすれば、縦板は 2 段に組まれていたとかんがえられる。底からはほぼ完形の土師器の壺と須恵器の壺が一点ずつ出土した。また、埋土の上面には多量の土器があって、このなかには円面硯や風字硯が含まれていた。検出状況からすれば、これらの土器類は一括して投棄され、しかも井戸の廃絶後あまり時間を経ていないようである。この廃絶時期は、これらの出土遺物から 8 世紀末から 9 世紀初頭頃と考えられる。

遺 物 (図版第 7 ~ 15・21 b、図 8 ~ 11)

今回の調査で出土した遺物は、土師器・黒色土器・須恵器・灰釉陶器・製塩土器や土

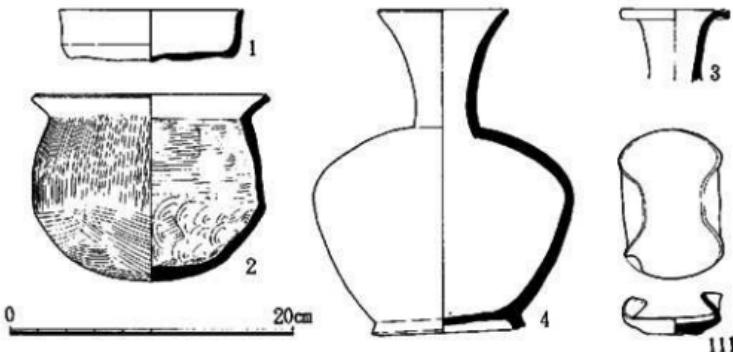


図 8. 遺物実測図 井戸 1 下層 (1~4) 掘立柱建物 4 (III)

鍾などの土器および十製品である。このうちの大半が井戸1上層出土資料である。以下、器種ごとに概要を述べる。

土師器

杯（1・5・6・112）、椀（7～21・113～115）、皿（22～25・44～47）、鉢（48）、高杯（26・49）、盤（50・51）、壺（27）、甕（28～31・52～64）、鍋（65）などがある。

杯Aは3点ある。1は井戸1下層から出土したもので、口径12.8cm、器高2.7cmをはかる。調整は全体に粗く、底部外面には指圧痕がのこる。暗文はない。5は口径15.1cm、器高3.2cmをはかる。調整は底部外面にヘラケズリを施すc手法である。色調は淡茶灰色をなす。井戸1上層より出土した。

杯B（6）は井戸1上層より出土し、口径18cm、器高4.8cmをはかる。口縁部は外傾しながらまっすぐにのび、端部は丸くおさめる。外面の調整は、ヘラケズリ後にヘラミガキをおこなう。色調は淡茶灰色である。

椀A（7～9・113～115）はすべて井戸1上層から出土した。7は口径12.8cm、器高3.4cmをはかる。外面の調整は底部をヘラケズリ、口縁部はヘラケズリ後にヘラミガキを施し、端部はヨコナデである。色調は明茶褐色である。8は口径12.7cm、器高3.9cmをはかり、口縁端部付近までヘラケズリをおこなっている。色調は明茶褐色である。9は口径13.5cm、器高4cmをはかる。色調は明茶褐色を呈し、胎土にはクサリ礫が看取できる。風化が著しい。

椀C（10～21）は口縁端部にのみヨコナデをほどこし、外面には指圧痕が明瞭にのこるe手法を用いている。すべて井戸1上層からの出土である。10は口径12.5cm、器高3.6cmをはかり、色調は淡黄灰色である。外面には粘土接合痕がのこる。11の口径は12.8cm、器高は4cmである。外面のヨコナデは口縁部中位までいたり、他の椀Cとはやや趣がことなっている。胎土にはわずかに砂粒を含み、色調は灰褐色である。12は口径12.8cm、器高4cmをはかり、色調は内面が暗灰色、外面が灰褐色である。13は口径12.8cm、器高3.7cmをはかり、色調は灰褐色である。外面には粘土接合痕がのこる。14は口径13cm、器高3.7cmをはかる。胎土にはチャートなどの砂粒を含み、色調は淡灰褐色を呈している。外面には粘土接合痕がのこる。15は口径13cm、器高4.1cmをはかる。胎土には砂粒を含み、クサリ礫も看取できる。色調は淡茶褐色である。外面には粘土接合痕がのこる。16は口径13.8cm、器高4cmをはかり、色調は淡灰褐色である。胎土にはクサリ礫がみられ、外面には粘土接合痕がのこる。17は口径13.8cm、器高4.1cmをはかり、色調は灰褐色である。外面には粘土接合痕がのこるが、左あがりとなっており他の

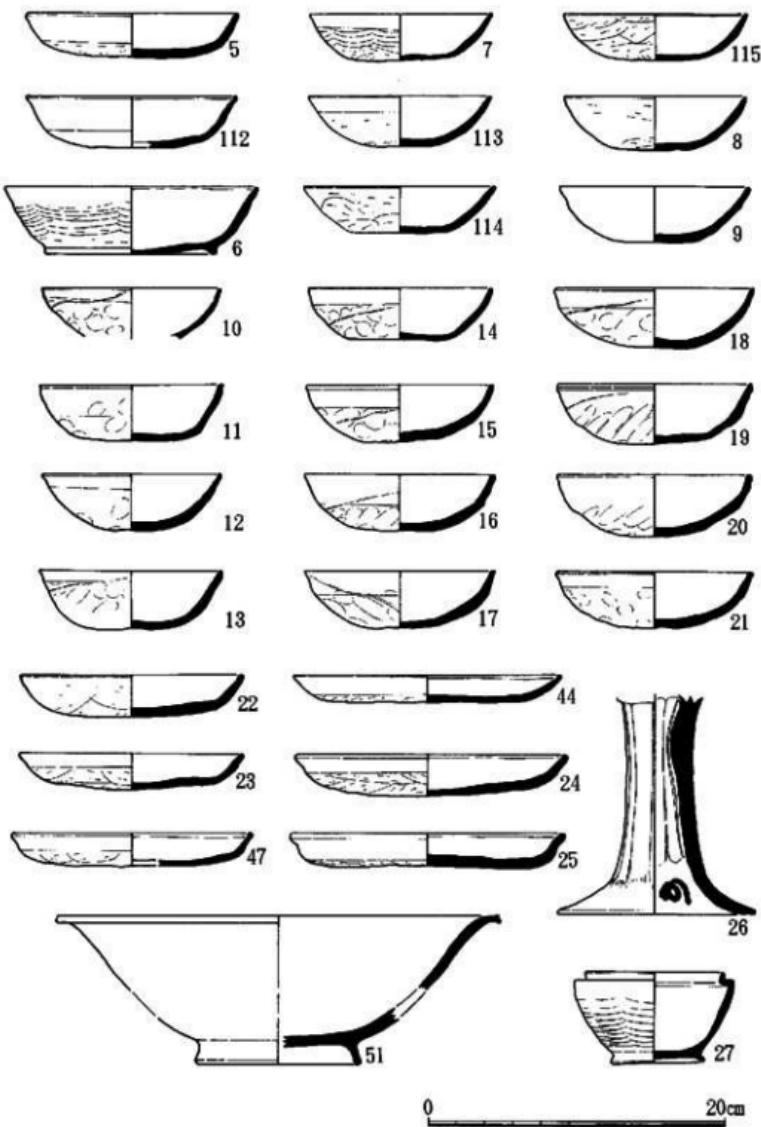


图9. 井戸1上層出土土師器(1) 杯A(5・112) 杯B(6) 暁A(7~9・113~115)
暁C(10~21) 盤A(22~25・44・47) 高杯A(26)
盤B(51) 盤E(27)

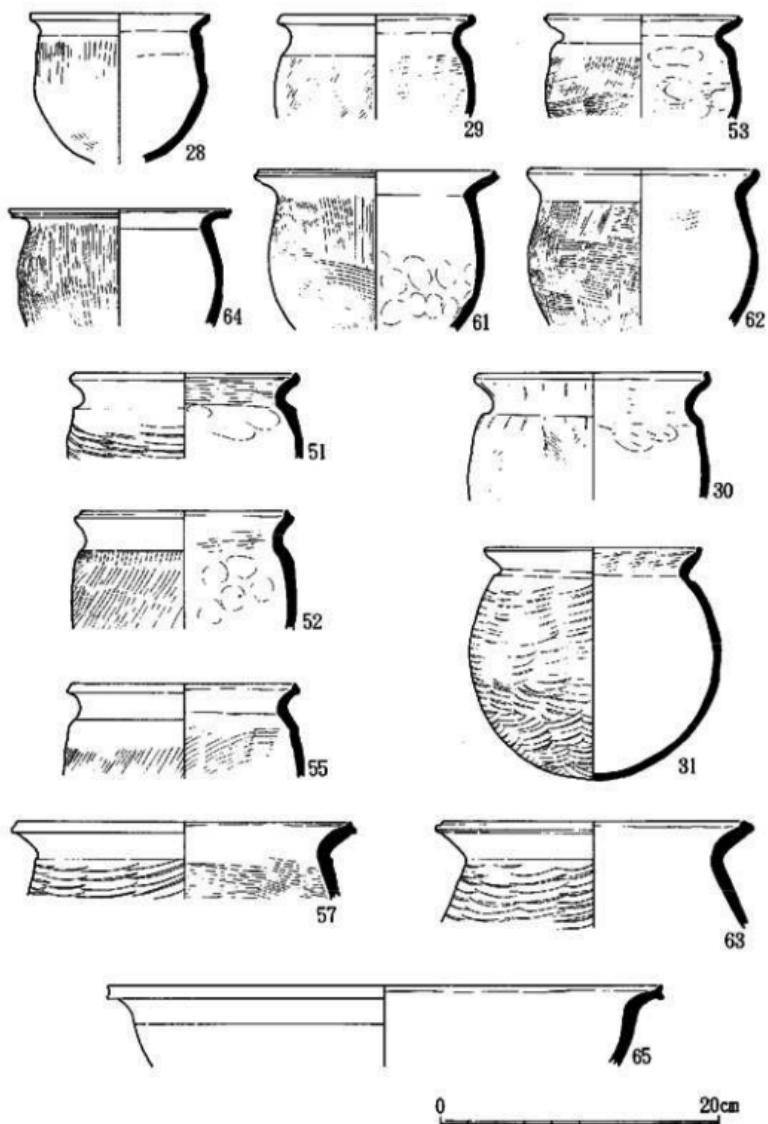


図10. 井戸1上層出土土師器(2) 壺A (28~31・51~53・55・57・61~64) 壺B (65)

椀Cとは方向が逆である。18は口径13.8cm、器高4.3cmをはかり、色調は淡灰褐色である。外面には粘土接合痕がのこる。19は口径13.8cm、器高4.3cmをはかる。胎土にはわずかに雲母やクサリ礫を含み、色調は内外面とも明茶灰色である。外面の指圧痕は強くなでつけたような状況を呈している。20は口径13.8cm、器高は4.4cmをはかり、色調は淡茶灰色である。21は口径14cm、器高4cmをはかり色調は明茶灰色である。胎土中にはわずかにくさり礫を含む。

皿A（22～25・44～47）はすべてc手法を用いている。23は口径16cm、器高は2.6cmである。色調は茶褐色を呈し、胎土には砂粒や雲母を含む。24は口径19.5cm、器高3cmをはかる。胎土にはチャートなどの砂粒を含み、色調は暗茶灰色である。

高杯（26）は現存高15.5cm、裾の直径14cmをはかる。脚のみ出土したが、外面はタテハケ後にヘラで面取りをする。内面は裾にヨコナデを施す以外の調整はせず、しづり痕が明瞭にのこる。内面には記号が墨書きされている。

鉢D（48）は口縁部のみの出土である。口縁部ヨコナデ、体部はタテハケが施されるものの全体に粗雑な調製である。

盤B（51）は内面をハケ後ナデ、外面は比較的ていねいなヘラミガキ調整である。底部外面にはらせん状暗文が施される。

壺E（27）は口径9.8cm、最大径12.3cm、器高6.6cmをはかる完形品である。底部には外面に張り出した低い高台がつき、体部はゆるやかに湾曲しつつのびて、肩は急角度で屈曲する。調整は全体にていねいであり、外面にはヘラミガキが施される。色調は灰褐色～淡黄褐色を呈している。本市での出土は稀である。

壺Aは全形を知るもののが少ない。2は井戸1の底で検出した完形品で、口径16.2cm、器高13.3cmをはかる。体部外面はタテハケ、内面は下半がタタキ成形のままで上半はヨコハケを施している。28は小形の壺で口径12.9cm、現存高10.6cmをはかる。外面はタテハケを施し、内面はなでている。頸部のヨコナデは強く、段をなす。色調は暗灰褐色である。31は口径15.4cm、最大径18.1cm、器高は16.5cmをはかる。内面は口縁部ヨコハケで体部はナデ、外面はタタキ後未調整であり、井戸1上層出土資料のなかでは新しい傾向をもつ。

鍋Aは65が井戸1上層より出土したのみである。

須恵器

杯（30～39・66～72）、高杯（40）、平瓶（73）、壺（3・4・41・71～76）、壺（77～81）、鏡（42・43）などがある。すべて井戸1からの出土である。

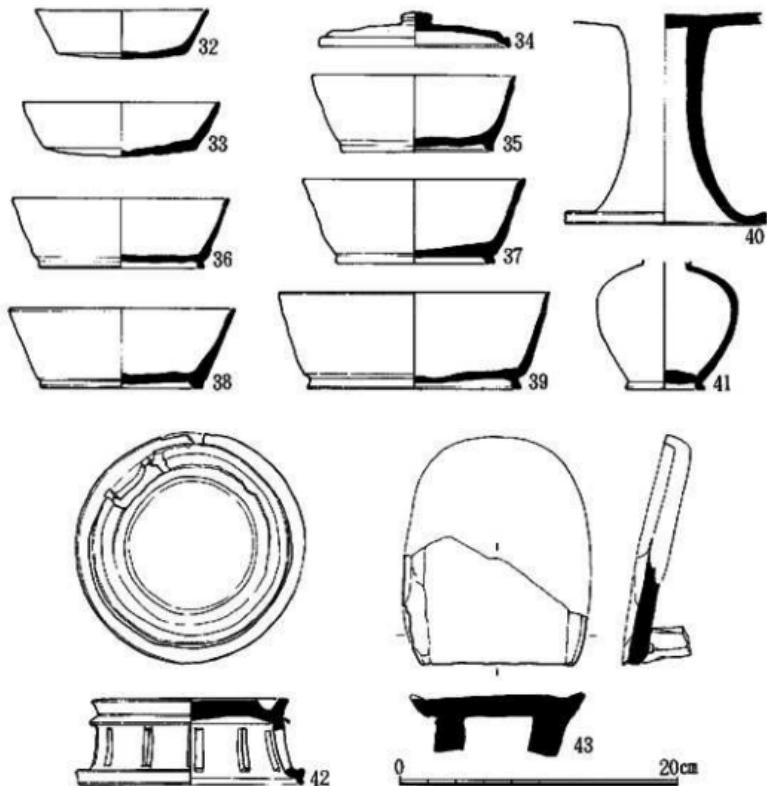


図11. 井戸1上層出土須恵器 杯A(32・33) 杯B蓋(34) 杯B(35-39) 高杯(40)
壺L(41) 円面硯(42) 風字硯(43)

杯A(32)は口径12.3cm、器高3.4cmで色調は暗灰色を呈している。33は口径14.1cm、器高3.9cmをはかる。胎土は砂粒が多く含み、やや軟焼成である。色調は暗灰色である。

杯B蓋(34)は平たい天井部から二段に屈曲する口縁部を持ち、口径13.4cm、器高は2.8cmをはかる。

杯B(35)は口径14.3cm、器高5.5cmで胎土中にはチャートなどの砂粒やクサリ礫を含んでいる。色調は暗灰色である。36は口径15.3cm、器高5cmをはかる。底部外面には焼成前に「+」と陰刻されている。37は焼きひずみがあるが、口径16cm、器高5.7cmをはかる。高台は底部の外端付近にあり近い。38は口径19.2cm、器高は6.9cmである。底部外面には一重丸のような記号が墨書きされている。

高杯（40）は杯部の大半を欠く。現存高15cm、裾の直径15.5cmをはかる。この時期の高杯の出土はあまり多くない。

壺は井戸1下層より壺L（3・4）が、上層より壺E（74）、壺L（41）、壺底部（75・76）が出土した。4はやや丸みをおびた体部から大きく開く頸部がつく。高台は傾し、内端面で接地する。口径9cm、最大径18.3cm、器高は23cmをはかる完形品である。41は体部のみの出土である。現存高9.1cm最大径10.1cmをはかり色調は暗灰色である。

壺（77～81）はいずれも小片であり、完形に復原できるものはなかった。

硯は3点出土した。円面硯（42）はほぼ完形で出土した。前高は6.2cmをはかり、硯面部径14.2cm、陸径9.6cm、海幅1.6cmである。脚台は高さ4.7cm、裾の最大径は16.5cmあり、長方形の透かしは12個穿たれている。全容が知れる硯は、本市では初見である。鳳字硯（43）は海部を欠く。現存長9cm、最大幅13.2cmをはかる。硯背には幅2cm、高さ3cmの脚が一对接着されている。72は杯か皿を硯に転用している。内外面ともに使用していた。

灰釉陶器

耳皿（111）は口径10.5cmの皿の口縁両端部を内側に約1.6cm折り曲げて、耳としている。器高は2.9cmをはかり、色調は暗灰色を呈している。ピット1（掘立柱建物5）より完形で出土した。

製塙土器

製塙土器は調査区の全域で数点～十数点ずつ出土するが、すべて小破片である。最も量の多い井戸1上層でも二百数十点の出土であり、このうち全容の知れるものはなかった。内面をナデ調整したもの（82～94）が最も多く（85.5%）、内面に布圧痕が遺存するものがこれに次ぐ（13.0%）。また内面をハケ調整するもの（103）や、胎土中にモミ痕が看取できるもの（104～106）もわずかながら認められる。

土製品

土錘（107～110）はすべて管状土錘であり、4点とも柱穴埋土中より出土している。107は半分しか遺存していないが、現存長2.5cm、最大径1cm、孔径0.4cmをはかる。108は両端がぼった円筒形をなし、全長4.1cm、最大径0.8cm、孔径は0.3cmとややスリムな形態である。とともにピット44からの出土である。109は全長3.3cm、最大径0.9cmをはかる完形品である。孔径0.3cmで色調は茶褐色を呈している。ピット122より出土した。110は先端が欠失するが、現存長4cm、最大径1cm、孔径は0.4cmをはかる。ピット122から出土した。

小 結

今回の調査では、掘立柱建物7棟のほか、柵と井戸を各1基ずつ検出した。掘立柱建物は5から9世紀後半頃の耳皿が出土した以外には時期を決定する遺物は出土しなかった。ここでは各建物の重複や柱列軸の方向から、その変遷について述べる。

建物のうち、重複しているのは掘立柱建物1と2、掘立柱建物3と6・7、掘立柱建物4・5・7である。このなかで先後関係が判明しているものは、7→3、7→4である。これ以外の建物では他の建物を切っているものはないが、その軸方向が西から東へ振っていき、やがて大きくなり西へ振り戻すことからすれば、掘立柱建物2→1・7→3→6→5→4という変遷がかんがえられる。時期的には8世紀中～後半頃の掘立柱建物2・8を初現とし、最終が9世紀末～10世紀初頭頃の掘立柱建物4ということになる。また、井戸1にともなう建物については、8世紀末～9世紀初頭という廃絶時期や、建物の規模・位置関係からみて掘立柱建物2がふさわしい。

出土遺物に関しては、土師器・須恵器のほかに、製塩土器や土鍾などがみられる。なかでも井戸1上層では土器類がまとまって出土した。個体数は土師器88点、須恵器51点の合計139点である。これらの器種や構成は表1・2のようになっている。これらを概観すると、土師器と須恵器の比率はほぼ2:1となり、ともに杯・皿・椀の食器類がほぼ半数をしめている。土師器杯Aの口径は15cm前後を示すものがあり、皿Aには口径19cm前後(A I)と16cm前後(A II)の2種類がある。一般にヘラミガキや暗文は施されず、外面調整もヘラケズリが多用されている。椀は調整のちがいで2種に分類することができる。ひとつは外面をヘラケズリする椀A、もうひとつに指圧痕のこる椀Cがあり、後者には口径が13cm以下と14cm前後のものがある。一般に時代が降るにつれて暗文

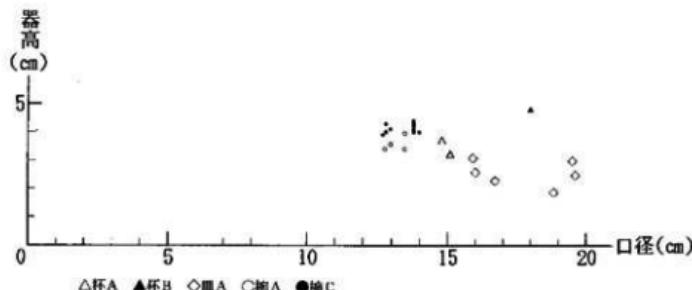


図12. 高さ分布

七 師 器 (88点)									須 惠 器 (51点)							
杯 A B	皿 A	碗 A C	高杯 A	鉢 D	盤 B	壺 E	甕 A	鍋 A	杯 A B	高杯 蓋	壺 B 蓋	甕 E L	鍋 ?	平瓶 A B	甕 A B ?	硯
4 1	13	12 21	4 1	2	1	28	1	5 12 4	1	1 1 3	10	1	6 1 4	2		

表1. 井戸1上層土器の器種別一覧

土 師 器	杯・皿・碗 高杯・盤・鉢 甕・鍋 壺・その他	5 1 7 2 9 1	58.0% 8.0% 33.0% 1.0%	63.7%
須 惠 器	杯・皿・碗 壺・瓶 甕・大型壺 その他	2 1 1 5 1 1 4	41.2% 29.4% 21.6% 7.8%	36.7%

表2. 井戸1上層出土土器の構成

だけでなく法量的にも若干の差を認めることができる。碗AとCの比率はほぼ1:2であるが、この値が時期を示すのかあるいは地域的なものなのかは類似資料の増加を待ちたい。土師器甕Aは完形に復原できたものはわずかであるが、口径でみると13cm前後、16cm前後、22cm前後の二種類にわかれれる。外面をハケ調整するものが大半であるが、これを省略してタタキ痕がのこるものも散見できる。また頸部に段をもついわゆる大和型の甕は28点中13点みられ、非大和型とほぼ同数である。

以上のように、土器の製作技法の簡略化しつつある傾向や、黒色土器が1点も出土していないことから、井戸1上層出土土器は三島地域における8世紀末から9世紀初頭の良好な一括資料としてとらえることができよう。

(宮崎)

4. 郡家今城遺跡(93-2)の調査

高槻市郡家新町41-1番地にあたり、現状は畑である。このたび、個人住宅の建設が計画されたため、事前に発掘調査を実施した。調査面積は528.28m²、小字は石橋である。

調査は、まず重機で耕作土・整地土等を除去したのち、人力で遺構検出作業をおこなった。基本的な層序は耕作土(20cm)、床土(2cm)、黄褐色粘質土(整地土)(20cm)、黄灰色粘質土(地山)である。地山面の標高は約18.5mである。

遺構(図版第16~19、図7~13)

今回の調査区はさきに報告した93-1地区の南側に隣接するうえ、検出した遺構

も掘立柱建物7棟、井戸2基、土坑2基などであり、その分布状況からみて同地区とは密接な関係にあると考えられるため、遺構には一連番号を付した。

掘立柱建物

合計7棟検出した。東寄りの1棟を除けばすべて調査区南西隅に集中している。

掘立柱建物8は調査区西端部で検出した南北棟である。規模は梁行2間(3.2m)×桁行3間(5.6m)、面積17.9m²である。柱穴掘形の平面形は一辺約0.5mの方形をなし、深さは約0.2mである。柱の方向はN-4°-Eである。掘立柱建物9・10に切られている。

掘立柱建物9は、掘立柱建物8の南側に重複して検出した。梁行2間(4.2m)×桁行3間(6.5m)であり、面積は27.3m²である。柱穴の掘形は一辺約0.6mの方形をなし、深さは約0.1~0.2mである。方向はN-7°-Eを示す南北棟である。掘立柱建物8・10を切っている。

掘立柱建物10は調査区西端で検出した東西棟である。規模は梁行2間(4.7m)×桁行3間(7.8m)、面積36.7m²である。柱穴の掘形は一辺0.5~0.7mの方形を呈し、深さは0.2mである。方向はN-6°-Eを示す。掘立柱建物8・9・11と重複する。

掘立柱建物11は調査区南西隅で検出した。梁行2間(3.6m)×桁行3間(6.8m)、面積24.5m²をはかる。方向はN-10°-Eを示す。柱穴掘形は一辺約0.5m、深さ0.3mの方形である。掘立柱建物9・10を切っている。

掘立柱建物12は調査区南西、掘立柱建物11の東側にある。規模は梁行2間(3.2m)×桁行2間(3.6m)、面積11.5m²をはかる総柱建物である。柱列の方向はN-7°-Eを示す。柱穴の掘形は一辺約1mの方形を呈し、深さは約0.5mである。底にはこぶし大の石を数個据え、根石としていた。掘立柱建物13を切っている。

掘立柱建物13は掘立柱建物12の東側に位置する南北棟である。規模は梁行2間(3.7m)×桁行3間(6.2m)で面積は22.9m²である。柱穴の掘形は1辺約0.4m、深さは約0.2mをはかる。方向はN-6°-Eである。

掘立柱建物14は調査区東側で検出した。梁行2間(4.2m)×桁行2間(4.4m)の規模で、面積は24.7m²である。柱穴掘形の平面形は方形を呈し、一辺0.5m、深さ約0.1~0.5mと一定しない。方向はN-10°-Eである。

井戸

井戸2は調査区南西、掘立柱建物14の西側で検出した。規模は、井戸側で内法1

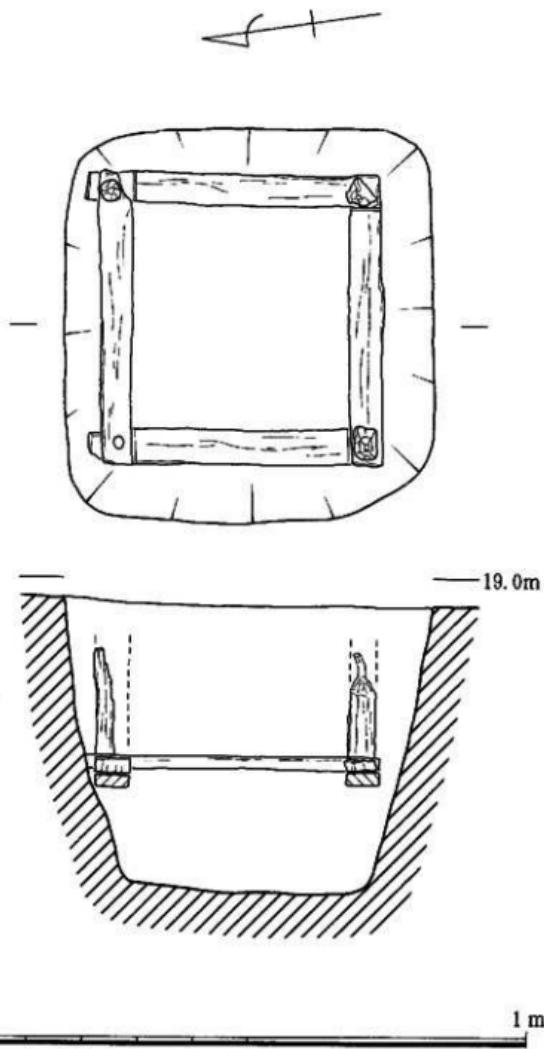


図13. 井戸2 平面図・断面図

辺0.8mの方形をなし、深さは1mをはかる。掘形は上面で一辺1.4m、底面で一辺0.9mの方形を呈している。井戸枠は側板材が既に朽ちて無かったものの、掘形中位には幅10cm、長さ1mの板材を井桁状に組みあわせ、四隅に一辺約0.1mの角材を据えた状態で遺存していた。遺物は底から斎串が1点出土した以外にまとまつたものはない。

土 坑

土坑1は調査区南西隅で検出した。南北11m、東西5mをはかり、東辺の一部は調査区外へとづく。深さは0.1m～0.25mで中央部が一段深くなっている。9世紀後半頃の土器類にまざって、鉄製品が一点出土した。

土坑2は調査区中央、掘立柱建物13の東側で検出した。1.5m×1m、深さ0.1mの不整形をなしている。

遺 物（図版第20～21・図14）

遺物は各遺構から出土するが、そのほとんどが小片で完形に復原できるものは少ない。ここでは遺構ごとに出土遺物の概略を記述する。

井戸2

井戸2から出土した遺物は少ない。土師器杯C（1）は口径13cm、器高3.5cm、色調は淡黄灰色～乳灰色である。口縁部は強いヨコナデをほどこす。底部外面は未調整で指圧根のがこる。須恵器杯B（2）は口径14.2cm、器高5.2cmをはかる。体部外面の高台脇にはヘラで「+」と記されている。

斎串（19）は井戸底で横になった状態で出土した。全長14.6cm、幅2.2cm、厚さ0.2cmをはかる。上端の両側には1か所ずつ切り込みをいれている。

土坑1

土師器は杯や皿（4）などがみられるが多くは小片である。5～7は黒色土器、8は緑釉陶器の椀である。時期的には9世紀後半頃になろう。14は径7.3cm、高さ2.2cmをはかる土製品である。形状は把

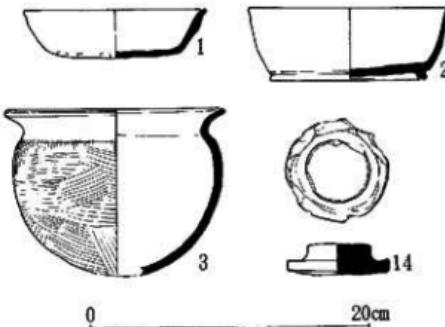


図14. 遺物実測図
井戸2(1・2) 挖立柱建物14(3) 土坑1(14)

手状をなし、突出した部分の上面は平坦であって全体に研磨したような状態である。いっぽう底面は成形後未調整であり、両面のありかたは対照的である。18は管状土錘である。全長4.5cm、最大径1cm、孔径0.35cmをはかる。淡茶灰色を呈している。鉄斧(20)は全長5.6cm、刃部幅4.7cm、厚さ2.2cmをはかる鍛造品である。

土坑2

土坑2からは、土師器杯A(10)や高杯(12)、甕A(13)、須恵器杯B蓋(14)などが出土したがいずれも小片であった。

小結

今回の調査で検出した遺構のうち掘立柱建物は7棟あった。これらは重複関係や建物の方向から、8→10・13→12→11・14という変遷を追うことができ、その時期はおおむね8世紀後半～9世紀中頃にかけてとかんがえられる。さきに報告した93-1地区や過去に調査を実施した北・北西・西の各隔壁地での遺構検出状況とあわせてみると、おおよその変遷をつかむことができる(図15)。ここでは仮に各調査区を北からA～D区としたが、遺構番号は各地区の呼称にしたがっている。

まず8世紀後半ごろ、A～C地区を横切る山陽道の南側にB区建物1・井戸1、C区井戸1、D区掘立柱建物(以下建物と略す)2・8、井戸1がつくられる(図15a)。建物のまとまりや井戸の分布からみて、B～D区に各1単位の屋敷地が想定できよう。B区の中央部には、各時期を通じて山陽道から南側で無遺構となるエリアがある。これには明確な区画などは伴わないが、約5mの幅でまっすぐ南へ続いていることからすれば、山陽道から集落内へと延びる進入路といえるかもしれない。

8世紀末～9世紀初頭になるとB区とD区西半の屋敷地が統合され、B区建物6とD区建物10・12が「コ」字形配置をとる。このときD区井戸1は一気に埋められる。D区東南隅ではあらたに井戸2が掘削されることから、新規に屋敷地がつくられたようである。D区東南隅では井戸2が掘削される(図15b)。

9世紀前半にはB区西側で井戸2が掘削されることから、あらたに屋敷地がつくられたようである。D区では東西に2単位の屋敷地があり、西側には屋と倉が「コ」の字形に配置される。これに対応する井戸は未検出である(図15c)。

9世紀中頃になると、集落の北限を画す山陽道の幅員が10mから6mへと減少する。屋敷地はB区で進入路をはさんで東西にあり、東側の屋敷地はD区西側の建物11までおよぶ。D区東側では建物6・14が縦列に配置される(図15d)。

9世紀後半にはA区で建物1があらたに配置される。この建物は山陽道より北側で確

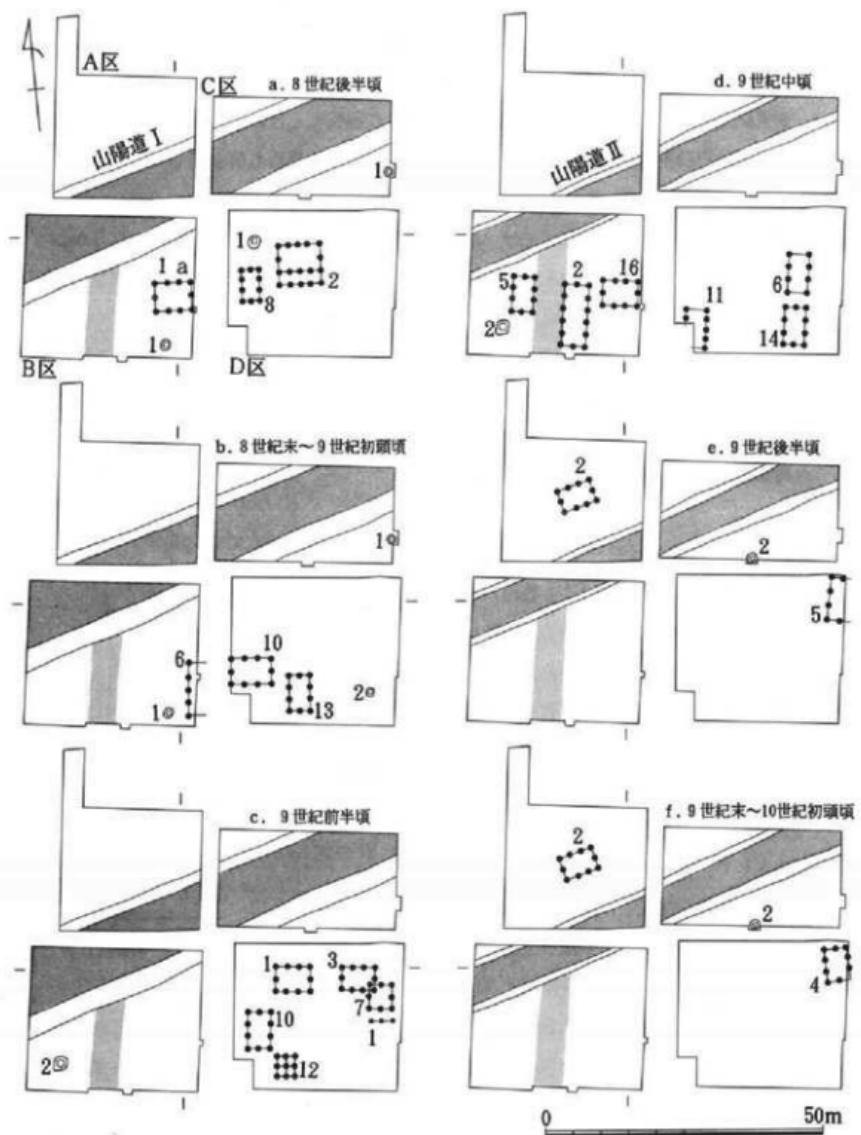


図15. 造構の変遷（想定図）

認された数少ない遺構のひとつである。C区では井戸2があたかも山陽道を意識するような位置につくられる。そしてD区では建物5が建てられる(図15e)。

9世紀末～10世紀にかけてD区建物5を建物4に建替えるほかに大きな変化はなく、その後10世紀前半～中頃までには山陽道の側溝も埋没し、集落も姿を消してしまうようである(図15f)。

今回の調査区およびその周辺では、以上のような変遷をとげるとかんがえられるが、このなかでもっとも大きな画期は9世紀中頃であろう。このころに山陽道は規模を縮小し、集落もこの時期を境に衰退へと向かう。また、建物は南北棟が顕著になってくることも特徴的である。特異な建物としてはA区建物1があげられよう。この建物は他の同時期の建物とは方向を異にするだけでなく、山陽道沿いにこれと平行して建てられていることや、進入路の延長上に位置することなど、道路と関わりが指摘できる建物である点興味深い。

(宮崎)

5. 郡家今城遺跡(93-3)の調査

高槻市氷室町一丁目769-4番地にあたり、小字名は下河原と称する。現状は宅地である。個人住宅建てかえ工事が計画されたため、事前に発掘調査を実施した。調査地は本遺跡の西端に位置し、遺構の分布が希薄な地域にあたる。届出地中央部に長さ1.5m、幅2mのトレンチを設定して、調査をおこなった。小型ユンボで盛土等を除去し、その後人力で壁断面等を精査した。層序の観察と遺構の確認をおこなった結果、層序は盛土(0.4m～0.6m)、旧耕作土(0.15m～0.3m)、床土(0.2m)、黄褐色土(地山)である。なお、遺構・遺物等は検出できなかった。

(木曾)

6. 郡家今城遺跡(93-4)の調査

高槻市今城町17-1にあたり、小字名は鳥黒と称する。現状は畠地である。このたび個人住宅建設工事が計画され、土木工事に伴う発掘届が提出されたため事前に発掘調査



図16. 郡家今城遺跡(93-3) 調査位置図

を実施した。調査地は府立三島高校の南西に位置し、北側における1993年度の調査では奈良・平安時代の掘立柱建物5棟の他、井戸、櫛列、溝などを検出している（「郡家今城遺跡」「島上遺跡群17」1993年）。また西側の1973年度の調査では奈良時代の掘立柱建物・井戸・溝を多数検出しており（「郡家今城遺跡」「高槻市文化財年報47・48年度」1974年）、今回の調査でも同様の遺構の存在が予想された。調査は重機を使用して届出の範囲に従い南北に排土を反転して行なった。

遺構（図版第22、図18・19・22）

遺構は耕土から0.3m下の黄灰色粘質土上で検出した。標高は約17.78mで、南へ緩やかに傾斜している。検出した遺構は奈良・平安時代の溝、土壙、柱穴、落ち込み、などがあるが近代のものである粘土採掘坑は記述を省略する（図版中では網点で表現）。

溝1は調査区の南で検出した。東西に伸び、一部を落ち込みにより壊されている。幅は約5m、深さ約0.54mを測る。溝の掘形は南側に比べて、北岸の方が緩やかに傾斜している。溝の肩は、崩落、削平などの影響をうけているため、遺構の東側以外は明瞭でない。埋土は暗灰色砂質粘土層であり、土器を若干包含しているが遺物のほとんどは下層の灰色砂礫層からである。8世紀後半から9世紀代の須恵器片、土師器片、瓦片などが出土した。1973年度の調査では、島上郡十一条六里と七里を界するとされる東西溝（SD2）を検出しており、溝1はこの延長線上に位置する。またこの溝より北約60mでも東西溝（SD1）を検出しており、この東側の続きは、1993年度の調査でも検出されている。

溝2は調査区の西南隅で検出した。南北に伸び、溝1に切られている。幅は約2m、深さは約1.4mを測る。掘形は台形状を呈する深い溝である。壁面の土層観察により溝の再掘削の状況が確認できる。埋土は粘土が交互に堆積しており、炭、木片などを含んだ層も確認された。また1973年度の調査では、調査区の東端に同規模の南北溝（SD3）が検出されており、今回検出した溝はこの延長部分と思われる。遺物は南端の河床より古墳時代の小型丸底壺、高杯が各1点出土している。な

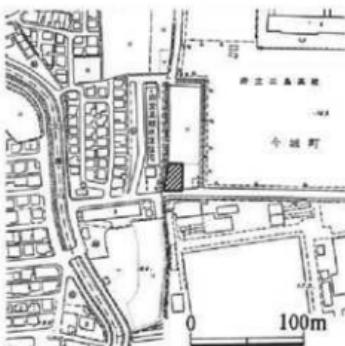


図17. 郡家今城遺跡(93-4) 調査位置図

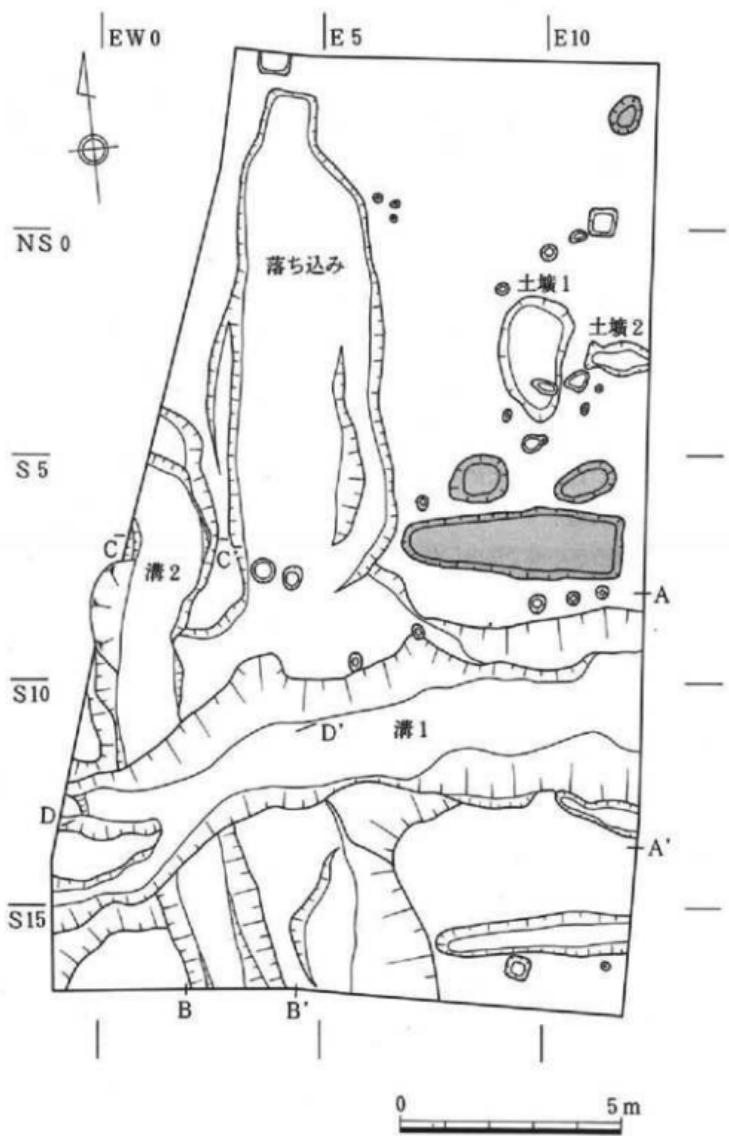


図18. 郡家今城遺跡(93-4)遺構平面図

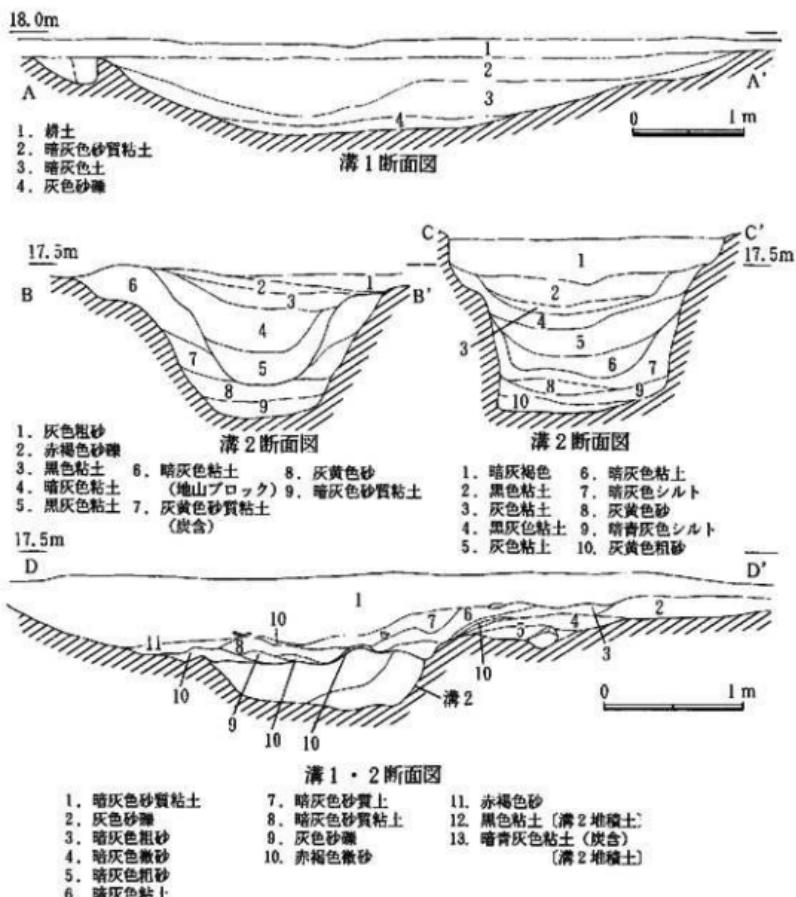


图19. 测断面图

お郡家今城遺跡では古墳時代の遺物の検出例は少なく、今回の調査でも唯一の例である。このほかの遺物としては若干の流木以外はまったく検出されず、古墳時代の溝であるとは断言できない。混入品もしくは南側に古墳時代の構造が広がっている可能性も考えられる。

土壤1は調査区の北東寄りで検出した。不定形を呈し、長径2.7m、短径1.5m、深さ0.2mで埋土は暗褐色土である。8世紀末頃の須恵器、土師器が少量出土した。

落ち込みは調査区の西寄りで検出した。南北に長く南側の一部は溝1を壊している。隅丸方形を呈しており、長径9m、短径3.5m、深さ0.3mである。埋土は暗褐色土である。埋土中より8世紀末～9世紀代の土師器・須恵器が出土した。

遺物(図版第23～26、図20・21)

各遺構や包含層より遺物が整理箱にして15箱程度出土した。時期的には8世紀末～9世紀代の土師器・須恵器が大半を占め、その他に黒色土器・施釉陶器もわずかだが出土する。

溝2からは古墳時代の小型丸底壺・高杯が出土した。小型丸底壺(1)は口径8.5cm、器高9.6cmを測り、やや扁平な丸い体部に外反する口縁を持つ。体部外面はタタキを施した後、体部中位から底部にかけてていねいなハケ調整を施す。口頸部は内外面ともヨコナデ調整で仕上げている。体部内面は強い右方向のナデ調整をおこなった為砂粒が移動しているのが観察され、底部には粘土を掻き取った痕跡が認められる。色調は白黄色を呈する。高杯(2)は底径12cm、残存高7.9cmを測る。口縁部は欠失している。内面にはヘラケズリ、指頭圧痕が認められ、棒状刺突痕は上端が貫通している。外面はハケ調整後ヘラで強くなっている。色調は白黄色を呈する。

溝1からは土師器の壺(12・21)、高杯(19・20)、甕(22・23)須恵器の蓋杯(3～6)、壺(13・18)、鉢(9・14・17)、壺(15)、綠釉陶器(7・8)・瓦(16)・製塩土器(10・11)などを検出した。土師器の壺(12・21)はとともに球形の体部をもつ広口の壺の口頸部である。(12)は外反する口縁部に内側に巻き込む縁端部を有する。口径は16.8cmを測る。頸部外面は粗い縱方向のハケ調整の後ヨコナデ調整を施し、内面には粗いヨコハケを施している。色調は黄白色を呈する。(21)は外反する口縁部を有し、口縁端部は肥厚させ内側に僅かに突出させる。口径は40.6cmを測る大型品である。外面は粗いハケ調整の後、口頸部下までヨコナデ調整を施し仕上げている。内面はハケ調整の後、口頸部下までナデ調整を行ない仕上げている。色調は白黄色を呈する。須恵器の蓋(3・4)は平らな頂部に屈曲する口縁部からなるものである。(3)は口径15.0cmを測り、色調は青灰色を呈する。(4)は口径13.2cmを測り色調は青灰色を呈する。共に胎土・焼成は良好である。杯身(5・6)は中型品の底部であり、口縁部を欠失している。(5)は底径12.9cmを測る。高台はやや内傾しており底部や内側に貼り付けている。色調は白灰色を呈する。(6)は底径11.6cmを測る。高台はやや内側に貼り付けている、色調は青灰色を呈する。共に胎土・焼成は良好である。壺(15)は口径38.4cmを測る大壺の口径部である。大きく外反する口縁部を有し、端部は肥厚させ、外傾する面をもつ。

色調は青灰色を呈する。緑釉陶器(7)は口径8.4cm、器高8.1cmを測る小型の椀である。やや軟質で円盤状高台、底部は糸切りで黄緑色の釉が施される。京都洛北窯産であろう。(8)は緑釉陶器の素地である。底径は6.0cmを測る。軟質で円盤状高台、底部はヘラ切りしている。京都洛西窯産であろう。(7)は9世紀前半から中頃、(8)は9世紀後半と考えられる。瓦(16)は宝相華文の軒丸瓦である。溝1の河床より検出した。瓦の彫り込みは浅く、中芯に向かって盛り上がっている。焼成は硬く、色調は青灰色を呈する。胎土は砂粒が多い。9世紀代と考えられる。

土壤1からは須恵器の杯身(24)、壺(25)を検出した。杯身(24)は口径10.2cm、器高5.3cmを測る小型品である。口縁は緩やかに外反し、端部は尖りぎみに丸くおさめる。高台は体部下端に貼り付けられ、端面は水平を呈する。胎土・焼成共に良好である。

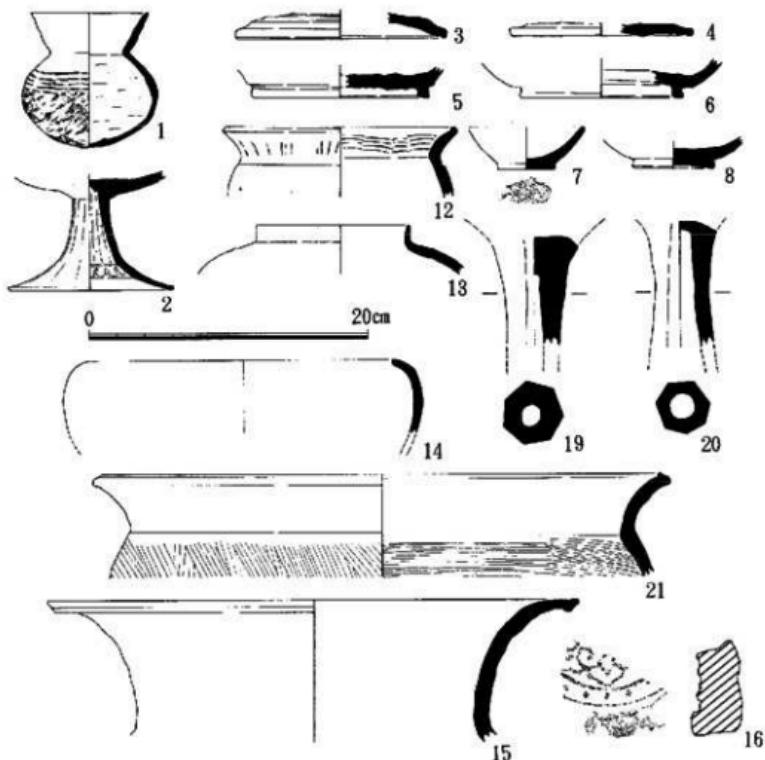


図20. 那家今城遺跡(93-4)出土遺物 溝2(1・2) 溝1(3~8・12~16・19~21)

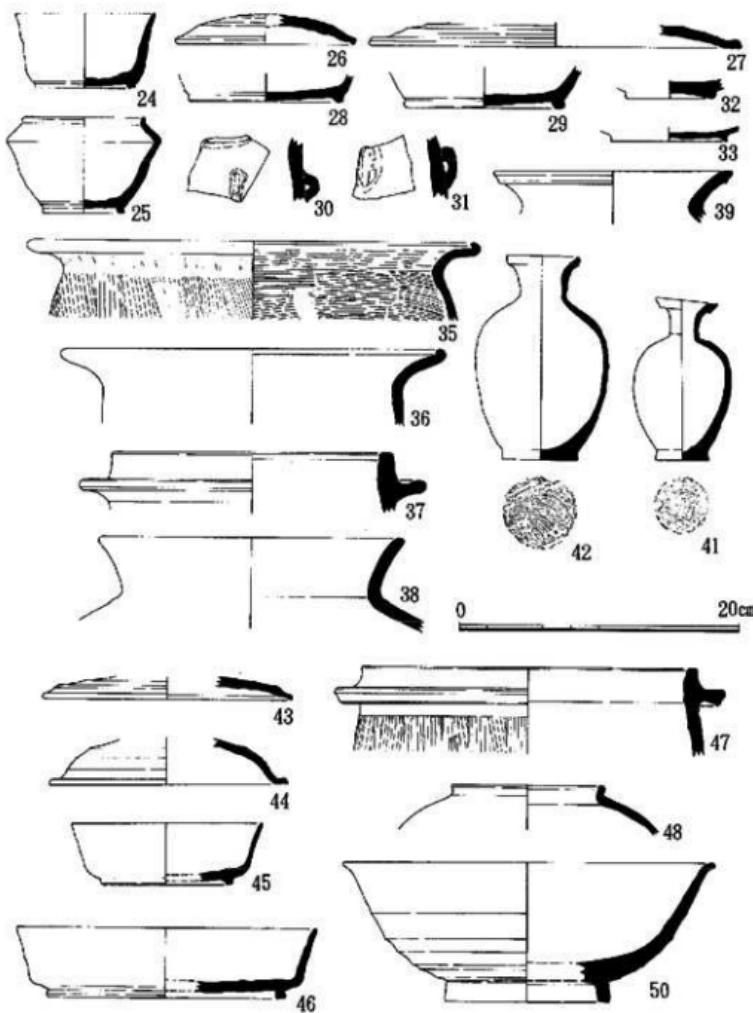


図21. 那家今城遺跡(93-4)出土遺物

土坑1(24・25) 落ち込み(26~33・35~39・41) 包含層(42~48) 粘土採掘坑(50)

色調は青灰色を呈する。壺(25)は口径8.8cm、器高7.9cmを測る小型品である。外反する体部と狭い肩部に外傾する短い口縁部からなる。体部下端に高台を貼りつける。胎土・焼成共に良好である。色調は青灰色を呈する。

落ち込みからは土師器の壺(35・36・40)、羽釜(37)、須恵器の蓋杯(26~29)、壺(30・38・39・41)、鉢(34)、綠釉陶器の素地(32)、黒色土器A類(33)を検出した。

土師器の壺(35)は口頸部のみの残存である。口径は32.5cmを測る。つよく外反する口縁部をもち端部は内側に巻き込んでいる。外面は口縁部下から荒いハケ調整を施した後、頸部までにかけてヨコナデ調整で仕上げている。内面は、口縁部は粗いハケ調整、頸部からは細かいハケ調整を施している。色調は黄橙色を呈する。須恵器の蓋(27)は口径27cmを測る大型品である。平坦な頂部に湾曲気味に端部に至る口縁をもつ。胎土は緻密であるものの、焼成はやや軟質である。色調は淡青灰色を呈する。壺(30)は四耳壺の頸部、把手部片である。環状の把手を付し、外面に自然釉が付着する。色調は青灰色である。壺(31)は双耳壺の把手部片である。板状の把手に円孔が穿たれる。色調は濃青灰色である。壺(41)は口径4.4cm、器高11.6cmを測る。体部は外反に立ち上がり体部上位で内弯し肩部をなす。頸部は外方に立ち上がり口縁部付近で外反し、口縁端部は上下に突出させ、底部は糸切りである。胎土・焼成共に良好であり、色調は青灰色を呈する。京都篠窯産であろう。綠釉陶器の素地(32)は底径6.3cmを測り、軟質で円盤状高台、底部はヘラ切りしている。色調は白灰色を呈する。京都洛北窯産で9世紀後半と考えられる。

包含層からは土師器の杯蓋(43)、羽釜(47)、須恵器の蓋杯(44・45・46)、壺(42・48)などが出土した。土師器の蓋(43)は、口径18.0cm、器高1.6cm、を測る。平坦な頂部にわずかに屈曲する口縁部を有する。色調は赤褐色を呈する。須恵器の杯身(46)は口径21.6cm、器高5.0cmを測る大型品である。外方に立ち上がる短い口縁部からなり端部は丸くおさめる。高台は底部やや内側に貼りつける。端面は少し外傾している。胎土・焼成共に良好である。色調は暗青灰色を呈する。壺(42)は口径5.2cm、器高14.5cmを測る。体部は中位で内弯し、口縁部は外方に立ち上がる。端部は上方に突出させ、底部は糸切りである。やや軟質で白灰色を呈する。京都篠窯産であろう。

また、粘土採掘坑からは灰釉陶器の鉢(50)が出土している。口径26.6cm、器高9.85cmを測る深い鉢である。平らな底部から内弯ぎみに立ち上がる体部をもち、口縁端部は外反する。高台は高く断面は長方形を呈する。体部外面は中位やや上までヘラケズリを施し、釉は内面にのみ流し掛けで施釉している。猿投窯黒帯14号窯式とみられ、9

世紀後半と考えられる。

小 結

今回、里と坪を界するものとされた溝2条を検出し、またその先後関係を明らかにし得たことは大きな成果であった。ここでは今回検出した2条の溝の時期と周辺調査区におけるこれら溝との関係について簡単にまとめてみたいと思う。1993年の調査区では今回検出した東西溝とほぼ同規模な溝を検出している。1973年の調査区では溝を3条検出しておりこのうち北側のSD1は93年の調査区の溝と、南側のSD2と中央のSD3は今回検出した溝のそれぞれの延長線上に位置することがわかる。またこのときにはSD1とSD3とは併存しているという見解が示されている。SD2の東側については1972

年の調査で二股に別れる東西溝が検出されており、SD2の延長と考えて間違いないと思われる（図22）。今回の調査によりSD2の時期は出土遺物からみて、8世紀末頃～9世紀後半ということが明らかとなり、また北側のSD1の時期についても93年の報告で8世紀後半～9世紀後半とされていることなどから、この二つの溝はほぼ同時期に存在したと考えて良いであろう。なおSD3の時期は不明なもの埋没後にSD2が掘られている



図22. 周辺調査区概略図

こと、またSD2は8世紀末を大きく超らないことが明らかであることなどから、SD3の存続時期の下限は現段階で8世紀末までと推定しておきたい。

今回の調査では南北溝と東西溝の存続期間に広きがあるという結果を提示することになったものの、南北溝の時期が確認できなかったという点で若干課題が残る。これら溝については郡家今城遺跡の掘立柱建物の配置において重要な意味を持つものであり、今後周辺の隣接地区の調査で新たな資料が得られる事に期待したい。
(中村)

7. 郡家今城遺跡(93-5)の調査

調査地は高槻市水室町1丁目774-1にあたり、小字名は下河原と称する。現状は水田である。今回、個人住宅新築工事が計画されたため、事前に発掘調査を実施した。

当該地は、遺跡の中心部とみられる府立三島高校の西側に位置し、1989年の西隣りの調査では、律令期の山陽道跡や掘立柱建物、井戸などが検出されている。(「郡家今城遺跡(89-2)の調査」『島上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要・14』1990年)。今回の調査でも、こうした律令期の遺構の検出が期待された。

表土掘削には重機を使用し、その後人力で遺構検出作業をおこなった。基本的な層序は耕作土(0.2m)、床土(0.1m)、淡黄褐色砂質土(整地土、北端部のみ)(0.1m)、黃灰色粘土(地山)となり、地山面の標高はおよそ19.3m、南北側にゆるやかに傾斜している。遺構はすべて、この地山である黃灰色粘土上面で検出した。

遺構(図版第27~32、図24~26)

検出した遺構は、山陽道南側溝、溝、掘立柱建物、井戸、土坑などである。以下、その概略を記す。

山陽道南側溝

調査区北端部で検出した2条の溝である。1989年に西隣りの調査(以下、89-2次調査と表記)では古・新の2時期の南側溝が確認されており、それぞれの東側延長部分である。

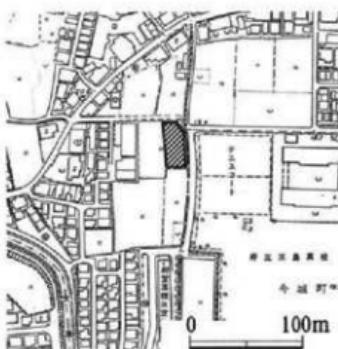


図23. 郡家今城遺跡(93-5) 調査位置図

南側溝Aは幅1.3~2.0m、深さ0.3mで、約6mを確認した。断面の形状は逆台形である。埋没後、南側溝Bに切られている。8世紀ころの土師器、須恵器がわずかに出土している。89-2次調査の側溝3（Ⅰ期山陽道南側溝）につらなるものと思われる。

南側溝Bは南側溝Aの北側で約5mにわたって検出した。幅0.8m、深さ0.1mで、断面は逆台形を呈する。土師器、須恵器の細片が極少量出土している。89-2次調査の側溝2（Ⅱ期山陽道南側溝）につらなるものとみられる。なお、北端部のみにみられた整地土はこの南側溝Bに先立つものと思われ、縁釉陶器などが出土している。

溝

調査区東壁に平行してはしる古・新2条の南北溝を検出し、古溝を南北溝1a、新溝を南北溝1bとする。

南北溝1aは、1.0~2.0m、深さ0.2~0.3m、断面が逆台形を呈する溝である。井戸1の南約3mからみられ、一部、東側肩を南北溝1bに切られるが、29mにわたって検出し、調査区外へ延びている。埋土は暗黄灰粘質土、出土遺跡は8世紀後半~末の土器がその大半である。

南北溝1bは、幅0.9~1.6m、深さ0.1~0.2mとやや浅い溝で、底面はフラットである。東壁沿いに調査区を縦断しており、大土坑1に切られるが、その長さ34mを検出した。そして、さらに調査区の北、南に延びている。なお井戸1の掘形を一部切っている。埋土は黒褐色粘質土で、丸・平瓦や8世紀後半~末の土器等が出土している。

掘立柱建物

掘立柱建物は、合計9棟検出した。

建物1は調査区北東部で検出した東西棟だが、東側は調査区外となる。規模は桁行3間（6m）以上、梁行2間（4.8m）、主軸方位はN-3.0°-E（方位は磁北を使用、以下同じ）を示す。柱穴は、一辺0.2~0.5mの隅丸方形、ないしは直径0.3mの円形で深さは0.3~0.5mを測る。柱穴の1つは南北溝1bを切っている。

建物2は建物1に重複して検出した。桁行3間（6.39m）、梁行2間（3.68m）の南北棟で、方位はN-8.5°-Eを示す。柱穴は一辺0.4mの方形、あるいは直径0.2~0.3mの円形を呈し、深さ0.3~0.5mである。井戸2を切っている。

建物3は、建物2の東に柱筋をそろえて並ぶ同規模の建物である。桁行3間（6.39m）、梁行2間（3.68m）の南北棟で、方位はN-8.5°-Eである。柱穴の形は一辺0.3~1.0mの方形ないし隅丸方形、直径0.4mの円形があり、深さは0.3~0.4mを測る。南北溝1a、bを切っている。

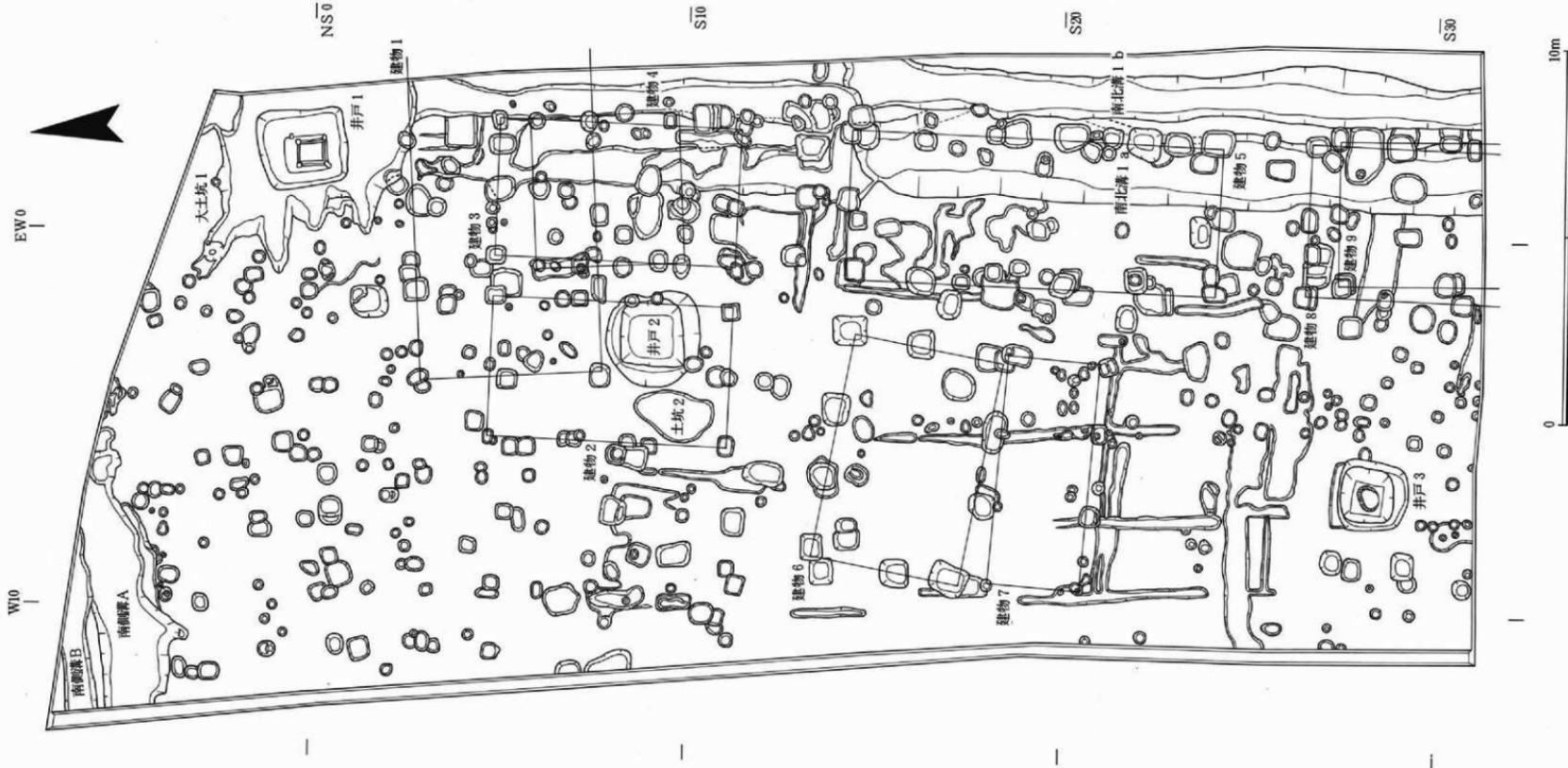


图24. 邱家台城道路(33-5)平面图

建物4は、建物3と建物1に重なって検出した。桁行2間(4.0m)、梁行2間(4.0m)の正方形の平面を持つ建物である。方位はN-3.5°-Eを示す。柱穴は直径0.3~0.6の円形ないし不定円形を呈し深さは0.3~0.5mである。南北溝1a、bを切っている。

建物5は、調査区の中央付近、建物3の南で検出した。桁行5間(10.0m)、梁行2間(4.0m)の南北棟で、方位はN-8.5°-Eである。柱穴は一辺0.3~0.8mの方形、深さは0.4~0.5mを測る。南北溝1a、bを切っている。

建物6は、建物5の西に位置する。桁行3間(6.0m)、梁行2間(4.0m)の東西棟である。方位はN-17°-Eと東への振れがやや人きい。柱穴は一辺0.6~1.0mの方形を呈し、深さは0.6mである。

建物7は建物6の南に位置し、建物6を切っている。桁行3間(6.0m)、梁行1間(2.4m)の東西棟で、方位はN-10.5°-Eを示す。柱穴は直径0.2mの円形のものから長径0.3mの梢円形、さらに一辺0.4mの隅丸方形がみられ、不揃いである。深さはおむね0.3~0.5mである。

建物8・9は調査区南端で重なって検出したが、南側は調査区外に延びている。建物8は桁行2間(4.0m)以上、梁行2間(4.0m)の南北棟である。方位はN-8.0°-Eで、柱穴は一辺0.5~0.7mの方形、深さは0.4mを測る。

建物9は桁行1間(2.8m)以上、梁行2間(3.8m)の南北棟と考えられる。方位はN-6.5°-Eを示す。柱穴は一辺0.5~0.6mの方形で、深さは0.4~0.7mである。

井戸

井戸1は、調査区北東部で検出した。四隅に支柱のある縦板横桟組の木枠をもつタイプだが、枠板や支柱が外側と内側の二重になっている。これは古い外側枠の補修として、内側枠をしつらえたものと思われる。最下段は横板を下広がりにあわせて、集水枠としている。内側枠と外側枠の内法は、それぞれ0.8m、1.0mを測る。掘形は、平面形が一辺約2mの方形で、すり鉢状の立面を呈し、深さは2mである。掘形埋土からは瓦、土器に混じって『萬年通寶』が出土し、内側枠内からは『神功開寶』や9世紀前半の土器等が出土している。南北溝1bに掘形の一部を切られ、大土坑1の開削以前には埋められてたと思われる。

井戸2は、調査区中央部で検出した直径約2.4mの不定円形の掘形をもつ井戸である。井戸廃棄時に枠等の施設は抜き取られており、残存していない。しかし、掘形の下半部が方形を呈することから、方形の木枠があったと推定できる。掘形の深さは1.8を測り、瓦や8世紀末ころの土器が出土している。建物2に切られている。

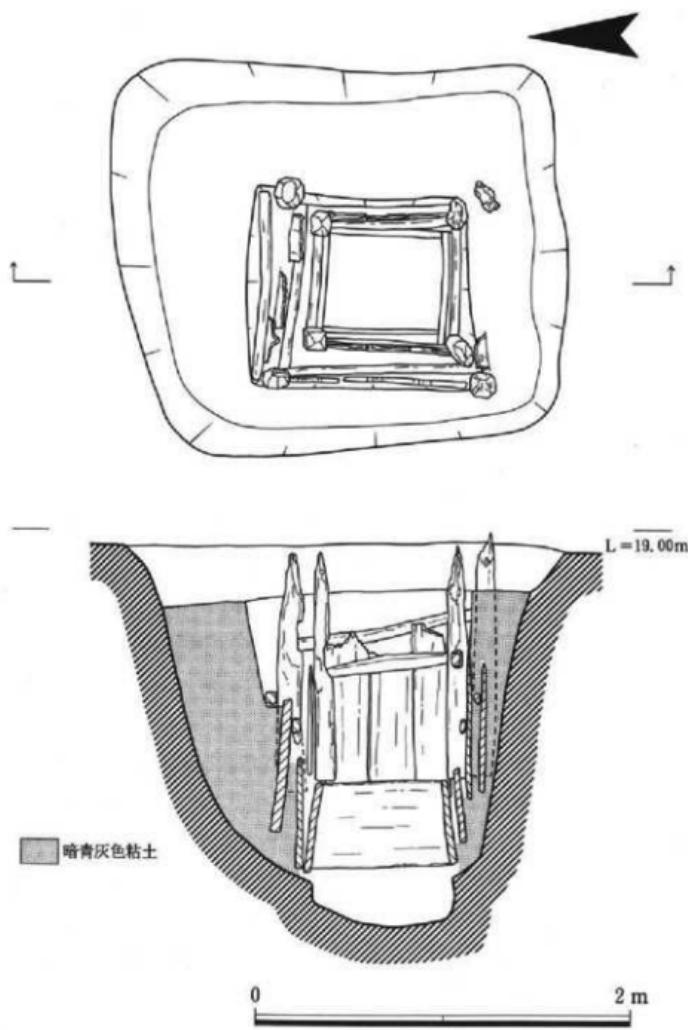


図25. 井戸1平面図・断面図

井戸3は調査区南部で検出した。上段の木枠は方形の縦板組み、下段は一木のくりぬき材を使用している。上段の内法は一辺0.8m、廃棄時に壊され、高さ0.2mのみ残存する。下段は、長径0.8m、短径0.5mの橢円形で、深さ0.9m、厚さ0.08mを測る。外

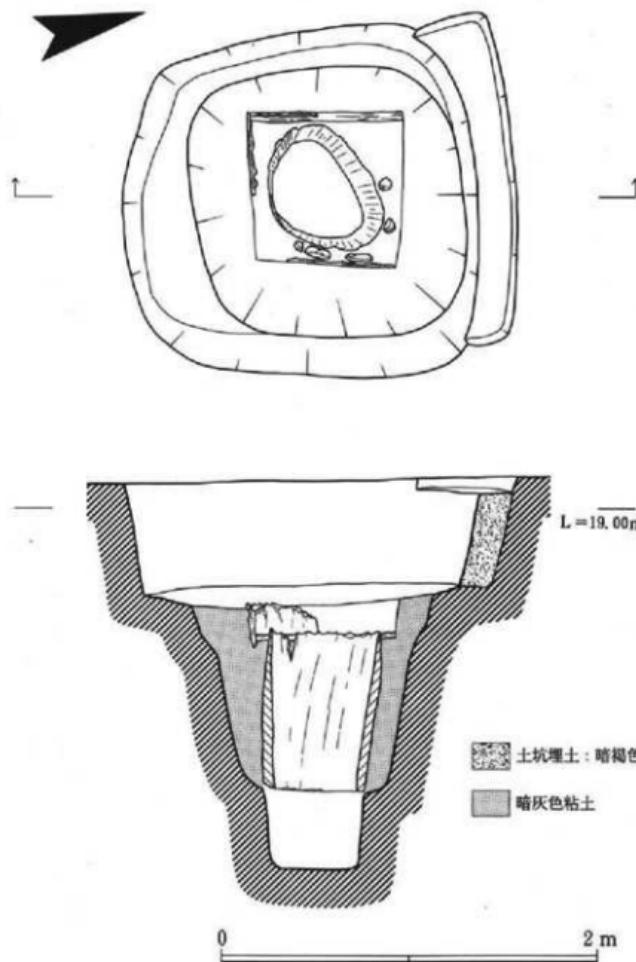


図26. 井戸3平面図・断面図

には手斧痕跡が明瞭に残る。掘形は一辺約1.9mの方形で、すり鉢状を呈するが、深さ0.6m付近でテラスがみられ、底部は下段枠よりも0.4m深く掘り下げられている。現存する深さは2.0mである。枠の内側から8世紀後半の土器や、鉄釘が出土している。

十. 坑

大上坑1は、調査区北東部で検出した。南北約5.0m、東西4.0以上の不定形土坑で、深さ0.3mを測り、井戸1、南北溝1よりも新しい。埋土は灰褐色砂質土、土師器・須恵器細片や丸・平瓦とともに軒丸瓦が出土している。

土坑2は井戸2の西側に位置する。長径2.0m、短径1.5mの不定形の土坑で、深さは0.2mである。埋土は暗褐色土、土器の細片や平瓦片の他、軒丸瓦片（外区外縁）が出土している。

遺物（図版第33～40、図27～30）

今回の調査で出土した遺物には、奈良・平安時代の土器類、金属器、屋瓦、および旧石器・縄文時代の石器などがある。その総数は整理箱60箱あまりであるが、その大多数が土器の破片である。以下、その概略を記す。

1～7は南北溝1bから出土している。1は須恵器杯で、平坦な底部はヘラケズリを施す。口径16.2cm、器高2.6cm、焼成がやや不良で、淡灰色ないし淡灰褐色を呈する。2は須恵器杯である。斜め上方にまっすぐに立ち上がる口縁は、端部近くでやや外反する。口径14.6cm、器高3.6cmを測り、外面上端は暗灰色、他は淡青灰色を呈する。3も須恵器杯で、平坦な底部に、やや内傾して立ち上がる口縁を有する。口径13.0cm、器高3.2cm、淡褐色を呈し、焼成は不良である。4も須恵器杯である。口縁端部は丸くおさめる。底部に粘土ひもの痕跡が残る。口径15.8cm、器高4.8cm、焼成はやや不良で、暗灰褐色を呈する。5は底部に高台のつく須恵器杯である。直立する口縁は上半でやや外反する。高台の端面は水平である。口径13.6cm、器高3.7cmを測り、淡青灰色を呈する。6は須恵器杯で、やや内湾して立ち上がる口縁は深い器形をなし、底部には端面が内傾する小さめの高台がつく。口径15.3cm、器高5.6cmで、暗灰色を呈する。7は土師器甕である。半球に近い体部と強く外反する口縁を有する。口縁内面はヨコハケ、体部内面上半は斜め方向のタテハケ、下半はユビ成形の後ヨコハケ、体部外面は粗いタテハケを施す。口径30.5cm、最大腹径25.7cm、残存高14.0cmを測り、明褐色を呈する。

8はピットから出土した須恵器蓋である。平坦な頂部はナデて仕上げ、やや偏平な宝珠状のつまみがつく。口径17.0cm、器高3.0cmで、淡灰色を呈する。

9～14は南北溝1aから出土している。9は、平坦な頂部には偏平なつまみがつき、屈曲する縁部をもつ須恵器蓋である。口径14.7cm、器高2.2cmを測り、淡褐色である。10・11は薺壺形の壺にともなう蓋である。10は平坦な頂部と直角に折れる縁部からなる。頂部には偏平なつまみがつく。口径8.1cm、器高2.0cmで外面には自然釉が付着し暗灰色、

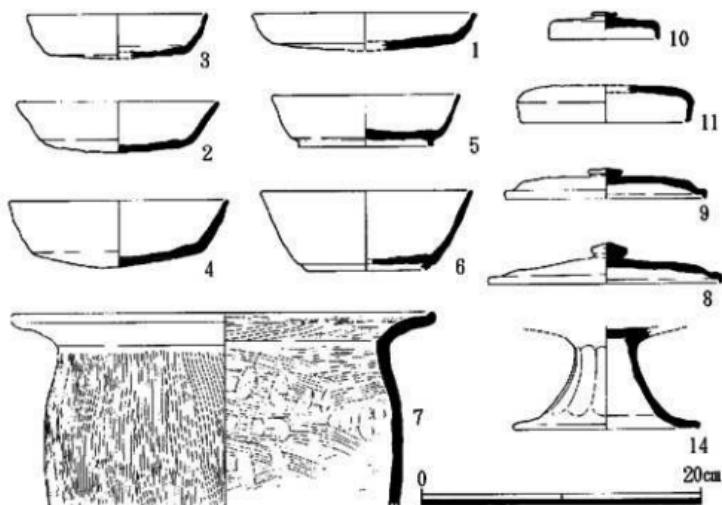


図27. 郡家今城遺跡(93-5)出土土器 南北溝1b(1~7)南北溝1a(9~11・14)
ピット(8)

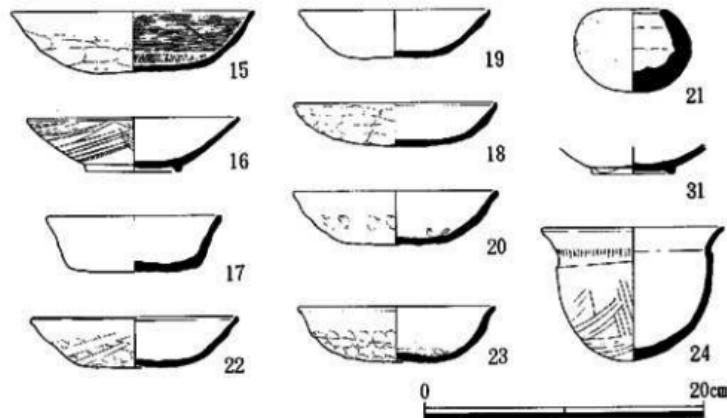


図28. 郡家今城遺跡(93-5)出土土器 井戸1(15~21)井戸2(24)井戸3(22・23)
整地土(31)

内面は暗青灰色を呈する。11は縁部がやや内湾し、頂部のつまみを欠失する。口径12.3cm、現存高2.7cmを測る。外面は自然釉が付着し淡灰色、内面は暗青灰色を呈する。

12は土師器杯である。斜め上方にのびる口縁の上半部はヨコナデを施し、端部は外傾する面をなす。底部には小さめの高台がつき、端面は外傾する。外面にはユビオサエ痕が残り、内面はハケ調整の後、ナデを施す。口径16.8cm、器高4.3cmで明褐色を呈する。13は黒色土器A類の杯である。口縁部はゆるやかに斜め上方にのび、端部は丸くおさめる。底部は欠失する。内外面ともにヘラミガキを施し、内面には螺旋状の暗文がみられる。口径16.8cm、現存高4.5cmを測り、内面と外面上半部は漆黒色、外面下半部は明褐色である。なお、12・13は、南北溝1a出土の他の土器がほとんど破片であるのに対し、ほぼ完形で出土していること、そして、時期的にもやや新しいことから、南北溝1aに直接ともなうものではないと考えられる。

14は土師器高杯で、杯部を欠いている。ラッパ状にひらく裾部に、ヘラケズリによって面取りした短めの脚部を有する。脚部内面はヘラケズリを施す。底部径13.5cm、現存高7.2cmの明褐色を呈する。

15~21は井戸1の枠内から出土している。15は黒色土器A類の杯である。見込み部分はタテ方向のヘラミガキ、やや内湾する口縁の内面はヨコ方向のヘラミガキが施され、一条の暗文がみられる。外面はヘラケズリを施す。口径17.5cm、器高4.4cmを測り、内面は黒漆色、外面は淡褐色ないし黒褐色である。16は黒色土器B類の杯である。やや浅い器形に小さい高台がつく。口縁端部は外傾し、小さい段をなす。外面はヘラミガキ、内面はナデで仕上げる。口径15.3cm、器高3.9cmで内外面ともに黒漆色だが一部は明褐色である。17は須恵器杯である。平坦な底部にやや外反する口縁をもつもので、口縁端部は丸くおさめる。口径12.6cm、器高4.0cmを測る。口縁部外面のみ暗灰色、他は淡灰色を呈する。18は土師器杯である。口縁は内湾して立ち上がり、端部は丸く肥厚する。外面はヘラケズリ、内面はナデで仕上げる。口径14.6cm、器高3.1cmで、淡褐色を呈する。19は土師器椀である。口縁は斜め上方に立ち上がり、上半部はヨコナデで仕上げる。外面はユビオサエの後ナデ、内面はナデを施す。口径13.8cm、器高3.5cmで、淡灰褐色を呈する。20も土師器椀である。やや内湾して立ち上がる口縁は上半部で軽くつまんで外反し、端部は丸くおさめる。外面はユビオサエの後タテ方向のナデ、内面はユビオサエの後ヨコナデを施す。口径14.8cm、器高3.8cmを測り、暗褐色ないし淡褐色を呈する。21は手づくね土器である。球形の体部上方に3.5×2.5cmの稍凹形の孔を穿ち、内部の粘土を指でかきとっている。器壁は厚い。外面は底部でナデを施す他は無調整の部分や、

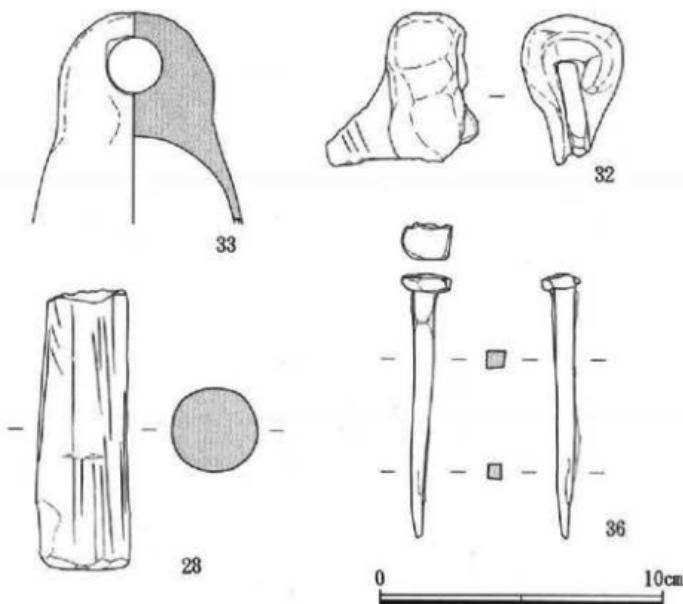


図29. 那家今城遺跡(93-5)出土土製品・金属製品
南北溝1b(32・33)井戸2(28)井戸3(36)

台などに押しあてられた痕跡がみられる。用途は不明である。最大径8.5cm、器高6.0cmで、淡灰色を呈する。

22・23は井戸3から出土した。22は土師器柾である。斜め上方にのびる口縁は端部で丸く肥厚する。外面はユビオサエの後、ケズリを施す。内面はヨコナデ、見込みはナデで仕上げる。口径15.0cm、器高3.6cmを測り、淡褐色を呈する。23も土師器杯である。内湾する口縁は上部でヨコナデして外反し、端部は丸くおさめる。外面下半部はユビオサエ痕のほか粘土接合痕がみられる。内面はユビオサエの後ナデを施す。口径14.2cm、器高4.0cmで、淡灰褐色を呈する。

24は井戸2から出土した土師器壺である。半球形の体部にややすぼまる頸部、外反する口縁を有する。体部外面は粗いハケの後、ナデで仕上げる。内面はヘラでナデている。口径13.2cm、最大腹径10.8cm、器高9.5cmを測り、淡褐色を呈する。

25・26は墨書き器である。25は井戸1の掘形から出土している。須恵器杯の底部に中央付近に「氷」と墨書きし、これの周囲にもかすかながら墨痕がみられる。文字長2.6cm、文字幅2.0である。26は南北溝1bから出土した。須恵器杯の底部中央に墨書きする。「齊」

あるいは「書」か。文字長2.1cm、文字幅1.5cmである。

28は井戸2から出土した土馬の脚部である。直径約3.0cmの円筒形を呈し、粗いハケを施す。底部は平坦でナデている。現存長10.0cm。

29は縁釉陶器で、盤の底部と思われる。小溝から出土している。

30・31は北端部の整地土から出土している。30は灰釉陶器の椀の底部である。東海産と思われる。31は白磁碗の底部である。器壁はうすく、高台端面はていねいに磨いている。

32は南北溝1bから出土した。幅広厚手の粘土を二つ折りにして、板状の粘土を両側からはさんで固定する。現存長5.3cmで、淡褐色を呈する。

33はタコ壺の吊手の部分である。上半部中央には直径1.8cmの孔が貫通する。胎土は砂粒が多く含まれ、淡褐色を呈する。南北溝1bから出土した。

34は井戸1掘形から出土した『萬年通寶』である。暗褐灰色を呈し、やや銹化しているが保存状態は良好である。35は『神功開寶』である。井戸1枠内から出土した。暗青灰色を呈し、保存状態は良好である。

鉄釘36は、井戸3枠内から出土した土師器椀23の中から発見された。方頭部は1.4×1.8cm、厚さ0.6cmの隅丸長方形、脚部は断面正方形で長さ8.8cmである。保存状態は良好である。

27・37は軒丸瓦である。27は軒丸瓦瓦当部外区外縁の一部で、大ぶりな線鋸歯文がみられる。淡灰白色で、土坑2から出土した。37は軒丸瓦瓦当部で、丸瓦部を欠いている。内区に13弁の単弁蓮華文と1+4の蓮子をもつ中房、外区に珠文と細かい線鋸歯文を配する。平城宮6135型式Bb種と同様である。瓦当直徑は16.0cmを測り、暗灰色を呈する。大土坑1から出土した。

38~51は丸・平瓦である。今回の調査では丸瓦33点、平瓦62点が各遺構から出土している(表3)。郡家今城遺跡からこれまでに出土した丸・平瓦は微量であり、予想外の成果である。しかしすべて破片であり、全体をうかがうものはない。38~43は平瓦、44~45は丸瓦で、大土坑1から出土している。38は、広端あるいは狭端の隅部である。凸面はヨコナデ、凹はナデて布目を消している。側面はケズリ調整を施す。淡褐色を呈する。39は凸面はヨコナデ、凹面には布目(5×5~6/cm)が残る。明褐色である。40も広端、狭端いずれかの端部で凸面はヨコナデ、凹面は布目(7×6/cm)が残る。端面はケズリ調整を施す。暗灰色である。43も端部である。凸面はヨコナデでタタキをすり消し、凹面は端部から5.0cmまで布目を消し、それ以下は布目(5×5/cm)が残る。

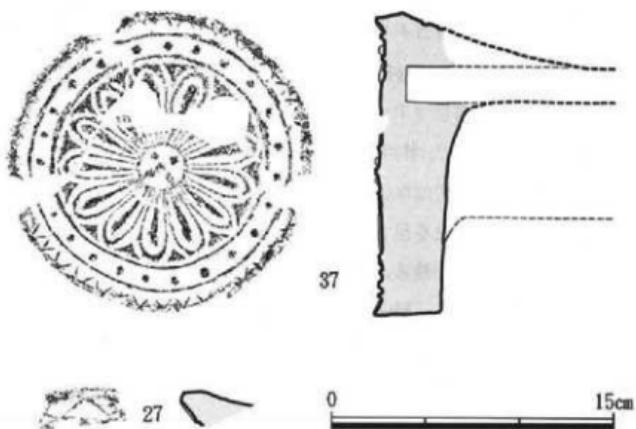


図30. 郡家今城遺跡(93-5)出土軒丸瓦 大土坑1(37) 土坑2(27)

遺構	丸瓦	平瓦	合計
大土坑1	7	26	33
南北溝1b	8	14	22
井戸2	9	7	16
井戸1	4	4	8
土坑2		6	6
山陽道南側溝A		1	1
その他の遺構	5	4	9
総数	33	62	95

表3. 丸・平瓦出土点数

端面はケズリ調整である。41・42は凸面に縦位の繩タタキ痕が残る。41は繩タタキの後、ヨコナデでタタキ痕を消している。凹面には布目($7 \times 9 / \text{cm}$)とともに、模骨痕がみられる。淡褐色である。42は凸面に繩タタキ痕、凹面に布目が残るが、摩滅がはげしく明瞭でない。淡灰白色である。丸瓦44・45は凸面はヨコナデを施し、凹面には布目($6 \times 6 / \text{cm}$)が残る。44は明褐色、45は淡褐色である。

46～50は平瓦の広端あるいは狭端の隅部である。46の凸面はヨコナデ、凹面は細かい布目（ $11 \times 13/\text{cm}$ ）がみられる。端面と側面はケズリ調整を施す。暗灰色を呈し井戸1から出土した。47も凸面はヨコナデ、凹面は布目（ $6 \times 7/\text{cm}$ ）が残り、端面と側面はケズリ調整である。暗灰褐色で井戸2から出土した。48の凸面は縦位の繩タタキの後、ヨコナデを施し、凹面は布目（ $7 \times 10/\text{cm}$ ）と模骨痕がみられる。端面はケズリ調整である。淡褐色ないし黒褐色で、井戸2から出土した。49は摩滅がはげしく凸面の調整や、凹面は布目の大きさは定かではないが、凹面には模骨痕がみられる。端面はケズリ調整、胎土に砂粒を多く含み淡灰色を呈する。ピットから出土している。50の凸面にはヨコナデおよびユビオサエの痕跡が残る。凹面には布目（ $10 \times 7/\text{cm}$ ）がみられる。端面はケズリ、側面はナデで仕上げる。暗灰色で、土坑2から出土している。51は丸瓦玉縁部である。凸面はヨコナデ、凹面には布目が残るが摩滅がはげしい。胎土に砂粒を多く含み、淡黄白色を呈する。ピットから出土した。

52～62は製塙土器である。今回の調査では各遺構埋土から製塙土器が多量に出土しており、南北溝1b出土のものだけでも1177点を数える。これらを大まかに分類すると、口縁端部が面をなすもの（52・53）、軽くつまみあげるもの（54）、無調整のもの（55）があり、内面には粗い布目（58・59）、細かい布目（56・57）、ハケメを施すもの（60・61）がある。62は底部である。54は淡灰色、60・61・62は明褐色、他は淡褐色である。

63はサヌカイトの石鎌である。基部の一部を欠いており、繩文時代に属すると考えられる。現存長2.5cm、現存幅1.7cmで黄灰色土から出土した。

64は国府型ナイフ形石器である。中央に盤状剥片を剥離した際の打撃痕が残り、最初に剥離した剥片でつくったことがわかる。長さ5.6cm、幅1.6cmを測り、ピットから出土している。65～67は大形の調整剥片である。65・67は井戸3埋土から、66は黄灰色土から出土した。

小 結（図31）

今回の調査で検出した遺構と遺物について、若干の整理をおこない、まとめとしたい。最初に遺構の時期と変遷について考えてみよう。まず、山陽道は88-2次調査でⅠ・Ⅱ期の2時期がみとめられた。南側溝AはⅠ期にあたり、集落形成以前に開削されている。南側溝BはⅡ期山陽道の側溝で、9世紀後半に再掘削されたものである。つぎに、遺物や切り合いで時期が判断できるものを列記する。井戸1は、掘形から出土した『萬年通寶』（760年初鑄）と、枠内の埋土出土土器から、8世紀後半に開削され、9世紀前半には廃絶し、大土坑1の掘削とともに埋められたことがわかる。

井戸1の掘形を切る南北溝1bは、8世紀後半以降となり、これよりも古い南北溝1aは8世紀中頃から後半に位置づけられる一方、南北溝1a・1bはともに8世紀後半から末頃の土器が出土しており、その時期に1aが埋められた後1bが掘削され、時を経ずにまた埋められたものと思われる。

井戸3はその上限は明らかでないが、枠内出土の土器により、8世紀後半には埋められていたと思われる。

掘立柱建物1、3、4、5、8、9は、南北溝1a・1bをともに切っており、8世紀末以降である。

さて、掘立柱建物9棟のうち、切り合いで前後関係がわかるのは建物6（古）と建物7（新）のみであり、そのほかは重複する位置にあるものでも、柱穴の切り合はない。そこで、主軸の方位が東に振れるほど新しいというこれまでの知見を援用すると、建物1（3.0°）→建物4（3.5°）→、建物9（6.8°）→建物8（8.0°）、建物2・3（8.5°）の変遷がたどれる。これに建物3と柱筋をそろえる建物5（8.5°）を加え、方位ごとに整理すると3.0°～3.5°（建物1、4）、6.8°～8.5°（建物2、3、5、8、9）の2グループとこれ以外（17°（建物6）、10.5°（建物7））に分けることができる。同時期の建物はほぼ同一の方向性をもつことから、これらはそれぞれ時期をあらわしている。南北溝1との切り合いでより上限は8世紀末であり、古い一群の建物1、4は8世紀末頃から9世紀初頭におかれる。それ以外は決め手を欠くが、89-2次調査で検出した掘立柱建物の方向性と年代観をあてはめると、建物2、3、5、8、9は9世紀前半に比定できる。そして、東に大きく傾く建物6、これを建て替えた建物7は9世紀中頃と考えられる。また井戸2は建物2に切られており、開削された時期は明らかでないが、9世紀前半までに埋められていたと考えられる。

以上を整理して、89-2次調査の成果を合わせて時期別に図示したのが、図3Iである。時期別にみると、8世紀中頃から後半では、建物は西半部（89-2次調査区）のみに存在し、東半部（今回調査区）には井戸1・3がみられ、東端には南北溝1a・1bが掘られる。北端部にはⅠ期山陽道が9世紀中頃まで存在する。8世紀末～9世紀初頭では西半部に建物が展開し、東半部でも南北溝1を埋めた後に建物1、そしてこれの建て替えである建物4が存在する。井戸3は埋められるが、井戸1は存続し、井戸2もこの時期には存在していたと思われる。9世紀前半になると井戸1・2は埋められ、建物の中心が東半部に移る。これらの建物2・3・5・8・9は北側と、東側の柱筋をほぼそろえており、建て替えである建物8・9を1棟とすれば、4棟の建物が同時に存在してい

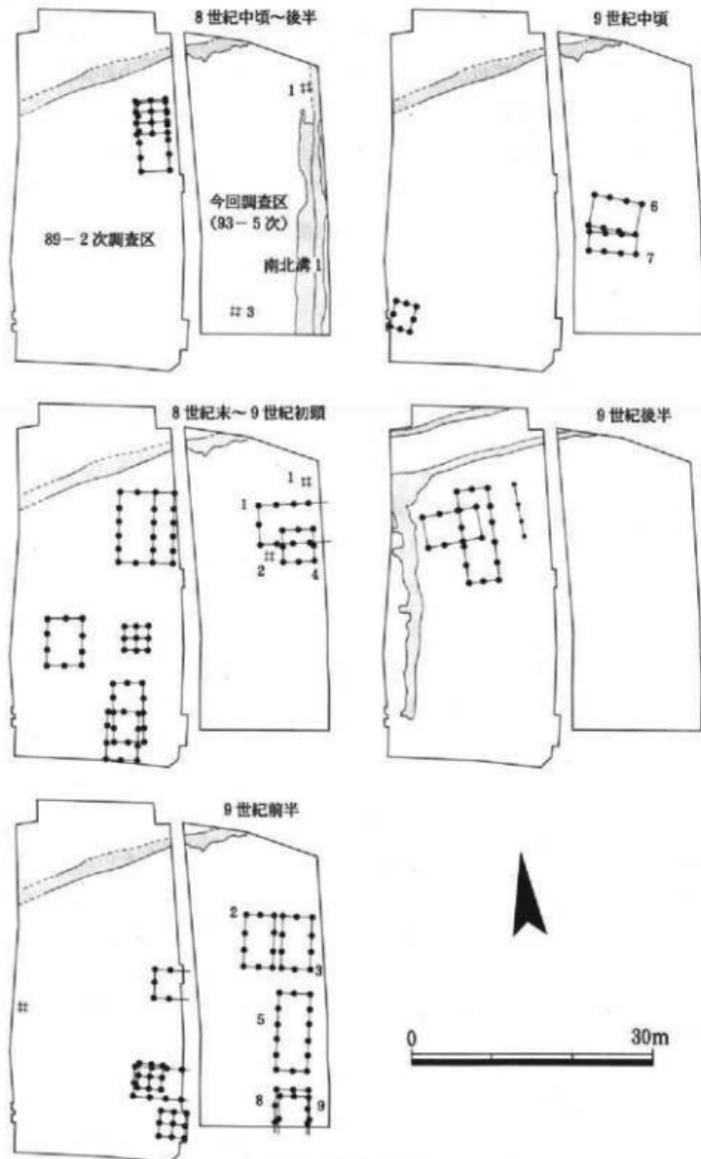


図31. 遺構変遷図

たと思われる。9世紀中頃には建物は減少し、9世紀後半のⅡ期山陽道の整備に伴って、新たに建物が西半部に建てられている。こうしてみると、建物群が8世紀末から9世紀前半ではもっとも充実し、またその中心が西側から東側に移動したとみられることは、集落の変遷や、宅地の利用状況を考えるうえで重要な資料となる。

つぎに、丸・平瓦についてふれてみよう。遺物の項でも記したように、今回の調査では総点数95点の丸・平瓦が出土しており、軒丸瓦も2点出土している。過去の郡家今城遺跡の調査における丸・平瓦の出土数は乏しく、あまり意識されることはなかった事実を踏まえれば、この点数は桁外れの多さといえよう。だが、屋根に葺いた瓦とするには心許ない数字ともいえる。割れて再使用不可能になったものが廃棄され、他はよそへ運ばれた可能性もあるが、全体数が多ければ、それだけ破損する瓦も多いはずで、100点に満たない数では、その総数が少なかったと考えざるを得ない。あるいは、大棟などの屋根の一部に葺いていたとも考えられる。ともあれ、郡家今城遺跡に瓦葺きの建物が存在した可能性を指摘しておきたい。

(高橋)

III 芥川遺跡

8. 芥川遺跡の調査

高槻市殿町63にあたり、小字名は殿ノ内と称する。現状は宅地である。このたび個人住宅建設工事が計画され、土木工事に伴う発掘届が提出されたため事前に発掘調査を実施した。今回の調査地は芥川遺跡の西端に位置し、芥川の幾度にもおよぶ氾濫により、かなり厚い堆積土が存在することが確認されている。付近の調査では縄文時代から弥生時代にかけての遺構、遺物が検出されている。

調査は届出地内に4m×4mのトレンチを設け、層序の観察と遺構の確認をおこなった。層序は盛土(0.25m)、黄色砂質土層〔整地土〕(0.59m)、淡灰褐色砂質土であった。淡灰褐色砂質土には微小な土器片が若干含まれており遺物包含層と考えられるが、時期が判明できる程のものは出土しなかった。

今回の調査区は狭小なこともあって明確な遺構・遺物共に検出することができず、芥川遺跡について新たな知見を得ることができなかった。(中村)



図32. 芥川遺跡調査位置図

IV 郡家車塚古墳

9. 10. 郡家車塚古墳の調査

郡家車塚古墳は高槻市岡本町34番地2、1番地ほかに所在し、池ノ谷、東野々、畔堀内の各小字が錯綜している。古墳は西向きの前方後円墳で、立地としては南平台丘陵の南麓裾部にあたり、ちょうど今城塚古墳の北方約200mのところに位置する。標高は後円部墳頂で39.70mを測る。現状は山林および水田である（図1・2、図33、図版第41）。

郡家車塚古墳については弁天山C1号墳に後続し、前塚古墳にさきだつ王墓として、三島の王権の系譜をあきらかにするうえで欠かすことのできない重要なものである。また古墳そのものも、墳丘の遺存状態がきわめて良く、文化財としてもすぐれた価値をもっている。しかしながら、これまでに本格的な調査はおこなわれておらず、1982年に墳丘の北側で鱗付円筒埴輪が採集されたほかには、段築の形状や主体部の状況など古墳の実態はまったく不明であった。今回は古墳の形状を把握するために、墳丘測量調査、トレンチ調査および遺構探査を実施した。なお郡家車塚古墳では、平成4年度に墳丘北辺部および前方部西端でトレンチ調査を実施し、今回の調査で検出した遺構と一連の遺構を検出しているので、あわせて報告する。

測量調査

郡家車塚古墳の墳丘図については、昭和40年に府立島上高校が1mコンタで測量した簡単なものしかなく、今回の調査を機に再度の測量を実施した。

その結果、後円部の中心部分を含む南半部から前方部の南傾斜にかけては、等高線が整合性をもって推移し、原形をよく保っていることがわかった（付図）。当該部分の現状からすると、古墳は2段築成と考えられる。ただ墳丘南側にある水田面とは高さ1.5m前後の崖面になっていることから、下段が削平されている可能性がある。また後円部の墳頂は直径15~16mの広い平坦面になっていて、予測される後円部の底径から判断すると、その面積はかなり大きなものになる。後円部の東側については、上段の一部



図33. 郡家車塚古墳調査位置図

に擾乱坑が認められたほか、下段については現有水路が走行し、原状は失われていると判断された。また後円部北側の上段は等高線が西北側へおしだされるように乱れており、2次的な土砂の堆積があったと推定された。下段は、ため池を埋め立てた造成地の地下深くに埋没しており、現地表での確認はできない。

前方部については、後世の地形の改変が大きく、とくに南北に横断している里道から西は激しく損なわれ、墳丘の裾部はすでに消失しているとみられる。墳頂の平坦面は断続的に遺存し、西北部の一画がかろうじて原状をとどめている程度である。墳丘の北側については、後円部と同様に、造成地の地下深くに埋没し、現地表での確認はできない。

トレンチ調査

トレンチは墳丘とその周辺に大小あわせて都合12ヶ所設定した（付図）。このなかで、1～6は今年度の調査、7～12は平成4年度に調査したものである。

遺構

トレンチ1は後円部南側裾に南北方向に設けたもので、長さ7.5m、幅1mを測る。層序は上から耕土（0.2m）、淡灰褐色粘質土層（整地層）（0～0.25m）、暗灰褐色粘質土層（遺物包含層）（0.1～0.2m）となり、地山はおおむね灰褐色粘質土層である。遺構としては、トレンチの北寄りのところで検出した現存幅0.4～0.5の葺石列がある（図34、図版第44b）。調査の知見によれば、葺石をほどこすまえに、墳丘裾部にあたるところを約15°の傾斜で地山を削り出し、同時に外縁部以南の地山をほぼ水平に削り込んでいる状況がうかがえた。葺石はこの傾斜変換点から0.6mほど北側に寄ったところに並べられている。傾斜変換点の高さは32.12m、葺石裾部の高さは32.3mである。なお地山の削り込みの深さについては、墳丘部での盛り土の基底部が確認されなかったことから、不明といわざるを得ないが、トレンチの北端部での水田造成時の地山削平面と南半部削平面との比高差からすると、0.4m以上あったことは確実である。葺石は河原石を用い、大きいもので長さ38cm、小さいもので5cmを測るが、大半は10～20cmである。それぞれの石は長袖を墳丘裾部のラインに直交させるものが目立っている。また検出した24点の石材は、花崗岩（1点）、チャート（6点）のほかは凝灰質砂岩もしくは砂岩系のものである。これらのなかでやや東寄りで検出した大きな2つの石は作業単位の境界を示す区画石列の一部と考えられる。周濠については、地山面の形状や埋積土の未検出から、もともと掘削されなかったものとみられる。

遺物としては暗灰褐色粘質土層から若干の円筒埴輪片が出土している。

トレンチ2は南側のくびれ部裾に西南方向に設けたもので、長さ6.1m、幅1mを測

る。層序は上から耕土（0.15～0.2m）、淡灰褐色粘質土層（整地層）（0.1～0.3m）、暗灰褐色粘質土層（遺物包含層）（0.2～0.3m）となり、地山は灰褐色細礫層ないし粘質土層である。遺構としては、トレンチの北東部でくびれ部断面の葺石列を検出している（図34、図版第44d）。ちょうど水田の暗渠と重なりあうこともあって、遺存状態はよくなきが、コーナー部の角度はおよそ110°を測る。現存する葺石列の幅は最大で0.6m

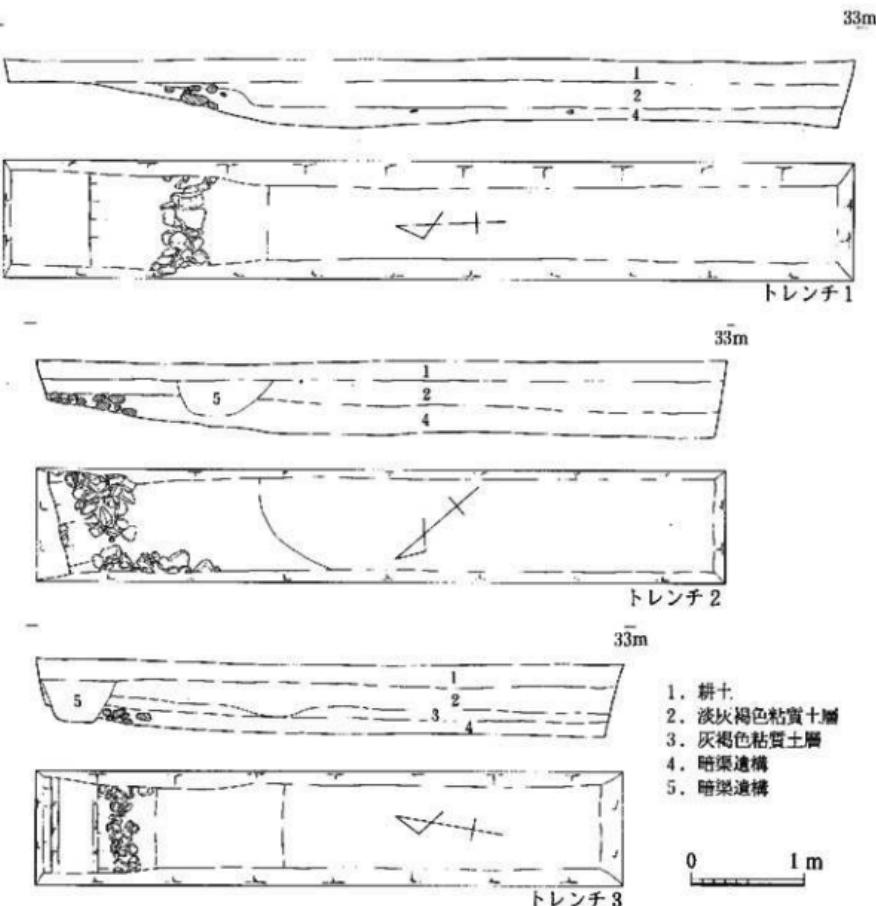


図34. トレンチ1・2・3平面図・断面図

である。墳丘裾部にあたるところは約10°の傾斜で地山が削り出され、それより南側の地山はトレンチ1と同様にはぼ水平に削り込まれていた。葺石列はこの傾斜変換点から1mほど北東側に寄ったところからはじまっている。傾斜変換点の高さは32.04m、葺石列裾部の高さは32.16mである。地山の削り込みの深さについては、このトレンチでも不明であるが、少なくとも0.35mはあったとみられる。葺石はいずれも河原石で、基底石とみられる数点の石は長さ30cm前後を測るが、全体的に小さいものが目立つ。原位置を保っている葺石については、後円部側も前方部側も、裾のラインに小口をそろえるように並べているのがうかがえる。石材は、チャート24点、砂岩系のもの25点である。また地山面の起伏の状態や土層断面の観察からは、周濠の痕跡は見いだせない。

遺物としては暗灰褐色粘質土層から若干の円筒埴輪片とともに瓦器の細片が1点出土している。

トレンチ3は前方部南側の裾に南北方向に設けたもので、長さ5.2m、幅1mを測る。層序は上から耕土(0.2m)、淡灰褐色粘質土層(整地層)(0.15~0.3m)、灰褐色粘質土層(遺物包含層)(0~0.08m)、暗灰褐色粘質土層(遺物包含層)(0.1~0.15m)となり、地山は灰褐色粘質土層である。上下2層の遺物包含層の境は不分明である。遺構は、トレンチの北寄りで葺石列を検出した。ここでも暗渠と重なり、遺存状態はよくない(図34、図版第44c)。現存する葺石列の幅は約0.6mである。葺石直下の地山の傾斜は12°で、トレンチ1・2のそれと大差ないが、外側へいくにしたがい角度がゆるくなり、地山の傾斜変換点と葺石端部の距離は約1.3mと3つのトレンチのなかではもっと大きくなっている。傾斜変換点の高さは32.06m、葺石列裾部の高さは32.12mで、地山の削り込みの深さは、0.25m以上である。葺石は河原石を用い、長径15~25cmの小粒のものが多く、あきらかに基底石とみられる石は1点(長さ35cmのもの)で、いくらかは流失している可能性がある。石材は、チャート17点、砂岩系のもの12点である。またこのトレンチでも周濠の痕跡はみられない。

遺物としては暗灰褐色粘質土層から若干の円筒埴輪片がわずかに出土している。

トレンチ4は後円部南斜面に設定したもので、トレンチ1の延長線上に位置している(口絵3、図版第42a)。この2つのトレンチのあいだは約1.5mの落差のある崖面になっている。長さは13.7m、幅は約1mである。層序は上から腐食土層(0.03~0.08m)、淡茶灰色土層(0.05~0.1m)、茶灰褐色土層(0.05~0.28m)となり、トレンチのやや南寄りで検出した段築平坦面の上方では、茶灰褐色土層の直上に茶灰色土層(0~0.15m)がレンズ状に堆積している(図35、図版第43b)。またトレンチの北寄りで長

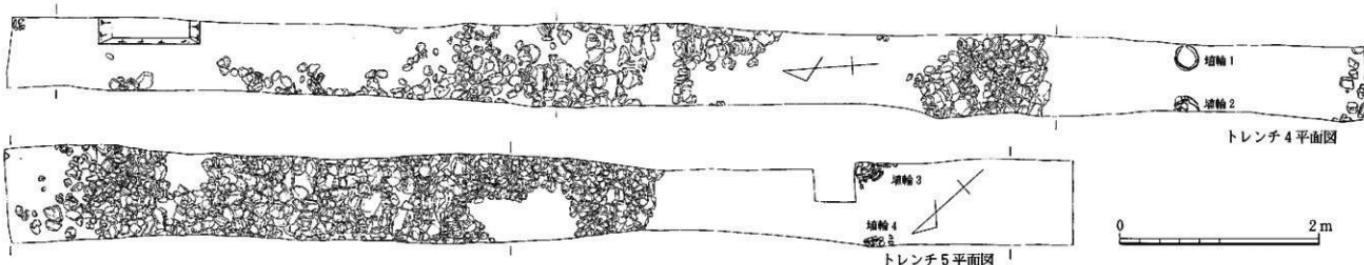
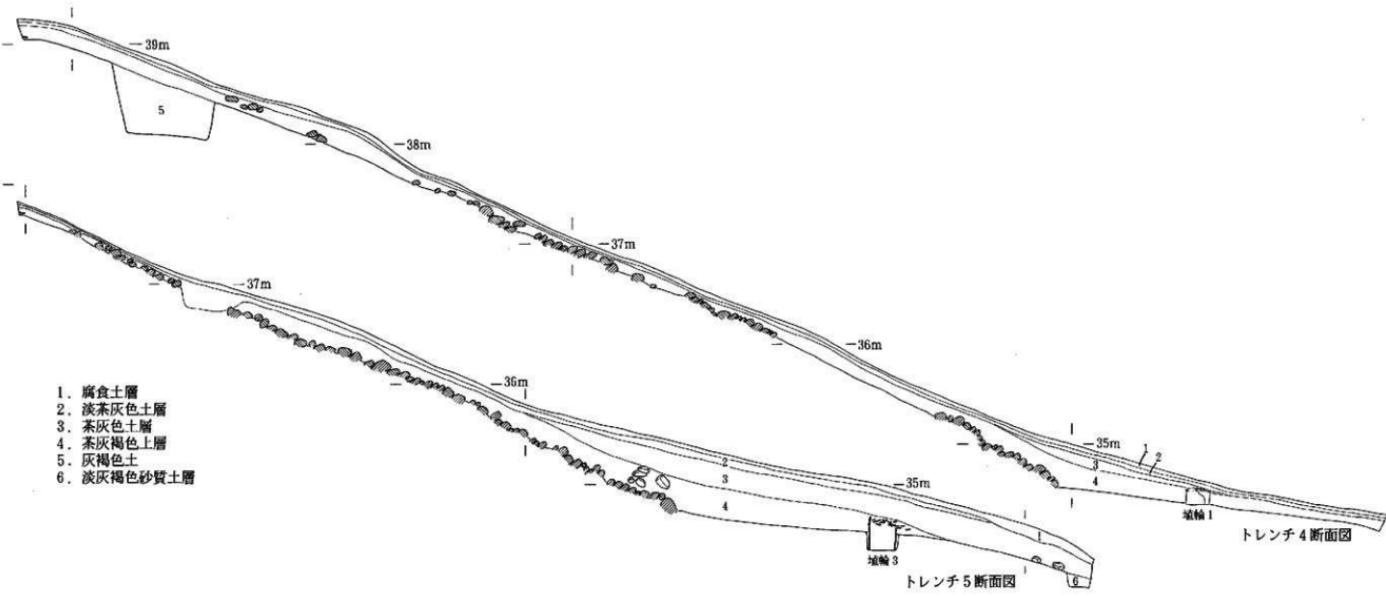


図35. トレンチ4・5断面図・平面図

き1m、深さ0.7mほど部分的に掘り下げたところ、墳丘築成土である灰褐色土（ブロック状の砂質土を含む）を検出した。このトレンチで検出した平坦面の位置とトレンチ1で確認した墳丘裾部から判断すると、後円部は2段に造成されていたと考えられる。墳頂部南縁の標高は39.06m、上段裾部は同じく34.57mで、比高差は4.5mを測る。上段の葺石は裾部ちかくがよくのこっているが、トレンチの北寄りと裾部の上方は大半が流失している。石の大きさは、基底石や区画石に長径20~30cmの長手の直方体のものが多く、あいだを充填する石には直径が10~20cmのものを専用している。遺存部分からみる限り葺き方はていねいで、密である。裾部の基底石列から36.1~36.5mの高さ（水平距離で2.8~3.7m）で大きめの石を平置きにした縦方向の区画石列の一部がみとめられるが、それより上方ではよくわからない。またこの区画石列の下方への延長線上にあたる裾部の葺石には縦位の区画石列はみられず、裾部付近と中位以上の葺石は別個の単位で区画されていたものとおもわれる。なお裾部と中位以上の葺石の積み上げる方向はどちらも基底石列の接線に対して、ほぼ直交して葺かれている。断面図は土層図に、遺存状態のよい葺石のところをひきとおした岡面を合わせたものである。葺くときには下から上へ順次積みあげていくが、そのさいに上にくる石がかなりの割合で下の石に重なっているのが観察される。また個々の石をみると水平におくものよりも、むしろ墳丘側へ傾いているものの数が多く、なかには45°ちかく傾き、突き刺したような状態で検出したものもある。なお基底石については長側面を前に向けて置くのを基本にしている。こうした置き方はこのトレンチで検出した縦方向の区画石列を並べるときにも同様である。上段の傾斜はおおむね25°であるが、裾部付近では約30°ときつくなっている。

平坦面は、墳丘下段の天端が不明瞭ながら、幅約3mと推定され、外側に向かって7°ほど傾斜している。平坦面のほぼ中央では立ったままの状態の円筒埴輪の基部が2点（埴輪1・2）出土している。これらの埴輪は上段を取り巻くように配されていたとみられ、中心間の距離は約0.5mを測る。配列に際して、樹立するための溝を堀った痕跡はみられなかった。埴輪自体の底径はそれぞれ24cm前後である（図版第47b）。

墳丘下段の上端部とみられるところで若干の葺石を検出したが、その多くはすでに流失していて、天端の原状をみることはできない。

なおトレンチ内で原位置をたもっているとみられる葺石は全部で454個あり、石の種類はチャートが182個、砂岩系のものが272個である。石の種類と大きさとの関係をみるとチャートはやや小振りのものが多く、大きい日の石材を多用する基底石や区画石には砂岩系のものが目立っている。

トレンチ5は南側のくびれ部に設けたもので、トレンチ2の延長線上に位置し、そのあいだには高さ約1.5mの崖面がある(図版第42b)。長さは10.7m、幅は約1mである。層序はトレンチ4と同様に上から腐食土層(0.02~0.13m)、淡茶灰色土層(0.03~0.08m)、茶灰褐色土層(0.05~0.3m)となり、茶灰褐色土層の直上には茶灰色土層(0~0.28m)が堆積している(図35、図版第43a)。またトレンチの南端で一部を掘り下げたところ、墳丘築成土とみられる淡灰褐色の砂質土が検出された。北端部での標高は37.7mで、上段裾部は同じく34.74mである。ただトレンチが墳頂部にいたっていないので、算出される2.96mの数値は単なる比高差でしかない。葺石は北寄りで一部流出していると中位および裾部付近で後世に攪乱をうけている以外はよくのこっている。葺き方はトレンチ4と同じく、ていねいである。裾部の基底石列から1.1mの高さ(水平距離で2m)で大きめの石を平置きにした横方向の区画石列がみとめられるが、それより上位では37.7mの高さ(トレンチの北端)まで明確な横方向の区画石列はみられず、当該部の葺石の施工は大きく上下の2単位にわけられるようである。また縦方向の区画石列についても、トレンチ内では指摘しがたいが、充填された葺石の積み上げる方向は基底石列の接線に対して、下位の石材は直交して葺かれるのに対し、上位の石材はおよそ75°の角度で一様に斜行しているのが看取される(図36)。葺石の傾斜は計測部位によって20°~30°とひらきがあるが、おおむね25°である。葺石は全部で631個検出し、種類はチャートが241個、砂岩系のものが385個、花崗岩が3個、頁岩が2個である。このうち主要な石材であるチャートと砂岩系のものをみると、前者が相対的に小さくておもに下位の充填石にもちいられ、後者が大ぶりで基底石や区画石をはじめ、上位の充填石に多用されている。この傾向はトレンチ4よりも顕著である。また花崗岩と頁岩はいずれも10cm前後と小さい(図36)。

平坦面は、墳丘の下段側が削平されているため、全幅はわからない。現存する幅は2.7mで、5°程度傾斜している。上段裾部から2m外側に埴輪列がある。検出した2点のうち東側の埴輪3は蟠付円筒で、全形が復元できる。西側の埴輪4については原位置を保っておらず、したがって樹立の間隔もよくわからない(図版第47c)。なお埴輪を立てる際には、個別に坑を掘り込んでいる。また堆積土中からも若干の埴輪片が出土しており、円筒のほか、家形埴輪の部材とみられるものもある。

なおトレンチ5はくびれ部の確認のために設定したものであるが、上段の葺石裾部の形状などにも屈曲部が検出されなかった。

トレンチ6はトレンチ5で確認されなかった墳丘南側のくびれ部について、上段の葺

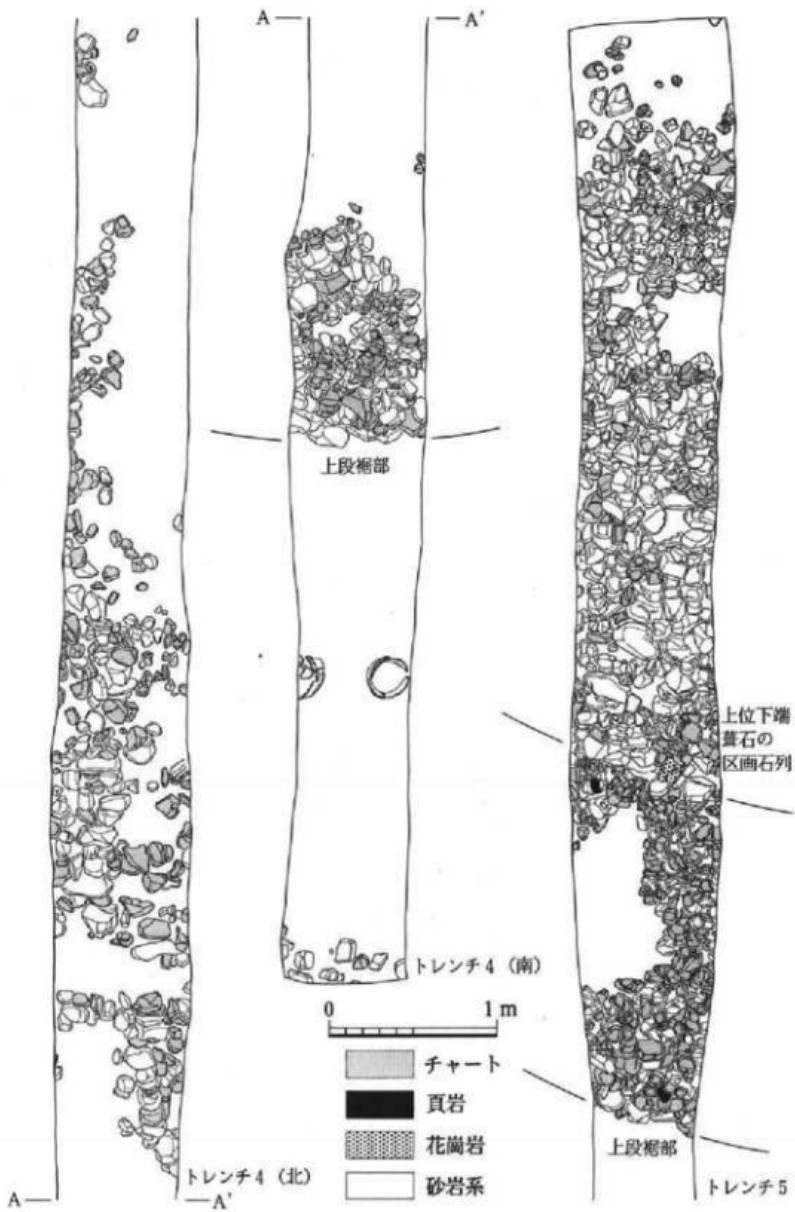


図36. トレンチ4・5岩種別菖石検出状況

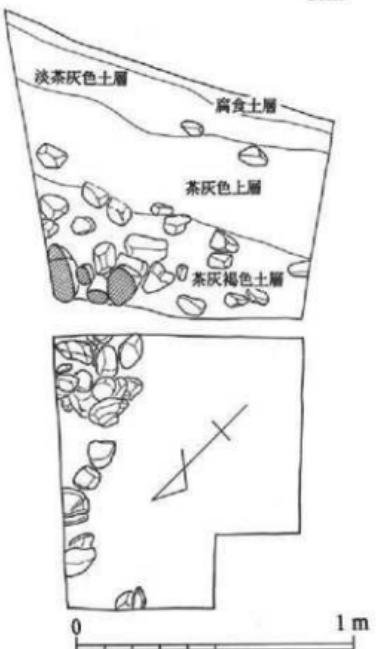


図37. トレンチ6平面図・断面図

石裾部での屈曲点を検出するためにトレンチ5のすぐ西側に設定した。トレンチの規模は約1m四方で、西側の一角は立木を回避するため除外した(図37、図版第44a)。層序は上から腐食土層(0.05~0.08m)、淡茶灰色土層(0.07~0.2m)、茶灰色土層(0.1~0.3m)、茶灰褐色土層(0.05~0.3m)となり、茶灰褐色土層には崩落した葺石材がかなり含まれていた。平坦面の標高は34.8mである。調査の結果、くびれ部とみられる葺石裾の屈曲部を検出したが、大量の崩落土に加えてトレンチ5でみつかった擾乱坑がトレンチ6までおよんでいたために、遺存状態はよくない。また原位置で検出した24点の葺石の内訳は、15点の砂岩系のものと9点のチャートである。遺物としては崩落土から多くの埴輪片が出土している。円筒のほかに朝顔形や壺形とみられるものもある。

トレンチ7は古墳の北側裾部に設けた長大なものである。後円部ではくびれ部から北東にかけて円弧状に全周のおよそ4分の1にあたる39.5mを幅約3mで掘削し、前方部では西方向に幅2.5~4mで18mにわたり掘削した。なお前方部側のトレンチではやや西寄りのところで、南に幅3m、奥行きで3mほど拡張し、葺石の裾部の確認をおこなった。当該トレンチはもとあった農業用ため池を埋め立てたところで、約2mの盛土の下は0.2~0.3の暗灰色のヘドロ層で一様に覆われていた。

後円部側で検出した葺石は墳丘下段の裾部にあたり、幅は基底石から約2m内側で池の汀線に接し、それ以上は削平されていた。残存部分では、ところどころに流失箇所はあるものの、全体としては良好に保存されている(口絵4、図38、図版第45)。葺石裾部の標高は、断面1で33.26m、同2で33.24mである。また下段裾部分の傾斜は、断面

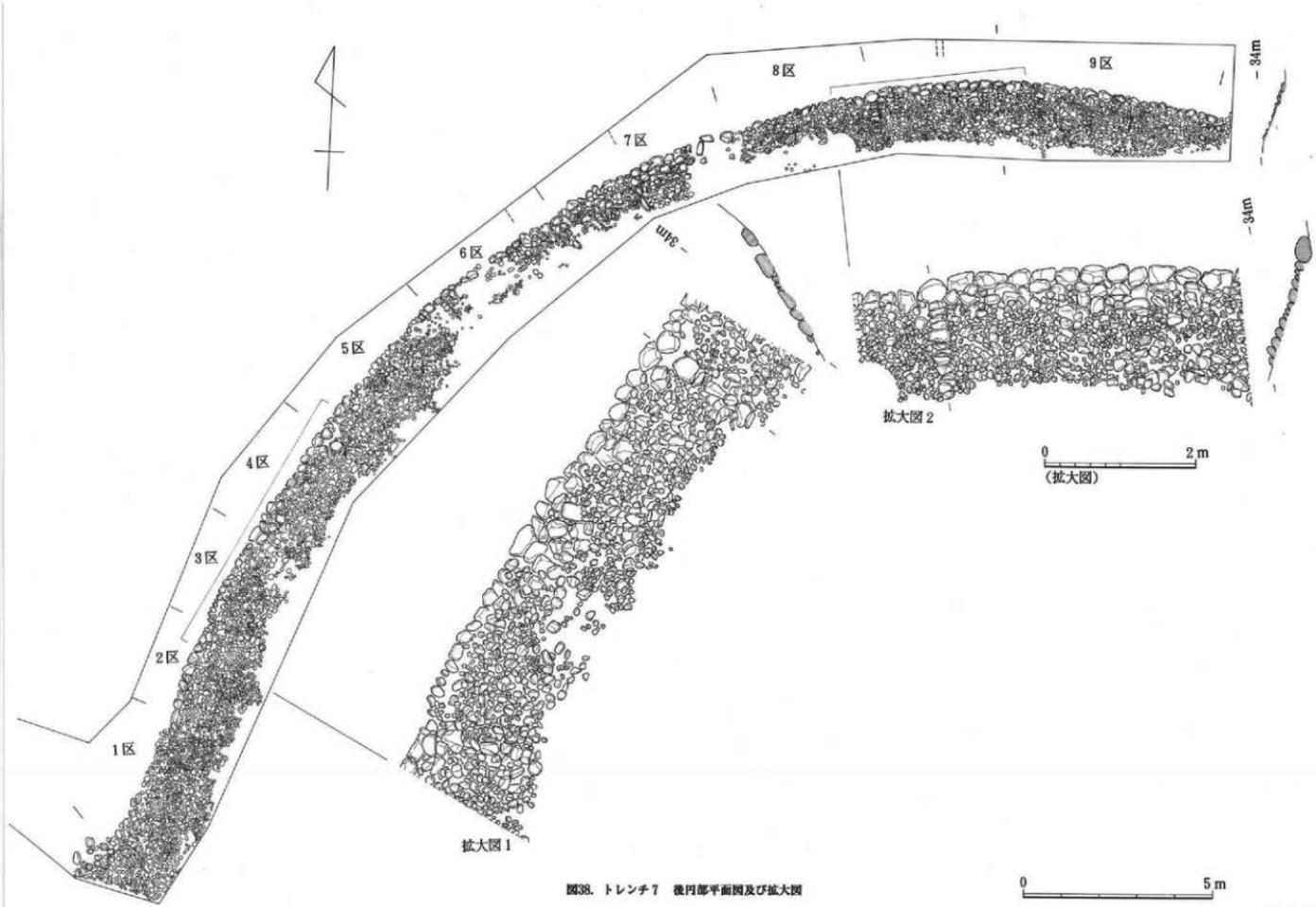


図38. トレンチ7 後内部平面図及び拡大図

0 5 m

1で20°、同2で25°である。基底石には長径20~40cmの直方体のものが目立ち、墳丘上段の据部のそれよりは一回り大きい石を用いている。ただくびれ部付近など場所によつては、小さな石で対処しているところもある。区画石については長径20~30cmで、上段のそれと比べても大差ない。またあいだを充填する石に直径10~20cmの小ぶりのものを専用している点も同前である。葺き方はていねいで、まず基底石と区画石でおおよその作業区画を設定し、それぞれの区画内を充実させている。こうした区画が端的にあらわされるのは、基底石列の不連続部分とそれに対応する継ぎ位の区画石列が存在する部分である。実際に施工するときには一区画ずつを順次横並びにおこなうのではなく、あらかじめ設定された割り付けにしたがって、それぞれに作業がすすめられたようである。例えば図38の拡大図1のように、大ぶりの石で基底石と区画石を設定している2つの区画(2区と4区)にはさまれた長さ2.5mの葺石部分(3区)の據がずれているのは、両サイドの区画が設定されたのちに葺かれたと解釈するのが妥当である(図版第46b)。そうしたことは長さ20cmに満たない石を基底石の用材としていることにもあらわれており、くびれ部における施工も同前である。ま

た拡大図2の9区西寄りのところでみられるように、一連の基底石列のなかでやや小さい目の石からなる2列の区画石列などは、一つの区画のなかにあっても、さらに小さくわかれた作業単位(小区画)の存在をしめしている。ちなみにトレント7で確認された作業区画の数は9つに分けられる。図示した範囲での数値を列挙すれば、1区は3.8m、2区は2.6m、3区は2.7m、4区は3.3m、5区は4.2m、6区は4.2m、7区は5.0m、8区は4.0m、9区8.8mとなる。最大は9区、最小は2区で、平均すれば約4.3mになる。またこのなかで小区画をふくむものは6区、7区、9区の3ヶ所である。

つきに前方部側の拡張区で検出した葺石については、後円部と同様、ため池の

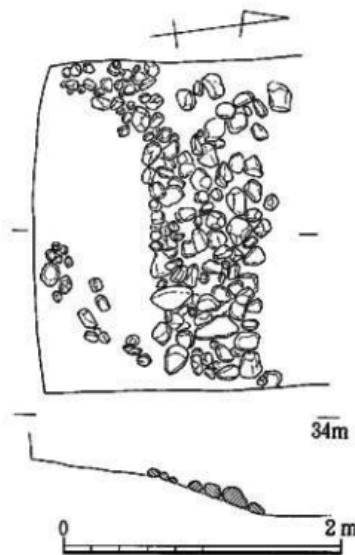


図39. トレント7 前方部拡張区

泥土におおわれていたが、裾部から約0.5mのところまでの遺存が確認できた（図39・図版第46c）。傾斜は約20°である。基底石には直径10~20cmの小さなものを用い、区画石もやや東寄りで縦位に配置した石を認めるものの、明確なかたちでは検出できなかった。裾部の高さは33.3mである。

トレンチ8は前方部に設定した5本の調査区（南から順に8~12）の南端に位置し、長さは5m、幅は0.7mである（図41）。層序は腐食土（0.1~0.25m）、墳丘の流失土である黄土色土層（0.08~0.6m）で、部分的に擾乱層である暗褐色土層（0~0.2m）がみられる。いずれもの土層も墳丘が削平されたのちに2次的に堆積したもので、葺石も認められなかった。

トレンチ9はもともと長さ7.2m、幅1mであったのを、葺石遺存部分を中心によどて拡張したものである。図40には墳丘上の流失部分を除いた範囲を図示している。層序は上から腐食土層（0.05m）、淡茶灰色土層（0.05~0.2m）、茶灰褐色土層（0~0.18m）となる。葺石はややまばらであるが、基底石とみられる直径30~40cmの大ぶりのものが前面におかれている。傾斜は20°前後で、基底石の標高は33.9mである。平坦面は前面にむかってかなり削平され、全幅はわからない。なお葺石の西端より約1mのところで樹立した状態の円筒埴輪の底部片を検出した。

トレンチ10は3m×3.2mの方形である。層序は腐食土層（0.03~0.06m）、淡茶灰色土層（0.05~0.16m）、茶灰褐色土層（0.08~0.18m）となる（図40）。葺石は流失部分の多い前方部全面のトレンチとしては比較的よくのこっている。基底石列はいくぶん乱れているものの、中央部での標高は34mを測る。区画石列も明確でないが、基底石列の食い違い部分の上位に大きめの石が集中しており、一応の区界が想定できる。その他の葺石はかなり小さいものを多用している（図版第47a）。傾斜は18°前後とやや緩やかである。

トレンチ11は長さ9m、幅1mを測る。層序は腐食土層（0.04~0.1m）、淡茶灰色土層（0.04~0.2m）、黄土色土層（0~0.25m）、暗黃土色土層（0~0.15m）、黄褐色土層（0~0.2m）となる（図41）。当該部では後世の改変が甚だしく、墳丘の原状部分は確認されず、葺石も検出されなかった。

トレンチ12は前方部全面のもっとも北に設けたもので、長さ9m、幅1mを測る。層序は腐食土層（0.02~0.2m）、暗黃土色土層（0.05~0.25m）、黄褐色土層（0~0.25m）となる（図41）。トレンチ11と同様、後世の削平のために墳丘の原伏は把握できず、葺石も検出されなかった。

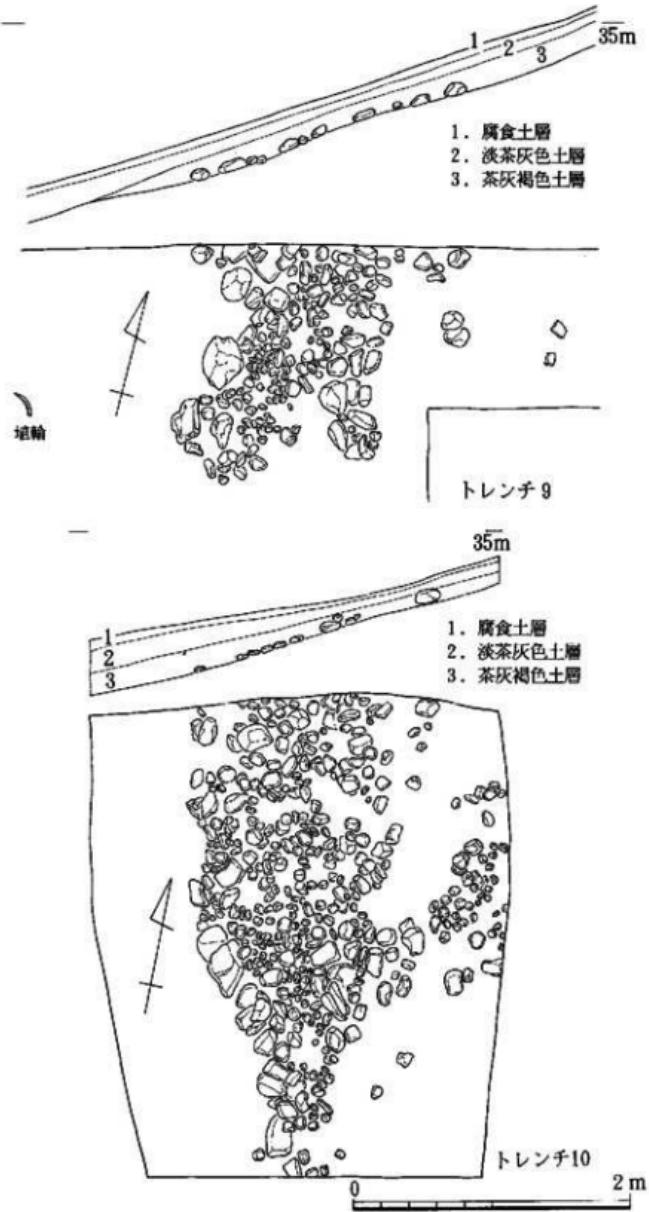


図40. トレンチ 9・10平面図・断面図

遺物

各トレンチから埴輪を中心とした遺物が出土した。埴輪は円筒ないし錐付円筒が大半を占め、あと朝顔形や家形などが若干みられるようである。このなかでトレンチ5出土の埴輪3（錐付円筒埴輪）については、6条の突帯をもち、全高113cmを測る。いわゆる黒斑を有し、基部に半円形、胴部に長方形のスカシ孔を穿ったⅡ期のものである。また土器では、古墳の北西部で土師器の壺片が採取されている。なおこれらの遺物の詳細については機会をあらためて報告する。

まとめ

今次の調査の成果をもとに、郡家車塚古墳の外貌にせまってみる。表4はトレンチで確認した墳丘各所の標高を一覧したものである。

まず古墳の様態については、墳丘の測量調査およびトレンチ1・4、同じく2・5の調査から2段築成による前方後円墳であることが確認された。古墳の築造にあたって、基盤となる地山を一定の高さまで削り込んで整形するが、後円部の北側と南側の裾部の高低差が1m（図41）であることを考えると、原地形を大規模に造成したとはおもわれず、むしろ現地形を生かして設定されたために、山裾に平行する方向に主軸をもつ東西向きの古墳になったとみられる。周濠も掘削されていない。したがって盛土の大半は近接

郡家車塚古墳			墳丘南面	墳丘北面	墳丘西面（前面）
後 円 部	上 段	上 端 裾 部	39.06(25°) (T4) 39.57(30°) (T4)		
	下 段	上 端 裾 部	34.2 (T4) 32.3 (15°) (T1)	33.26(20°) (T7) 32.24(25°) (T7)	
く び れ 部	上 段	上 端 裾 部	37.7(20~30°) (T5) 34.74(30°) (T5) 34.6 (T6)		
	下 段	上 端 裾 部		33.25 (T7)	
前 方 部	上 段	上 端 裾 部	37.7(20~30°) (T5)		34.74(20°) (T9) 34.6(18°) (T10)
	下 段	上 端 裾 部	32.13(12°) (T3)	33.3 (T7)	

数字の単位はm、()内は葺石の傾斜角度、[]内はトレンチ番号、__は調査区北端の高さ

表4 調査区分別標高測定値および葺石の傾斜角度一覧

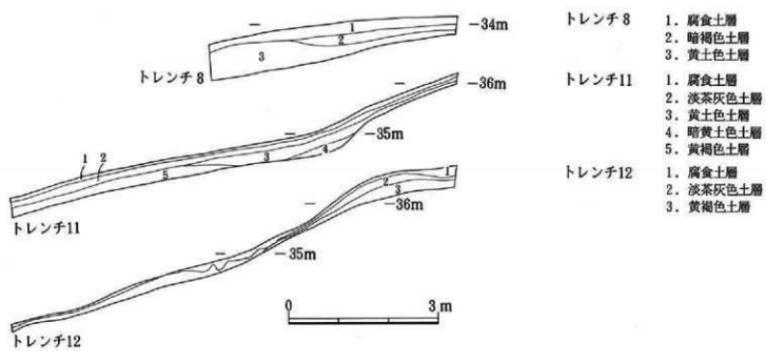
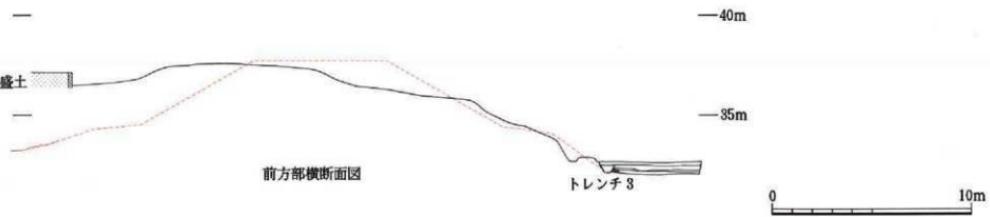


図41. トレンチ 8・11・12 土層断面図および埴丘横断面図

する山麓側から供給されたとみられる。

ところでトレンチ1～3では、地山の削り出しによる墳丘裾の想定ラインと実際の葺石の裾のラインが0.6～1.3mの範囲でずれているのが確かめられた。葺石を施工する段階であらためて割り付けをおこなったのであろう。そこでトレンチ1・2・7で検出したこれら下段の葺石の裾を基底として、後円部の直徑を算出すると、51.3mとなる。そしてこの数値をもとに後円部分の中心点をもとめ、トレンチ4・5で検出した上段葺石裾部から、上段の底径を復原すると36.8mになる。墳頂部分については、測量図とも勘案すれば、直徑15.6m前後とするのが妥当なようである。またトレンチ1・4から、後円部の全高を算出すれば約7.4mとなり、下段の高さは約1.9m、上段の高さは約5.1m、平坦面の落差は約0.4mになる。いま下段の全高を上段の裾部までとして、上段と下段の比率をみると、約2.2：1となり、上段がかなり突出したものとなる。ちなみに上段と下段の斜面長の比率は、およそ2.8：1である。

古墳の全長については、トレンチ9で原位置のまま検出した円筒埴輪とトレンチ10で確認した上段の葺石裾部のラインをもとに、後円部で確かめられた平坦面と下段の幅を参考にして前方部前面の裾部を推定したところ、85.6mという数値を得られた。そしてトレンチ2・7で検出した下段のくびれ部とトレンチ3・7（拡張部）で検出した前方部の葺石裾部から基底部のラインを引きとおすと、前面の幅は38.1mとなり、その中点と後円部の中心点とをとる主軸の方位はN-84.2°-Eになる。ちなみに主軸と前方部の2本のサイドラインの延長線は後円部の東端基底部の接点で1点に交わることを指摘しておく。またくびれ部での幅は22.2mを測り、主軸に直交する軸線に対しては約3°振れることになる。

前方部の高さについては、墳頂部が欠失していてよくわからないが、現存する最高所が37.705mで、トレンチ3の葺石裾部との比高差は約5.6mを測る。付図に示した縦断面図から推定される墳頂部の高さは37.8mとなり、トレンチ10の調査結果とあわせて考えると上段の高さはおよそ3.8mになる。下段については、平坦面の落差を約0.3mとして計算すれば、1.6m前後となる。ただし前方部における地山整形面も後円部と同様に、北側が1.2mほど高くなっているので、北側の下段の高さは南側に比べていくらかは低かったとおもわれる。また推定墳頂部での上段と下段の比率を後円部と同じ方法で計算すると、ほぼ2：1になる。

つぎに検出した葺石の傾斜角度をみると、後円部上段では20°～30°とばらつきがあるが、計測地点の多くは25°～30°になっている。下段についても10°～25°と開きがみられ

るもの、遺存状態のよいトレンチ7ではどの地点においても20°～25°となり、これが平均的な角度とおもわれる。したがって後円部では、やや緩やかな下段にくらべて、上段は多少きつくなっていたようである。一方前方部では、遺存状態があまりよくないトレンチ3をのぞけば、上段・下段とも、おおむね20°前後となり、とくに下段については後円部と前方部のあいだで整合性が認められる。

葺石の施工にみる作業区画の析出については、トレンチ7で観察したが、9区の8.8mと2区の2.6mとの差はいかにも大きすぎる。ひとつの解釈としては、9区の8.8m程度の規模が基本的な単位としてあり、くびれ部に接し、しかも明確な基底石をもたない1区を特異な作業区として除けば、2・3・4区をあわせた8.6m、5・6区をあわせた8.4m、7・8区をあわせた9mが、それぞれ9区の規模にいかにも対応してくる。そうすれば本文で指摘した3区の後補も、2・3・4からなる1単位のなかの小区画として理解できるようになる。またトレンチ4と5の調査で上段の葺石が上位と下位の大きく2単位に分けられることが分かったが、その割合はトレンチ5で検出した下位の高さとトレンチ4で確認した墳頂部南縁の高さから判断するとおよそ3：1になる。この比率は鴨谷1号墳で析出された3.5：1にかなりちかい数値といえよう。ところでトレンチ4では上位と下位の葺石がともにほぼ放射状に葺いていたとみられるのと比べて、トレンチ5では上位のそれが基底石列の接線に対して約75°の左上がりの方向で葺いていたことがわかった。この差異の意味とするところはいまだちに明らかにならないが、トレンチ5がくびれ部に隣接する調査区であるということが作用しているのかもしれない。こうした点も今後の調査によって解明されるべきものであろう。

以上、今回の調査で確認したことをもとに、郡家車塚古墳の概略を記したが、今後にのこされた課題も多い。例えば後円部の墳頂と前方部の推定墳頂の比高差は1.9mを測るが、はたしてこの差異が事実であるのかどうかという点は、古墳の実態をとらえるのに、はなはだ重要なことである。いいかえれば、現状にみる後円部の墳頂が削平されているのかどうかである。また主体部がいかなる形状なのかということの把握も、古墳の保全を実行するうえで貴重なデータになる。

こうした課題に対して、このたびは幸いにも、西村康氏らによって地中レーダー探査・電気探査・磁気探査がおこなわれ、主体部の位置や盗掘の有無を地表から探索し、一定の成果があげられた。詳しくは別記を参照されたいが、これらの成果は今後の調査に見通しをあたえるだけでなく、郡家車塚古墳を今後いかに保存していくのかということについても、多くの示唆を含んだものであった。

なお今年度の郡家車塚古墳の調査をより有意義なものとするためにも、これらの成果を踏まえつつ、あらたな課題を解決することかなによりも急務と考える。そのことは同時に、郡家車塚古墳を郷土が誇る一級の文化財として位置づけることになり、さらには将来の活用に備えることにもなるのであろう。
(森田)

郡家車塚古墳の探査

西 村 康

はじめに

本古墳における探査の目的は、後円部墳頂において主体部を探ることであった。古墳の推定年代から考えると主体部の存在する位置は深く、少なくとも地下3m程度は探る必要があると思われた。

今回採用した探査の方法は、地中レーダー探査、電気探査、磁気探査である。このうち、レーダー探査の有効探査深度は一般に2m程度と考えられるので、ここでの目的からみるとやや不十分と予想された。しかしながら、墓坑の位置や形態は捉えることができると考え採用したものである。

電気探査は測定電極の間隔を広げることにより、目的とする深さを選ぶことができる。そこで、本遺跡における探査では基本データを採取するものとして採用した。

磁気探査では、今回採用した形式の装置は探査深度は1m強程度にとどまるが、最近の土壤改変など浅い層位に存在する塵芥穴などを選別して、遺構とそれ以外を区分するための、補助的データ採取を目的としたものであった。

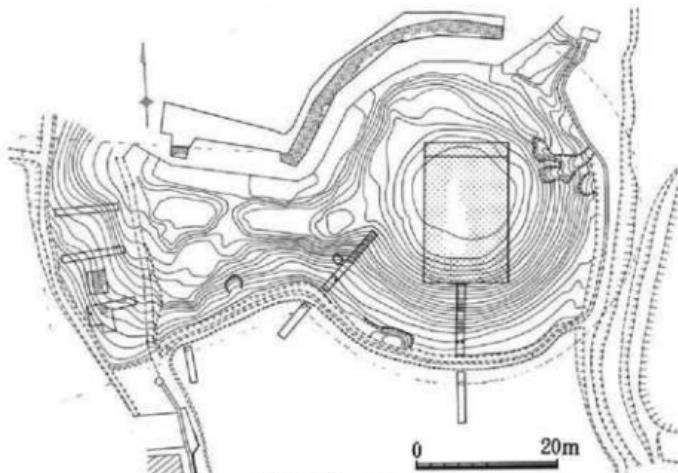


図42. 地中探査範囲指図

測定の方法

探査にあたっては、あらかじめ設置してあった測量基準杭を利用して測定範囲を設定した。範囲は後円部中心あたりに位置する杭から、東西へ6m、南北には9mずつの、合計東西12m、南北18mである。実際の測定では、地中レーダーの探査のみは西へ5mの位置を限りとしたので、東西幅は11mとなっている(図42)。

【地中レーダー探査】

使用した装置はアメリカG.S.S.I社製SIR-8型で300MHzのアンテナによる測定である。測定は東西1mの間隔に設定した南北方向測線にしたがい、南から北へアンテナを走査した。これら測線の内、西から1m測線では南端2m、5m測線では北端1m、8mでは北端1m、9m測線では南端3mと北端4mが、10m測線は南端3mが、それぞれ立木があったために測定できなかった。

〈測定の結果〉 見かけの「断面」測定は、記録の時間を120ns(ナ秒)に設定した。ここにおける電波の土中伝播速度を仮に6cm/nsとすると、地下約3.6m程度までを探ったことになるが、記録できた断面画像を観察すると、実際の有効な情報としては3m弱にとどまるものと考えられる。なお、画像は左が南で、上下にわたる点線は1m間隔に入れてある。これは測線の総延長距離や特定の対象物の位置を知るために利用できる。

断面画像で注意されるのは、西から4m～9m測線にわたって、南から5m～14m程度の間で、地層の窪んだ状態がある点である。その典型的な例は西から5mの画像で、南から5m～14mの間が全体の幅として8mばかり低くなる状態がわかる(口絵5)。

また、その窪んだ上面は反射が強いので、石とか粘土など異質なものがあると推定できる。しかし、この面は地表下約1mと浅いので、多分、主体部自身ではなくその上面を覆う何らかの施設と考えた方がよい。

今回のレーダー探査では、通常おこなわれる断面測定だけではなく、それらを用いて「平面」図を作成することも試みている。レーダー平面図を作るには、計算機の中で断面画像を並べ、そのある深さ、すなわち電波の伝播時間帯における電波の反射強度を平面の分布としておくもので、これをTime Sliceと呼ぶ(口絵6)。

地中レーダー「平面」図をみると、推定の深さ1mから2mにかけて(36～72ns)測定区の中央よりやや西寄りで、南北8～9m、幅2～3m程度の反射の強い部分が広がっているのに気がつく(口絵7)。

詳細にみると浅い位置では、北でやや東へ傾いた方位をとることが注意され、その方向は電気探査でみた結果と類似する。しかし、2m近い深さになると、南北方向すなわ

ち古墳主軸と直交する方位をとるので、これが主体部を表していると考えられる。

なお、西から東へ4m測線で南から9mの位置にある完結した大きな反射は、1m未溝の小さな穴か石で、地下50cm程度から存在する。盜掘壙である可能性が大きい。

【電気探査】

使用装置は応用地質社製のMC OHM2115型である。測定は電極間隔2mによるウェンナー法であるので、見かけ上約1～1.5m程度の地下情報を最もよく捉えていると考えられる。測定対象とした墳頂部面積が狭かったため、これ以上電極間隔を広く展開することが困難であった。2極法による測定も考慮したが、周辺が住宅地であり遠電極を設置できる余地がなかったので、これでも電極間隔を広げた測定を実施できなかった。

測定は設定範囲を東西南北ともに、すなわちタテ、ヨコともに1mの間隔の格子点でおこない、比抵抗の平面分布を求める方法とした。もし、石などがあればそれは比抵抗が高いものとして表れ、粘土などがあれば低い部分として捉えることができる。比抵抗の平面分布を求めることにより、遺構の形態や方向を知ることを目的としたのである。

〈測定の結果〉 結果をみるとまず、南半部に比抵抗の低い部分が円弧を描くように分布することに気がつく。これは地形の影響を受けたもので、墳丘平坦面と斜面部の境界から斜面部にあたっている。

主体部らしい箇所を探すると、測定区のやや西側で北北東から南南西へ延びる幅3～4m、長さ10m近い範囲が注目される。西辺部にはこれよりも比抵抗の高い部分が伴っている。盜掘壙の位置を示しているのかも知れないと考えた(口絵8)。

いま指摘した主体部らしい範囲は、そのとる方向が古墳主軸や方位から偏している点から、電気探査では的確に捉えていない可能性があると考える必要があろう。しかし、全般的な高い比抵抗分布の傾向から考えると、主体部は粘土層ではなく石造の構造物である可能性が大きいと指摘できる。

なお、西北隅を中心として広がる東西3m、南北9mばかりの比抵抗の高い広がり部分は、石材の散乱や砂礫など密度の粗い物質から構成されるものと推定される。

【磁気探査】

使用した装置はイギリスGeoscan Research社製のFM18ゲラジオメーターである。これには上下50cm離れた位置にセンサーがあり、地磁気の鉛直成分の差分を測る。有効探査深度は1m強と推定される。

測定の間隔は電気探査と同じで1m間隔の格子点での統定である。

〈測定の結果〉 結果は磁気傾斜の大きさをプラス側とマイナス側に区分して表してい

る。これでは、測定区の中央とその南にそれぞれ完結したマイナスの部分があることに気がつく。いずれも1m未溝の浅い位置における土壤変化を表していると考えられる(図9)。

電気探査の結果と照合すると、これら2ヶ所の磁気変化のうち、南側のものはちょうど試掘トレンチの位置にあたっている。中央は主体部位置とみられる部分の東端にあたり、わずかながら比抵抗分布も変化している。深い穴があるのかも知れない。

なお、磁気傾斜の全般的な分布傾向が北と南で異なるのは、北側に人家など何らかの磁気変化をもたらす原因があるためかも知れない。

おわりに

本古墳における探査結果は以上のようなである。3種類の方法による結果を照合すると、主体部は現在みる後円部墳頂のほぼ中央にあり、長さ約8m、幅2~3mの規模で、主軸を南北方向にとるものと推定される。電波の反射の状況や電気抵抗の高い点からみると、石造の構造物であると考えられる。したがって、一般的にいえば本格的な堅穴式の石室であるといえよう。深さとしては約2m弱から存すると思われる。

なお、主体部の南北の中央部、西寄りに盗掘壙があると推定しておく。

《付記》

地中レーダー探査は石川県鹿島郡中島町のUMGAL中島(マイアミ大学附属音響地質研究所・中島研究室)により実施されたものである。

V 芥川山城跡

11. 芥川山城跡の調査

芥川山城跡は高槻市北部の自然が良く保たれており、高槻市民に親しまれている摂津峠東側の三好山にある（口絵10）。三好山は標高約183mを測り、北・西・南を芥川にかこまれ、北と西はとくに斜面が急である。また、いく筋かの谷が入り組み自然の要害を呈している。東は標高約190mの帶仕山がつらなり、こちらの方は三好山に比べ起伏がすくなく、山麓には古墳時代後期の塚脇古墳群が分布している。

三好山一帯に良好な城跡があることは早くから知られ、すでに一部の先駆者は城郭構造について現地踏査を行ない、戦国時代の三好長慶が畿内支配の拠点とした芥川城であるとの考えをあきらかにしている。一方、芥川城として戦国時代の文献に登場するものは現在のJR高槻駅西側の芥川地区に存在したとする考え方も根強く存在する。しかし、これまでの調査では戦国時代の城郭にかんする資料は得られておらず、1977年に刊行された『高槻市史』第一巻では、三好山に芥川城があったものとしている。しかし、芥川地区には南北朝から室町期にかけて芥川氏の拠った平城の存在を示す文献もある。このため、ここでは『高槻市史』に従い、三好山に存在する山城を芥川山城跡とし、芥川地区の平城を芥川城とよぶことにする。

調査地は高槻市大字原4.053番地の三好山頂上に位置し（口絵11）、現状は山林である。このたび、幼稚園の実習園整備が計画されたため、事前に発掘調査を実施した。発掘調査とあわせて城郭談話会の協力をえて城跡遺構概要図（別添図面参照）を作成した。その結果、芥川山城跡は郭①を中心とした西方の曲輪群、郭②を中心とする中央の曲輪群、郭③を中心とする東方の曲輪群という三つの曲輪群によって構成されていることがあきらかになった。遺構の概要については中井均氏から玉稿をいただいているので詳しくは次章を参照されたい。

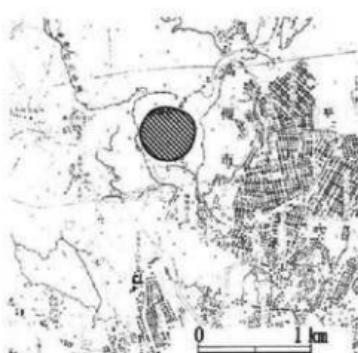


図43. 芥川山城跡位置図

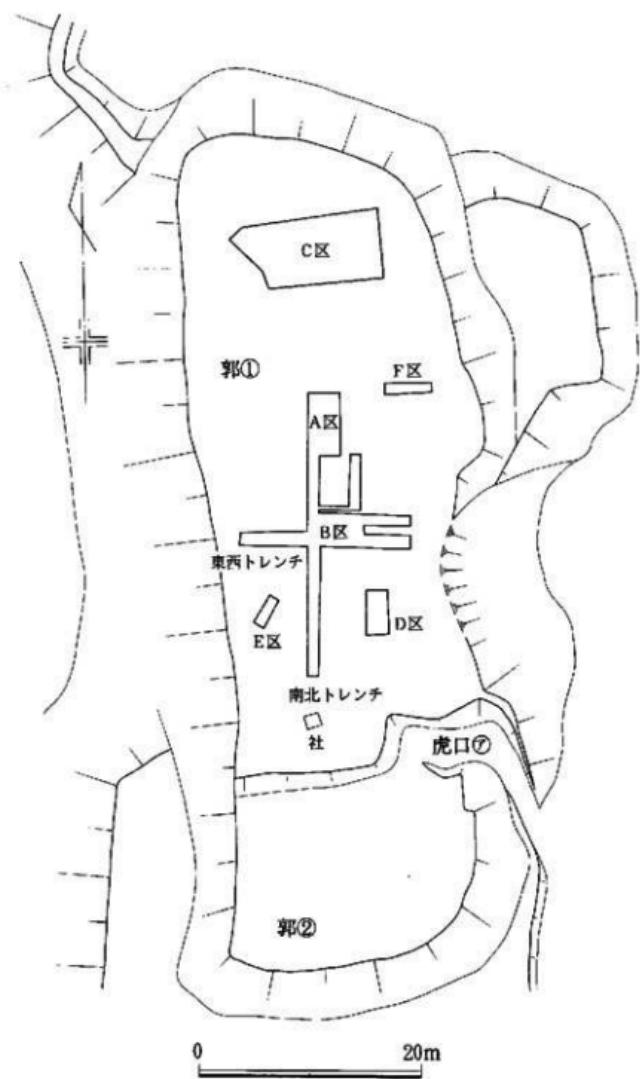


図44. 芦川山城跡主郭部調査位置図

遺構（図版第42～46、図版第48～53・図44～50）

調査は主郭である郭①にトレントを設定し、遺構の確認できた部分を暫次拡張しながらすすめた。郭①は三好山頂上部のうち、北側の南北約58mの平坦地である。幅は虎口⑦付近で約25m、北端部で22mを測る。虎口⑦のすぐ東北部が崩壊しており、現状では幅約20mである。西・北・東の三方は急な切岸となり、とくに西側は芥川にむけて急勾配である。

まず、郭①の中央部に幅約1m・長さ約25mの南北トレントを設定したが、トレントの北部では遺構・遺物はほとんど確認できなかった。トレント中央部では土師器皿の破片や焼土を確認することができ、さらに、トレント南部では土壤状の落ち込みを検出した。このため、トレント北部（A区）、トレント中央部（B区）を拡張し、南北トレントに交差する東西トレントを設定した。中央部に設定したこれらのトレントで検出された遺構の拡がりを確認するために、D、E、Fの小調査区を周囲に設定した。郭①北部には幅約1mの南北トレントを設定したところ、建物の礎石が検出されたため南北約6m、東西11mの調査区に拡張した（C区）。礎石建物の検出されたC区を除き、郭①の中央部に設定したトレントを南側調査区として以下の記述をすすめる。

【南側調査区】

基本的な層序は約0.1mの表土と0.1～0.2mの黄色土が堆積し、これを除去すると赤褐色土の地山である。図45のように南北トレント中央部に土壤1、南北トレント南部に土壤2が検出された。B区では柱穴2個を、東西トレントの東部・西部では地山面を斜面下方に掘削した状況とこれを埋めた客土層が確認された。D区では溝状遺構、E・F区では東西トレントで検出された地山面の掘削と客土のつづきが確認された。

土壤1はほぼ方形とみられるが掘り方肩部が不定形である。幅は不明であるが、南北3.4m、深さ0.5mを測る。底部はほぼ平坦で、土壤内には拳大の石や炭・焼土の混じる褐色土や暗褐色土が堆積し、土師器皿や備前焼の破片がふくまれていた。埋土を観察すると表土・黄色土の下に焼土と黄白色土がみられる。そして、土壤の肩部から上面にかけて焼土が層をなし、厚さ0.2mを測る。この土壤1は火災の後始末にゴミ穴として利用されたものである（図47）。

土壤1上部でみられた焼土の混じる赤褐色土はB区付近にもみられる（図46）。B区の北壁に接して一辺1m弱の方形柱穴が2個検出された。そのうち東側の柱穴に上面の平らな0.3m四方の礎石がすわっていた。礎石は柱穴の底から数cm浮いた状態で検出された。また、この柱穴の上部には焼土のふくまれた赤褐色土が堆積していた。西側の柱

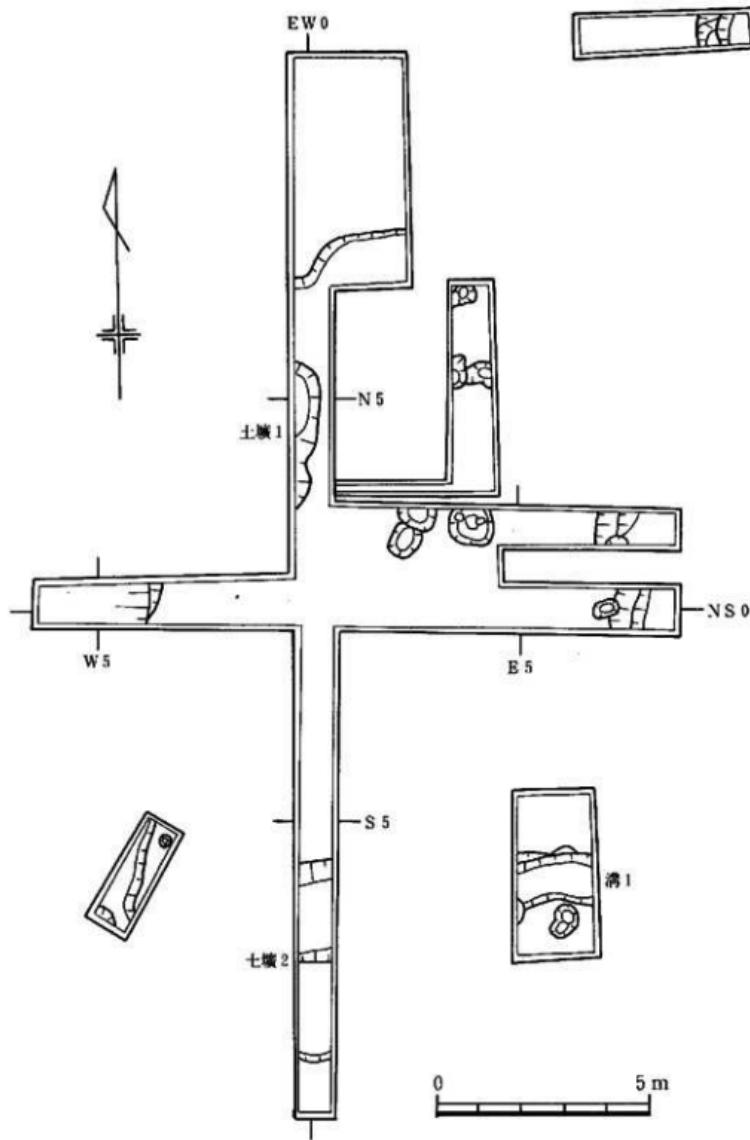


图45. 南侧调查区造桥平面图

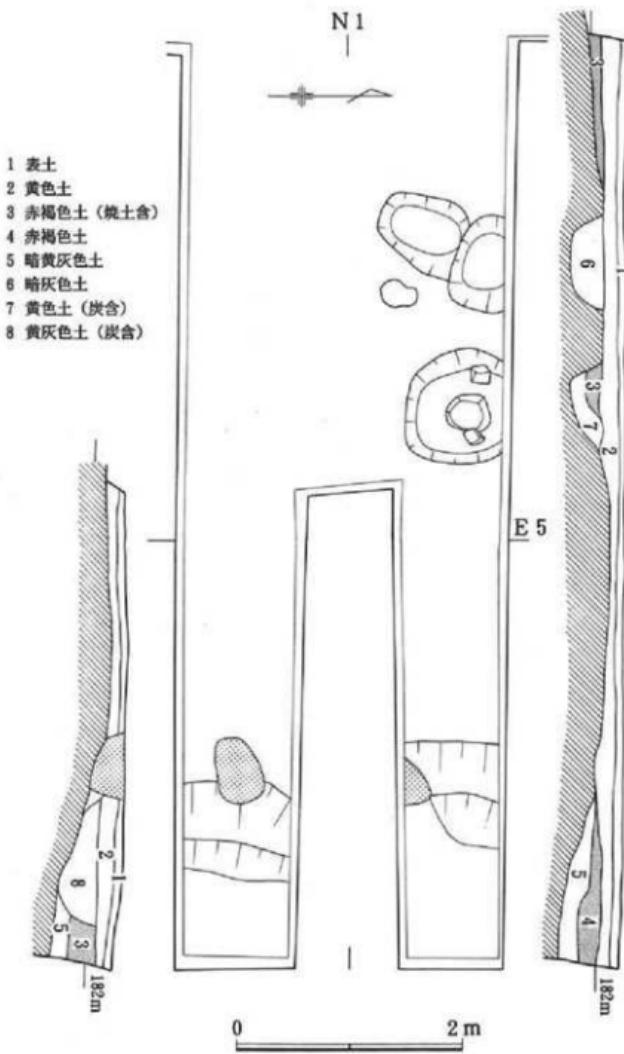


図46. B区・東西トレンチ東側造構平面図・断面図

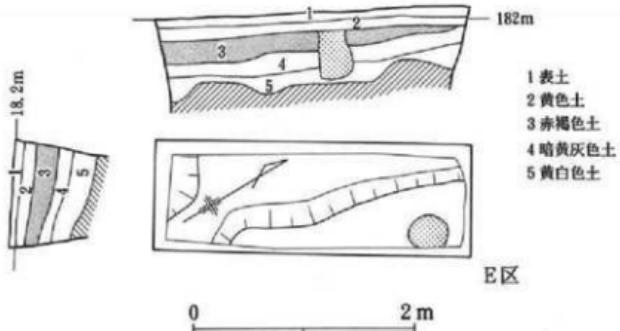
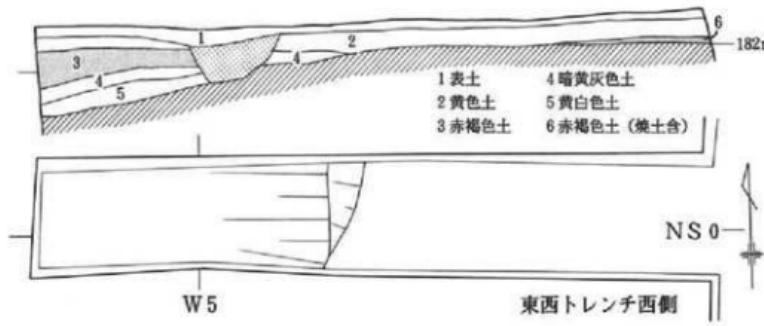
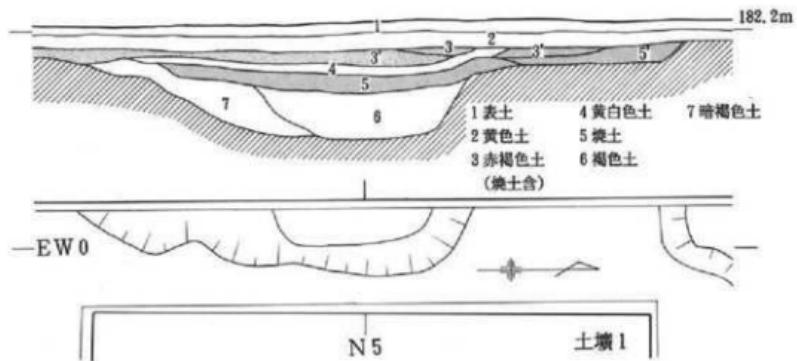


図47. 土壌 1 他平面図・断面図

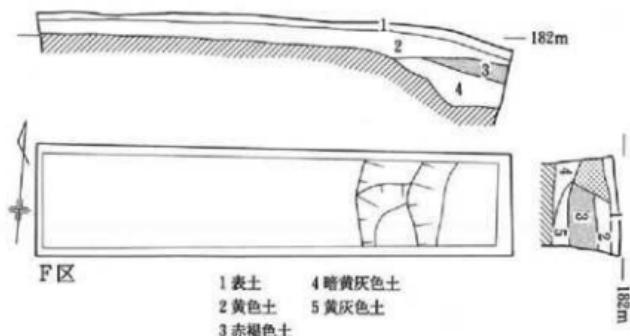
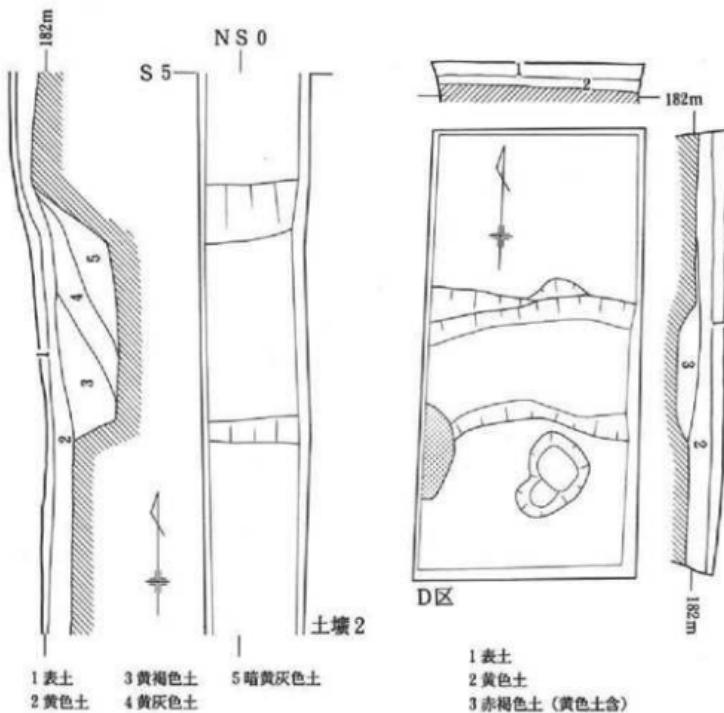


图48. 土壤 2 他平面图・断面图

穴に接して浅い不定形の落ち込みがあり、周囲の地山面は火熱された状態であった。落ち込みの東隣に幅0.2m、長さ0.3mほどの範囲で火熱された粘土らしき痕跡が認められた。遺構の拡がりを確認するために柱穴の東側に東西トレンチと柱穴の北側に南北トレンチを設定したが、遺構は確認できなかった。

東西トレンチの東側・西側とも地山面が郭の東・西の斜面下方に向けて掘削され、時期をおいてこの斜面がB区中央部のレベルと合致するよう赤褐色土で客土されていることが確認された。B区柱穴の東側トレンチでみると、0.1m弱の表土・0.1mの黄色土、0.2mの赤褐色土が堆積している。その下に暗灰色土がみられ、当初地山面を掘削した後に自然堆積したものとみられる。赤褐色土は地山と同質で炭・焼土を混じえ、ほぼ182mの高さに上面をそろえている。

東西トレンチ東側も同様で、このトレンチでは赤褐色土上面から掘り込まれた落ち込みが観察され、土師器皿が出土している。東西トレンチ西側も同様であるが、東側では地山を掘削した際、掘り方が溝の肩部状となり比較的明瞭であるのに対し、掘り方が不明瞭なまま斜面となっている。やはり黄色土の下に0.2~0.3mの赤褐色土が堆積し、西側が厚くなっている。なお、図面に示した網目は木の根による擾乱である。

土壤2は南北トレンチ南側で検出された。地山面をしっかりと掘削し、幅2.3m・深さ0.5~0.6mを測る。壇内の堆積土は北側の肩部から流入しており、赤褐色土で客土された様子はみられない。南側の肩部より南は0.2mほど北側より低くなってつづいている。

D区は土壤2の拡がりを確認するために設置した。幅約1m・深さ0.15mの溝1を検出したが、掘り方の形状や深さからみて土壤2とは別のものと判断される。やはり、赤褐色土の客土は認められない。

E区でも土壤2の拡がりは確認できなかったが、地山面を削って、東西トレンチ東側の斜面肩部の延長が確認できた。さらに西側斜面に向けて赤褐色土の客土が確認できた。

F区でも赤褐色土の客土が確認できる。ここでは東側斜面に向けて地山が深さ約0.4m掘削されており、平坦な底部をなしている。やはり下層に暗灰色土、その上部に赤褐色土が堆積している。

【C区】

東西6.57m、南北3.9m以上の規模をもつ礎石建物が検出され、南側に礎石がつづいている。東西の柱間は0.73mと狭く、比較的小さな礎石もあり半間ごとに礎石を配した東西4.5間、南北3間以上と解釈される。建物中央部の東西柱列が棟通りとみられ、南

北方向の礎石列とあわせての内部が区画される。北半部は西側の2.5間×2間、東側の2間×2間の2室に分けられる。南半部も西側が2.5間×1間以上、東側が2間×1間以上の2室で合計4室で構成された建物とかんがえられる。床受けの東石が北西の部屋ではほとんどみられないため土間であろう。他の部屋には東石がみられることから床張りの部屋とみられる。

建物周囲にはやや不規則であるが礎石列がみられ、部屋周りに縁がめぐらされたものとみられる。建物東側では幅1.5m、北側・西側では幅0.7mを測る。北側では一部が外側に張り出している。礎石の大半は一辺が0.4m程度のほぼ方形で偏平な河原石を使用している。

中央部で南北方向の十層堆積状況を観察すると、表土(0.1m)、黄色土(0.1~0.2m)と堆積し、礎石建物の検出される面は黄灰色土(0.1~0.2m)である。この黄灰色土は地山の赤褐色土上部に客土されたもので焼土や炭が混じる。建物北側の縁部分では黄褐色土・黄灰色土が堆積し、やはり焼土・炭が混じる。図50は建物西部で木の根によって搅乱された部分を利用し礎石建物検出面以下の様子を観察したものである。この部分での礎石は黄灰色土上面に据えられ、黄灰色土以下に炭・焼土層を確認した。なお、建物の北側・西側では岩盤が露頭し、北・西に建物の拡張は認められない。

遺物(図版第54~56、図51)

遺物の多くは掘削作業中に黄色土から出土したもので、コンテナ数箱程度出土している。土師器皿、土師器釜、瀬戸美濃・備前の陶器類、中国製陶磁器、碁石などがある。土師器皿を除き完形に復元できるものは無い。

土師器皿はいずれも口縁部が外反するもので、淡褐色・精良な胎土である。一見京都市内から出土する16世紀代のものと区別することができないが、わずかに胎土がざらつくような感触があり、京都系土師器皿を模倣したものとみられる。緻密なものではないが法量によって大きく三つに大別することができる。もっとも小さいものは口径6.7cm・器高1.5cmで、底部中央が盛りあがるヘソ皿タイプである(1)。9cm前後から11cm前後までの幅をもつものが多く出土し、器高は2cm前後である(2~9)。9の粗い胎土で赤褐色を呈し、器壁も厚い。もっとも大きいものは口径12cm前後を越えるもので、器高2cm以上である(10~14)。3・11・12は口縁に油煙の痕跡があり灯明皿として使用されたことがわかる。出土地は東西トレンチ(1・3・4・7・13・14)、南北トレンチ(2)、C区(8~12)、F区(5)で、13・14は東西トレンチ東部の客土面上部から掘り込まれた落ち込み出土である。

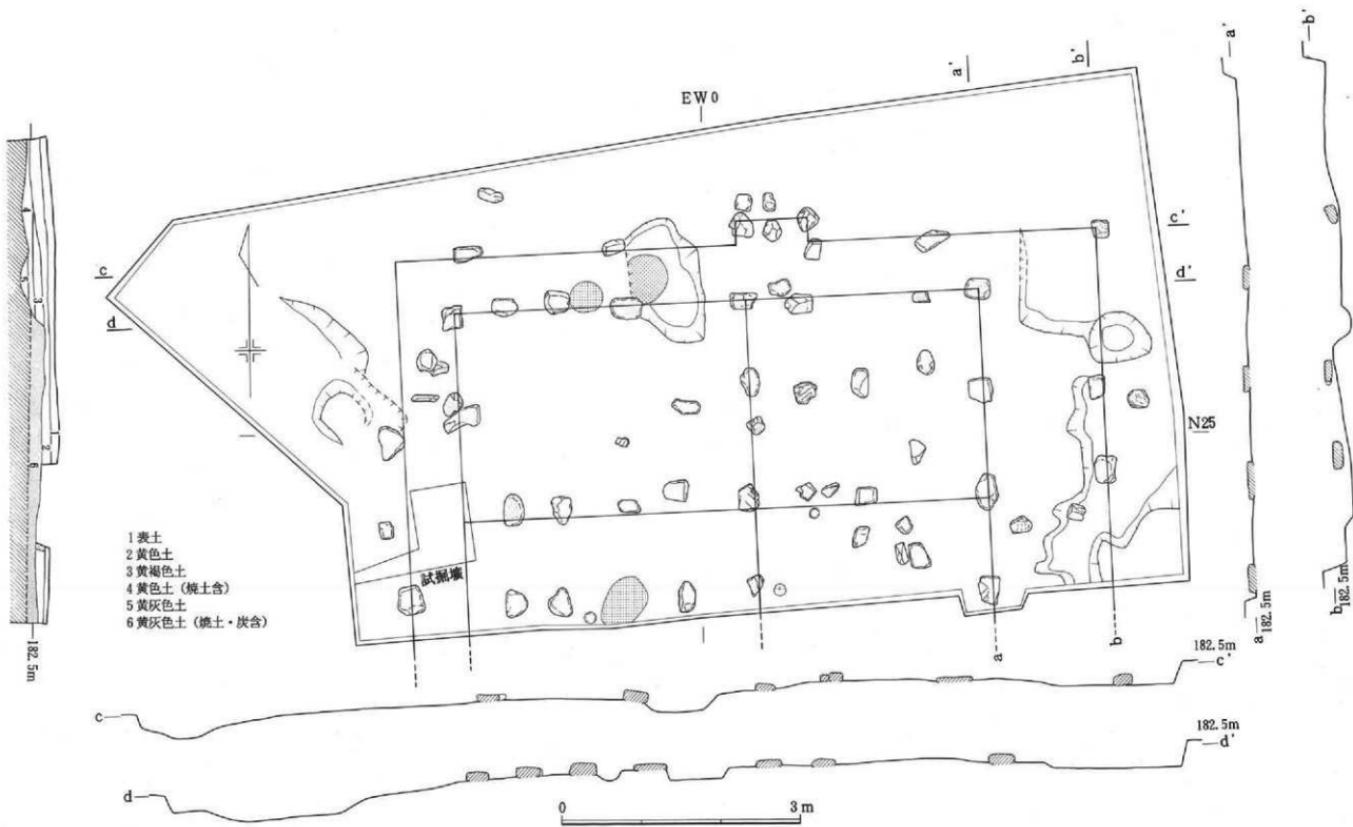


図49. C区礫石建物検出状況

17はC区から出土した土師器釜で口縁が強く屈曲し、端部が面をもつ。器壁は薄く、黄白色の精良な胎土である。煤の付く類似する破片も出土している。

瀬戸美濃窯とみられる灰釉のほどこされた陶器はC区から端反りの皿(15)と土壙1から椀の底部破片(16)が出土している。

備前窯製品はC区から摺鉢(18~20・22・36)、鉢(23・30・31)が、南北トレンチから摺鉢(21)、土壙1から壺の肩部(37)、B区から壺の底部(38)が出土している。35は表面採取の壺である。玉縁状の口縁で傾斜が大きく凹線はみられない。摺鉢はいずれも口縁部外面に2~3本の凹線があり、端部内側に面をもつ。18では内面の条線が斜めに施されている。鉢は口縁が内弯する浅鉢状の器形で片口かもしれない。器壁は薄く口縁外面に沈線がみられる。いずれも同一個体とみられ、31は底部である。

29は南北トレンチから出土した唐津窯の皿とみられる。内面に鉄絵の一部がみられ、いわゆる絵唐津である。

中国製陶磁器には南北トレンチから無文の青磁碗(32)、C区から白磁端反碗(33)と裏白で「大明□□」と記された青磁皿が出土している。他に染付もあるが細片である。

C区から2枚の錢貨が出土している。27は北宋の皇宋通宝(1039年初鋤)、28は明の洪武通宝(1368年初鋤)である。

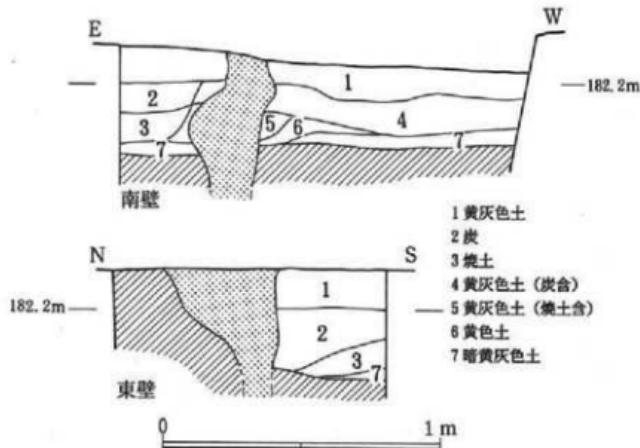


図50. C区西側試振塙断面図

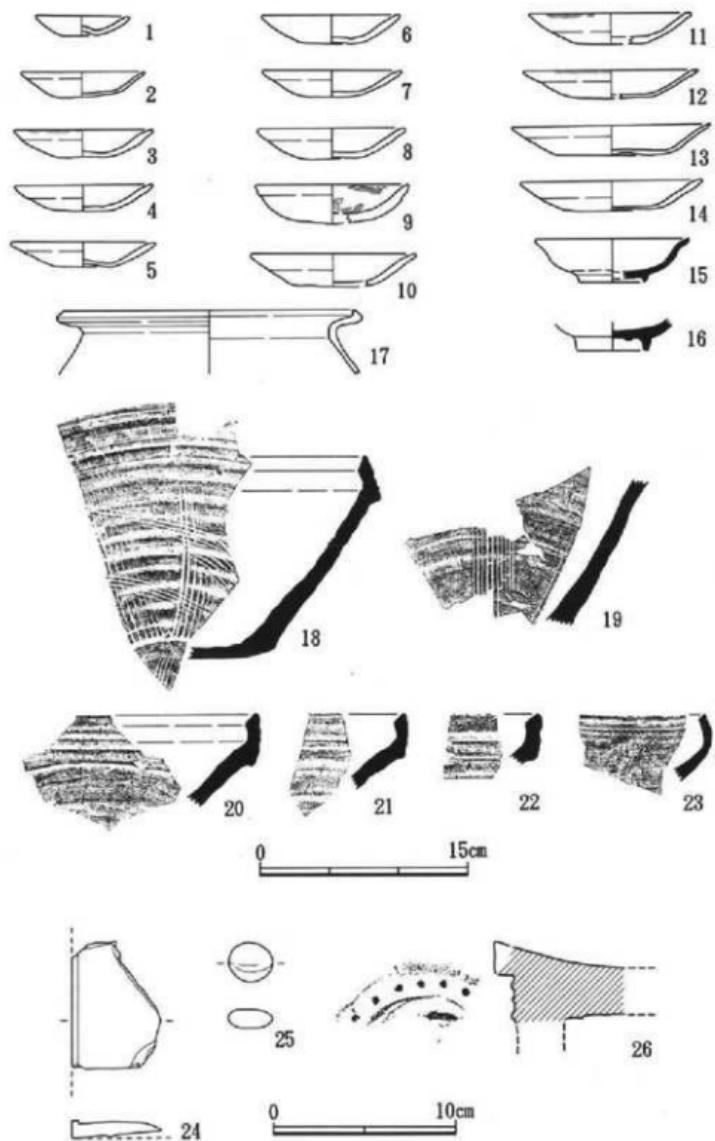


図51. 芥川山城跡出土遺物

24は粘板岩製の硯破片で幅5cm程度とみられる。表面採集資料である。25は両面をていねいに磨いた白石で、直径約3cm、厚さ約1cmを測り、墓石とみられる。東西トレンチから出土している。26は郭付近で表面採集された瓦で灰色を呈し、胎土は粗い。巴文の尾部が細長く延び圓線状となり、珠文は密である。

小 結

芥川山城跡の主郭において礎石建物や土壙などを検出したが、南側調査区と北側のC区ともに火災の痕跡が確認できた。このため火災の前後で遺構を二時期に大別することができる。土壙1やB区に火災前の遺構が集中しているが、今回の調査では、C区の礎石建物より下層は部分的な調査にとどまっている。このため火災前の様子は不明であるが、焼土や炭が層をなしているためなんらかの遺構の存在が想定される。礎石建物や土壙2・溝1は火災後に位置付けられるが、C区では建物が礎石であるのに対し、B区では柱穴内に礎石をもち、礎石建物が新しい傾向にあることがわかる。

火災の後に客土されたことは東西トレンチやE区・F区で確認された赤褐色土に焼土や炭が混じることからわかる。火災前の様子をみると東側を意識したため郭東側を段状に掘削し、西側は自然斜面に近い形状にしていた。火災後は郭中心部に高さを合わせるように郭の周囲、とくに東側と西側に客土している。火災前では郭中心部平坦面の幅は約11mであるが、火災後では20mと倍近くに拡張されている。おそらく、C区も同時に客土されたとみられる。なお、東西トレンチの端部から2m程東側の崩壊部の一部に集石が露出している。客土の端を固める際にほどこしたものとみられるが、今回はくわしく調査できなかった。

礎石建物は周囲に縁をめぐらせているが、東側が幅1.5mであるのに対し、西側は0.7mと半分以下であり、この礎石建物も東側を意識して建てられたことを示している。礎石建物はA区・F区までは延びておらず、東西の礎石列が棟通りとみられるため南側にもう1間分程度のびているものとみられる。火災後はこの礎石建物が郭の北部に、郭の南部には土壙2などがあり、郭中心部の空閑地は前庭として利用されたものとみられる。

二時期に大別した遺構の年代であるが、主郭が火災に遭ったことを手掛かりに検討してみる。芥川城は西細川の乱あるいは永正の錯乱といわれる16世紀初期から織田信長によって落城する永禄11年（1568）までのあいだに争奪がくり返されているが、『多聞院日記』に弘治2年（1556）正月5日に「芥田川ノ城焼失云々」とある。また、『敵助大備正記』にも同月の火災記録があり、相当大規模な火災とみられる。これ以外に火災記

録はみられず、永禄11年の織田信長摂津侵攻に際しても、ほとんど抵抗することなく三好長逸らは逃亡している。このため、今回検出された火災の痕跡は弘治2年のものとみられる。三好長慶が芥川城を攻略し、実質的に畿内の支配者になった天文22年（1553）から3年後のことであり、三好長慶絶頂期にあたる。この火災の後始末を兼ねて主郭の大規模な改修が実施されたものとみられる。このため、火災前の土壙1などは弘治2年以前に、火災後の礎石建物などは弘治2年以後に比定できる。

さて、礎石建物などは弘治2年以後としたが、その下限について検討する必要がある。C区の礎石建物周辺から出土した遺物のうち土師器皿・土師器釜・備前焼摺鉢を検討してみる。C区出土の土師器皿は6・8～12である。13・14は赤褐色土の客土上部から掘られた落ち込み出土であり、同時期とみて大過ない。これらの土師器皿の特徴は内底面端にやや壅んだ圓線がみられることである。京都市内の土師器皿を分析した伊野近富氏によると淡褐色系のI bタイプに分類され、16世紀後半から17世紀前半の幅でとらえられる。この時期の土師器皿編年と実年代観には検討の余地があり大きな幅でとらえておきたい。

土師器釜は音原正明氏のいう大和I 2型で、大阪府下の戦国時代末の城跡や都市遺跡で出土例が多くみられるようになった。この点に注目した川口宏海氏編年のⅢ期に相当するものとみられるが、永禄年間（1558～1569）を下限とするⅢ-1か慶長20年（1615）を下限とするⅢ-2かは小破片のため判断しにくい。

備前焼の摺鉢はいずれも口縁部がまっすぐにたちあがり、外面に2ないし3条の凹線が入る。体部にはロクロ目が日立ち、18では内面の条線が斜め方向になる。このような摺鉢は不老山西口2号窯の特徴をもち、堺環濠都市遺跡では天正3年（1575）の火災を目安とするⅣ期の遺物群にみられ、天文22年（1553）を目安とするⅢ期の遺物群では知られていない。また、大坂城では天正11年（1583）から慶長3年（1598）までの豊臣前期の遺物群にみられる。

C区以外であるが唐津焼の皿が出土している。從来、堺環濠都市遺跡から天正13年（1585）銘木簡との共伴資料から唐津焼の出現期がかんがえられてきたが、大坂城跡では豊臣前期にはみられず、慶長3年（1598）以降の豊臣後期になって出土することが指摘されている。このようにC区の礎石建物など火災後の遺構については弘治2年から慶長年間まで約40年間の時間幅でとらえておくのが妥当とかんがえる。

（橋本）

芥川山城跡の構造について

中井 均

三好長慶は天文22年（1553）に芥川孫十郎の立て籠る芥川城を攻め落した。以後永禄3年（1560）河内飯盛城に移るまで、芥川城は長慶の本拠地として、鞍岡期畿内における政治の中心的位置を占めていた。

この芥川城については古くより高槻市芥川に所在していたと考えられていた。1967年に刊行された『日本城郭全集』でも字「殿内」周辺に城域を推定している。同書では、三好山城の頁で、芥川周辺を芥川城に推定しつつも、平野で要害性に乏しい点など疑問が残るとし、消極的ではあるが、高槻市原に所在する三好山の城跡こそが三好長慶の芥川城ではなかったかと推定している¹⁾。

1970年代後半に城郭研究は現地に残存する城郭構造そのものを図面化し、比較分析する、いわゆる縄張り研究が飛躍的に進歩した。その結果、芥川に所在したと考えられていた芥川城が長慶の本拠であった芥川城であるという従来の説は大きく訂正する必要が生じてきた。つまり高槻市原に所在する三好山に遺存する城跡の構造が明らかにされたことによって、長慶の本拠地芥川城は、実は三好山の城跡であることがほぼ確実視されるようになったのである。その嚆矢となったのは村田修三氏の一連の業績であろう。1977年には「大和の城跡と国人」のなかで、三好山の城跡の概要図を示され、構造について分析を加えられた²⁾。1979年には三好山の城跡について村田修三、上山春平、南條範夫の3氏によって誌上対談がおこなわれ、歴史的、構造的に詳細に分析が加えられ、芥川城が三好山に遺存する城跡であることは不動のものとなった³⁾。いわゆる縄張り研究によって三好山の城跡が芥川城であると立証されたことは、芥川城跡を研究するうえで大きな前進となつたばかりでなく、城館跡研究にとって、現存する構造を読み込む作業が有効な方法であることも立証したといえよう。以後1981年に刊行された『日本城郭大系』でも⁴⁾、1987年に刊行された図説『中世城郭事典』でも⁵⁾、芥川城は、三好山の城跡が長慶の芥川城として評価されている。

ところで城跡の名称であるが、文献上からは芥川城と記されているだけで、こうした点からも従来市内芥川の地が芥川城と誤解されていた。しかも芥川の地にも芥川氏段階の平城は存在しており、より複雑となっている。文献上では現れないが、混乱をさけるため現在では三好山にある城跡を芥川山城跡と、西国街道沿いの芥川の城跡を芥川城跡と呼称している⁶⁾。

さて芥川山城跡は大阪府下では四條畷市に所在する飯盛城跡とともに城郭遺構を良好に残す大規模な山城跡として1970年代後半から城郭研究者に注目されていた。ところが1980年以降いわゆる縄張り研究が飛躍的に進歩し、その嚆矢となった芥川山城跡では逆にその進歩の前段階の研究でとどまっていたのが現状である。

今回高槻市教育委員会による芥川山城跡調査の実施にともない、城跡の全体構造を改めて調査する機会を得た。本稿は三好山に遺存する芥川山城跡の構造を報告するものである。

芥川山城跡は大きく3つのブロックから構成されている(付図、芥川山城跡遺構概要図)。ひとつは主郭①を中心とした西側の曲輪群で、①～⑮がこれに相当する。ひとつは從来出丸と呼称されていた郭⑯を中心とする中央曲輪群で⑯～⑰がこれに相当する。いま1つは土塁囲いの郭⑰を中心とする東側曲輪群で⑰～⑲がこれに相当する。こうした曲輪配置は一見して、南方を防御正面としていることがわかる。

北方は急斜面で、芥川が流れ、自然の防御線となっており郭⑯付近に、数段の曲輪群を設けるのみである。

郭①は芥川山城跡の最高所(182.69m)に選地されており、主郭に相当する。東側に虎口⑦が設けられている。從来この虎口⑦は単に登山道による破壊と考えられ、まったく評価されていなかった。ところが詳細に観察すると、郭①と郭②の星線が虎口⑦を挟んで南北でややずれており、いわゆる喰違いとなっている。さらに虎口の城内側では郭①と郭②に段差があり、枠形状の空間を有している。こうした状況から破壊道ではなく、城の虎口として評価できよう。

西北尾根筋は先端を堀切⑧によって処理しており、郭⑤と郭④の間にも堀切⑨が設けられている。この堀切⑨は土橋の南側で堅堀となっている。土橋を渡り、一端左へ折れて虎口⑩に至る。この虎口⑩の防御を固めるため、郭④の西端と南側はL字状の土塁が主郭①の西北隅より築かれている。

南方へ伸びる尾根筋には郭⑫、郭⑬が設けられ、郭⑪との間は比高差のある切岸と堀切⑭によって区切られている。堀切⑭は二重堀切であるが、完全に郭⑫を切断するのではなく、曲輪平坦面の両脇から掘り切られており、中央部は掘り残され、土塁を築いている。郭⑬の南斜面は急傾斜面となり、郭⑮に至る。郭⑮と郭⑬・切岸の間に堀切⑮が設けられており、この堀切は西端で堅堀となる。郭⑮と堀切⑮の間には高さ3mにおよぶ大土塁が築かれている。大土塁が郭の前面ではなく、背面に築かれた理由は村田修三氏が詳細に検討されている⁷⁾。おそらく堀切⑮を設けるため、北面は急斜面で堀切の法面が確保できることに対して、南面は平坦地であったため、堀切の法面を確保できなかっただめ、掘り込

むか、盛るかによる二者択一で、ここでは土塁を盛ることによって、法面を確保し、堀切の落差を設けたと考えられる。郭⑩はその南端で切岸がつけられず、明確な城域設定をすることなく、尾根筋が続く。これは芥川山城西側曲輪群の地域南端が堀切①であり、郭⑩以南に続く小削平地もこの考えからすると、城郭に伴う遺構ではなく、後世の竹林等に伴う造成と考えられそうである。

主郭①の東側には階段状に郭⑥、⑦、⑧、⑨、⑩、⑪が連続して築かれており、中央曲輪群から主郭①に至るルートの防御を強固なものとしている。

西側については主郭①の下に郭⑩が設けられているが、芥川に至る急斜面自体が防御施設となっている。

従来から出丸と呼称されている郭⑩を中心とした中央曲輪群については、郭⑪と郭⑧間に自然の大きな谷があり、これが堀切の役目を果していたと考えられる。しかし曲輪群の東端では明確に堀切①が設けられていることを考えると、中央曲輪群と主郭を中心とする西側曲輪群は分離独立して防御するものではなく、一連の曲輪群として機能していたようである。

郭⑪と郭⑧の間の南側谷筋が大手道であったと考えられる。谷筋には巨大な石垣を壁面とする郭がある。従来この石垣については、城郭に伴うものと、近世以降の治水に伴うものという評価に分かれていた。石垣の崩落部分を観察すると、栗石が認められることと、表面の石材や積み方が郭⑩の南東隅部の石垣と同一であること、さらに今回の分布調査で新たに確認することのできた郭⑩東側の石垣とも同一のものであることから、谷筋の石垣も城郭に伴う遺構と考えられる。この石垣こそが大手道防御の最大の閘門となるわけである。当時のルートは谷筋を登り、石垣の上段の曲輪から左に折れ、スロープを登りつめる。

その正面には郭⑩の石垣が正面に積まれ、さらに石垣に沿って右折して虎口②に至るものと考えられる。虎口②付近も竹林による破壊が著しく、従来まったく虎口の想定はされていなかった。石垣との関連から虎口であった可能性は高いが、竹林による破壊部分であることも考えられ、地表面からの判断は慎重にならざるを得ない。

谷の北側には郭⑩を中心に小さな曲輪が階段状に削平されている。最北端の曲輪には土塁も認められることから、これら一連の削平地は、城郭に伴うものである。機能としては防御背面の谷筋にあたることから、屋敷地の可能性を考えられ、それを裏付けるように、遺物も地表面に散乱している。

中心的な郭⑩には虎口②が認められる。切岸に斜めに取りつく登山道は後世につくられた道かもしれないが、虎口②には前面に横矢がかかるような小削平地が対になっているの

が認められる。郭⑩の西側から南側にかけて、L字状に郭⑪がある。南西端部には土塁も認められる。特に南東隅部は土塁で開み、突出させている。この突出部の南側切岸部のみ石垣が築かれており、注目できる。

南側尾根は郭⑪から南で大きく2段に分岐しており、西側尾根筋には郭⑫があり、それより南方は尾根筋上に堀切⑬、⑭、⑮、⑯、⑰が掘り込まれている。この尾根筋の諸施設は大手谷筋の東側防御を目的としたものと考えられる。東側に分岐した尾根筋には大堀切⑯が尾根筋に添って逆U字形に堀り込まれている。さらに堀切⑬の南方にも郭⑯を中心にして4つの大きな郭を配し、南方防御の拠点としている。

東側曲輪群との間に堀切①が両側へ堅堀となって掘られて、1つの閑門となっているが、この堀切①には見事な土橋を見る事ができる。土橋から郭⑪へ進入する虎口は、残念ながら登山道で破壊されており、判然としない。しかし郭⑯から東へ一直線に土塁が設けられているのは、おそらく虎口空間を防御するためのものであり、土橋から郭⑯へ进入する虎口は、芥川山城のなかでも重要な位置を占めていたことはまちがいない。

さて東側曲輪群は郭⑩との間を堀切①によって区画され、郭⑫がその中心的曲輪となる。郭⑫は江戸時代後半以降墓地として利用されてはいるが、東・南・西面に土塁を設けた、方形区画の郭である。北方にのびる尾根筋で、郭⑫は切岸もしっかりしており、明らかに城郭に伴う遺構であるがさらに北方に続く小削平段は城郭のものであるのか、後世のものかは判断できない。

郭⑫の南には高さ1mで、約30m続く見事な堅土塁が斜面を一直線にのびている。これは東側から進入してきた敵の斜面地移動を封鎖する目的で築かれたものと考えられる。この堅土塁に守られるように、土塁西側に4段の削平地がある。

郭⑫の東方については郭⑫の副郭として郭⑯があり、その東には広大な削平地、郭⑯が位置している。郭⑯の中央には一段高く櫓台状の上塙がある。上塙は郭⑫同様、墓地として利用されており、城郭に伴う施設か否か疑問が残る。特に中世山城跡の場合、曲輪の四隅に櫓台を設ける事例は多く認められるが、このように曲輪の中央に天守台状のような上塙が位置するものはほとんど類例がない。

郭⑯から東北へのびる尾根上に広大な削平地が数段認められ、また南方へ派生する二つの尾根上にも郭⑯、⑰が認められるが、いずれも現状は竹林であり、後世に改変されたか、あるいは削平された可能性が高い。

城域の東端は帶任山との間の谷であろうと考えられるが、堀切という施設ではなく、自然の谷をそのまま利用したもので、西端の堀切⑬、⑭や南方の堀切⑬、⑯に比べて幅こそ

広いものの、城内側への比高が低く、防御性は低い。堀切というよりは、むしろ摂津、丹波を結ぶ峠道をそのまま城域に取り込んだ結果といえよう。

この峠道の東側が帶仕山で三好長慶が芥川城に立て籠る芥川孫十郎を攻めるにあたって、天文22年（1553）に数ヵ月間「陣」を構えた山である⁸⁾。その標高は192.3mで、芥川山城よりも高い。現在帶仕山には「陣」の遺構は認められないが、これは当時の陣城が、後の織豊期段階の陣城のように上塁や横堀をめぐらすものではなく、楯を立て並べ、兵が駐屯できる広大なスペースが陣城であったことを示しているのではないだろうか。

興味深いのは、同じ山系で、標高の高い帶仕山に城を築かず、三好山に築かれたことである。帶仕山は確かに標高は高いが、山頂は広大で、起伏がなく、谷筋も存在しない。これに対して三好山は派生する尾根が階段状に加工しやすく、谷が入り込み、堀切を設けやすい。しかも芥川が北から大きく迂回して三方を取り巻き、周囲はかなりの急斜面となっている。こうした地形こそが中世の山城を築くにあたって、最高の要害たりえたのである。

以上現存する遺構から芥川山城跡の構造をみてきたが、あくまでも地表面に残る地形からの読み込み作業であり、本文中でも述べたように後世に搅乱を受け、判読不明な部分も數多くある。これらについては今後の考古学的調査によって明らかにされていくであろう。

最後に残存する芥川山城跡の年代であるが、曲輪配置の形状などから、おそらく天文22年～永禄3年に在城した三好長慶段階のものと考えて差しつかえないものと考える。しかし、今回主郭①で検出された礎石建物跡や枡形虎口、郭⑨、⑩や大手谷筋の石垣など、明らかに部分的ではあるが、永禄年間以降の改修が認められる。こうした改修の時期については永禄11年（1568）の織田信長の侵攻後、信長によって和田惟政が入城した。惟政は翌年高槻城に移り、替って高山飛驒守、彦五郎（右近）父子が入城した。元亀2年（1571）に、惟政は中川清秀に討たれ、同4年には高山氏が高槻城に入り、芥川山城は廃墟となつた。こうした和田、高山段階に改修を受けたことは容易に想像がつく。おそらく和田、高山両氏による高槻築城に際して、その昔諸期間中における防御の拠点として、改修され、存続していたものと考えられる。そして高槻城の完成とともにその任を終え、廃城となつたのではないだろうか。

なお、芥川山城跡は大阪府下では、同じ三好長慶の居城であった飯盛城跡とともに、規模の大きな中世山城跡として、残存状況も良好で、文献資料も豊富な城跡である。今後永く現状のまま保存され、活用されることが切に望まれる。

註

- 1) 北本好武「芥川城」・「三好山城」(『日本城郭全集』9 東京・人物往来社 1967年)
- 2) 村田修三「大和の城跡と国人」(『歴史読本77-6 戦国乱世武将城郭百科』 1977年6月)
- 3) 南條範夫・上山春平・村田修三「戦国の山城と群雄-近畿の要衝・芥川城をめぐって-」(『歴史読本』304号 1979年7月)
- 4) 中村博司「芥川城」・「芥川山城」(『日本城郭大系』第12巻 東京・新人物往来社 1981年)
- 5) 村田修三「芥川山城」(『図説中世城郭事典』3 東京・新人物往来社 1987年)
- 6) 三浦圭一「戦国動乱と高槻」(『高槻市史』第1巻本編I 1977年)で、三好山に所在する城跡を芥川城としている。同書では、文献資料から芥川城が三好山に所在する城跡であることも推定している。
- 7) 前註2)
- 8) 「(天文二十二年七月三日) 三好筑前守長慶芥川城へ押寄、城ノ東ノ方ヲ帶シ、山ヘ陣取、対陣シケル」(『足利季世記』)
「一、同(天文二十二年)七月三日より長慶衆、芥川城東の方を帶し、山へ陣給ふ也」
(『細川両家記』)

VII まとめ

今年度は島上郡衙跡2件、郡家今城遺跡5件、芥川遺跡1件、郡家車塚古墳2件、芥川山城跡1件の合計11件について発掘調査を実施した。今年度の調査結果と今後の課題を簡単にまとめてみる。

島上郡衙跡では史跡指定地北側の郡家本町の丘陵裾部において奈良時代の掘建柱建物群の一部が検出された。従来から郡家本町の丘陵一帯では弥生時代以降の遺構・遺物が検出されている。今回検出された建物群については郡司層の集落の一部と推定したが、平成3年度の丘陵上部の調査では島上郡衙跡や郡家今城遺跡でも例をみない長大な建物を含む建物群が検出され、郡衙関連遺構の可能性が指摘されている。また芥川廃寺に瓦を供給した瓦窯跡もあり、丘陵部全体が島上郡衙跡と密接な関係にあることが指摘できる。その具体的な内容については推察の枠をでないが、今後とも注意していきたい。

郡家今城遺跡も島上郡衙跡と密接な関係にある。この遺跡は従来から島上郡衙の官人層の集落と指摘されてきた。遺構だけでなく出土遺物の豊富な内容からも想像をたくましくすることができる。今年度の調査(93-1)では円面硯や風字硯が出土している。また、各調査区からは綠釉陶器・灰釉陶器が出土しているが、これらの遺物類は調査が周辺部に限定される島上郡衙跡出土資料よりも豊富な内容と質をもっている。従来、郡家今城遺跡では瓦の出土はすくなかつたが、府立三島高校西側の調査区(93-5)で約100点が出土した。このため、使用は限定されるが瓦葺き建物の存在を想像することができる。

郡家今城遺跡は島上郡衙跡の消長と期を一にするといわれるが、今年度は三島高校周辺での調査を中心であり、集落の実態や変遷をあきらかにする資料が得られた。三島高校南西の調査区(93-4)では1973年に調査された島上郡十一条六里と七里を界する東西溝SD2の延長部が確認されている。SD2の北約60mには平行するSD1があり、やはり1993年の調査で延長部が確認されている。さらに、今回はわずかながら1973年調査の南北溝SD3の延長部も確認された。これら条里溝で方形に区画された内部に奈良時代の集落が営まれたことがますます明確になってきた。また三島高校の北・西の調査区(93-1・2・5)では山陽道に沿う建物群の存在が明らかになってきた。具体的な内容は報文にあり、ここでは省略するが9世紀中頃ないし後半を境として集落が変質または衰退に向かうことが指摘できる。それは条里溝の埋没と山陽道がその幅員を狭めることに端的に現れる。そして、10世紀中頃までには山陽道の側溝は埋没し、集落も消滅するようである。このような現象は律令体制の変質過程を集落変遷面から言及するうえで重要な調査成果といえる。

本概報ではこれまでの調査成果との関連についてできるだけ触れるようにつとめたが、今後ともこのような努力をつづけていきたい。

郡家車塚遺跡の調査では、今回あらたに墳丘測量図を作成したのをはじめ、トレンチによる遺構確認調査を実施した。調査の結果、古墳の全長や後円部の直径、高さなど基本的なデータが確かめられたのをはじめ、墳丘が葺石に覆われた二段築成で、周濠をもたないことがあきらかになった。また出土した埴輪は前期後半に属し、多くの鰐付円筒が伴うなど、貴重な成果があがってきている。さらに、地中レーダー探査をはじめとする遺構探査によって、主体部が竪穴式石室である可能性があり、その位置と方位が推定されるなど、今後の調査に資する成果も數多く得られた。これらの考古学的事実は単に三島古墳群の解明といったことにとどまらず、畿内の古墳時代の研究にとって重要な資料になるものである。今年度の調査をとおして、郡家車塚古墳の重要性はますますかまってきたといえる。

芥川山城跡は大部分が山林におおわれているため、ごく一部の研究者にしか知られていなかった。これまで城郭研究家などによる縄張図（遺構図）の作成などが実施されてきたが、発掘をともなう考古学的手法による調査は今回がはじめてである。城跡のある三好山は三方を芥川に囲まれた自然の要害である。今回、遺構概要図を作成したところ尾根や谷筋を最大限に利用した郭や堀切がみられた。その範囲は三好山一帯の東西約450m・南北約450mにわたり、これまでに知られている戦国時代山城のなかでも屈指の規模である。

ここで、歴史に登場する芥川城について『高槻市史』を中心に略年表をまとめるとつきのようになる。

- 弘安7年（1284） 芥河（川）氏文獻に初見。
延慶2年（1309） 芥川孫三郎六郎左衛門尉信時らの活躍記録。
建武3年（1336） 芥川岡八郎国持、安満繩手で闇う。細川定禪・赤松範資芥川（宿）に陣す。
正平年間（1346～1369） 芥川三河守、芥川城を築く（『摂津志』）。
応仁元年（1467） 芥川氏東軍に属して闇うが、西軍の大内氏の軍門に下る。芥川本家は消滅する。
文明14年（1482） 細川政国、芥川へ進駐するが、大蔵司に宿す。この頃には芥川（城）は衰退していたらしい。
延徳2年（1490） 細川政元、摂津へ下向。芥川の本格的再建か。
永正2年（1505） 芥川城主能勢頼則の初見。能勢氏のための新しい城の普請・造営。

- 永正3年（1506） 細川澄元、三好之長の上洛。能勢氏に代わって、三好長光（芥川次郎）・長則（芥川孫四郎）が入城、芥川氏を称する。
- 永正4年（1507） 4月、薬師寺忠長・香西元長、細川政元を暗殺する。
8月、細川澄之・薬師寺忠長・香西元長、細川澄元・高国・三好之長に攻められ敗死。
- 永正5年（1508） 細川高国、足利義材を擁立して軍をおこす。細川澄元・三好之長ら近江へ逃げる。
- 永正8年（1511） 船岡山の鬭いなど。三好之長ら阿波へ帰国。能勢氏の芥川城主復帰（浜津守護代か）。
- 永正12年（1515） この頃に三好山に新城を築く。
- 永正13年（1516） 能勢頼則没。源佐衛門頼明が城主に。
- 永正17年（1520） 三好之長ら上洛するが、細川高国に敗れる。之長・長光・長則自刃する。阿波勢の来襲を防ぐため芥川城（三好山）の強化。
- 大永3年（1523） 能勢源五郎国頼主催の連歌会（三好山）。
- 大永6年（1526） 細川晴元・三好元長ら反高国派の蜂起はじまる。
- 大永7年（1527） 桂川の合戦で細川高国方の敗北。高国政権の崩壊。芥川城、晴元方へ降伏する（能勢氏逃げる）。
- 享禄4年（1531） 細川高国敗死する（世に大物崩れという）。
- 享禄5年（1532） 細川晴元・一向宗門徒、櫻の頭本寺に三好元長を攻め自刃させる。間もなく晴元と一向宗の対立。晴元、淡路へ逃げる。
- 天文2年（1533） 細川晴元、芥川城に入る。天文5年まで在城する（桑実一芥川体制）。
- 天文8年（1539） 三好長慶入城するが、六角定頼により接取さる。薬師寺与一が城主になる。
- 天文10年（1541） 木沢長政、細川晴元に反旗をひるがえす。芥川城をめぐる攻防戦あり、奈佐原庄も兵火をうける。細川晴元、芥川に進駐する。
- 天文11年（1542） 細川晴元、芥川城に在り。木沢長政、河内太平寺で敗死する。
- 天文12年（1543） 細川氏綱の蜂起。細川晴元、芥川城に進駐。
- 天文13年（1544） 細川晴元、芥川城で新年をむかえる。
- 天文15年（1546） 遊佐長教ら河内勢が芥川城を攻撃。
- 天文16年（1547） 三好長慶・細川氏綱・遊佐長教ら細川晴元の拠点を攻める。芥川城開城。薬師寺元房から芥川孫十郎（長光の子）が城主となる。

- 天文18年（1549） 摂津江口の闘い。細川晴元政権の瓦解。
- 天文21年（1552） 芥川孫十郎の謀反
- 天文22年（1553） 三好長慶、本格的に芥川城（晴元残党）を攻撃し、開城させる。
永禄3年まで長慶在城（芥川政権）。
- 弘治2年（1556） 正月五日、芥川城失火する。芥田川ノ城消失云々（『多聞院日記』）。
- 永禄元年（1558） 三好長慶の加冠役で細川昭元（晴元の子）、芥川城において元服する。
- 永禄3年（1560） 三好長慶、飯盛城へ移る。三好義興城主となる。
- 永禄6年（1563） 三好義興没。三好長逸が入城か。
- 永禄11年（1568） 織田信長、摂津へ侵攻。細川昭元・三好長逸ら芥川城にたて籠もるが、逃亡する。信長入城し、貴族などの挨拶を受ける。和田惟政を芥川城主とする。
- 永禄12年（1569） 和田惟政、高槻城主となる。高山飛驒守が芥川城主となる。ルイス・フロイス芥川城に入る。
- 元亀2年（1571） 白井河原の合戦で和田惟政敗死する。惟長が高槻城主になるが、同4年、高山右近に追われる。

このなかで、永正8年までの芥川城は芥川地区にあったものとみられるが、細川高国と細川澄元・三好之長の権力争いが熾烈を極めた永正12年以降は三好山の新城が芥川城とされた。以後、畿内の戦乱には常に芥川城が登場し畿内政治の中心地となった。天文年間前半は管領細川晴元が、天文22年以後は晴元との権力争いに勝利した三好長慶が居城とした。とくに、飯盛城にうつるまでの三好長慶絶頂期を『高槻市史』では「芥川政権」としている。このように芥川城が重要視されたのは、軍事的要衝というだけでなく、摂津武士団が細川晴元の中核的軍事力を構成し、三好長慶も摂津武士団の把握に配慮したためとみられる。主郭部から南を見渡すと、当時の石山本願寺跡（のちの大坂城）や飯盛城跡をはじめ摂津・河内地方を一望することができる。

この城は郭の配置から南側を防護正面とし、礎石建物などもそれを意識したものである。また、大手道へは現在の城山集落南側の道から入る必要があるが、この道は現在の塚脇の集落内につづき、当時も利用されたのとみられる。この狭隘な部分を守ることも防護上重要なものとみられる。大手道周辺は雜木林がつづき、地表面観察による遺構踏査には限界がある。しかし、郭⑩西南部において石切場が発見され（図版第53b）、露頭した岩には二重枠形の刻印がみられた（図52）。また、虎口⑫付近の石垣も新たに発見された

ものであり、なお未確認の施設や遺構が存在するものとみられる。とくに、井戸については未発見であり、今後の踏査で発見を期したい。また、細川高国に指揮され、能勢氏が昼夜兼行で多くの役夫を使用したという当初の遺構や細川晴元も当然修築したであろう遺構は今回の調査では知ることができなかった。しかし、

採集資料にIV期の備前焼甕がみられるなど今後なんらかの手がかりが得られるものと期待したい。

さて、大手道の石垣などは織田信長が攝津に侵攻した永禄11年（1568）以降、和田・高山氏によって築かれたものとみられるが、ごく一部にかぎられる。このため主郭をはじめ各曲輪群は三好長慶在城期に築かれたものとみられる。今回の調査で検出された礎石建物などは弘治2年の火災を日安に前後二時期にわけられ、その下限は慶長期におよぶ。『高槻市史』では高山右近が高槻城主となる元亀4年頃に廢城されたとしているが、今回の調査では矛盾する結果を得たことになる。この点については高槻城との関連もあり今後の検討課題である。

最後に、芥川地区の殿町において南北朝期から戦国時代の遺物が検出されている。このため、芥川地区に戦国時代の平城跡または居館跡を想定し、西国街道が芥川一里塚付近で屈曲するのは城跡のためであるという説がある。しかし、平成元年からの広大な芥川遺跡の調査において戦国時代の遺構・遺物はまったく検出されなかった。このため殿町付近の戦国時代遺物に別の解釈をもとめてはどうであろうか。その一案として、天文初年まで關錢を徵収していた内蔵寮支配の芥川率分所（關所）をあげておきたい。

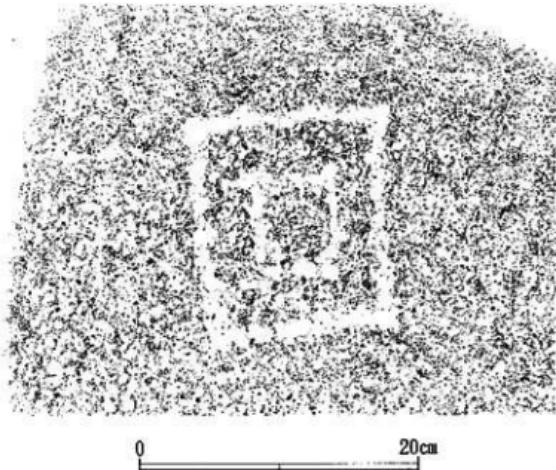


図52. 刻印拓影

0

20cm

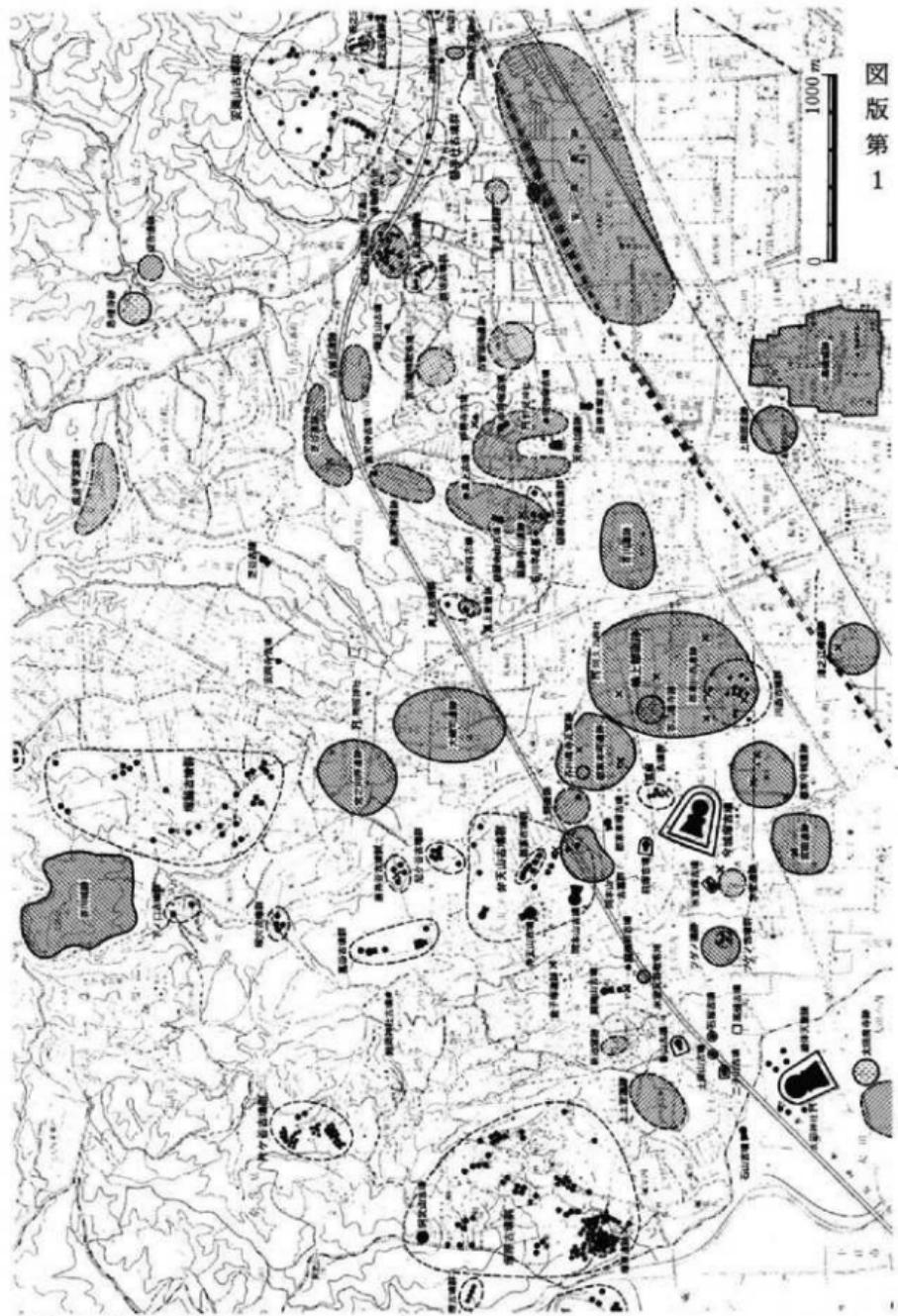
0

20cm

以上今年度市内遺跡群の調査概要をまとめたが、調査成果の蓄積をつうじて地域の古代
・中世史がより身近なものになるよう努力していきたい。 (橋本・森田)

図 版

図版第1



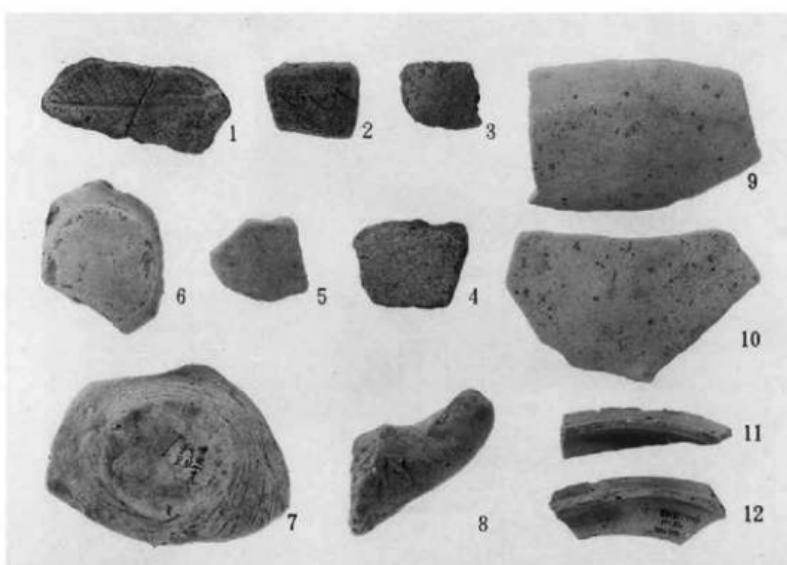
島上郡衙跡とその周辺



a. 5-A・B地区 全景(東側から)

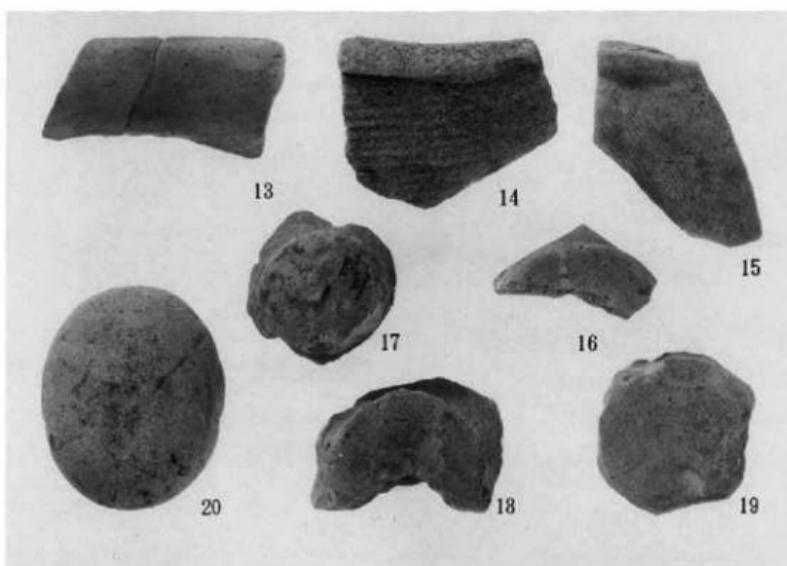


b. 5-A・B地区 全景(西側から)



a. 5-A・B地区 土壌I (1~6・11) 柱穴3 (9・10)
柱穴4 (8) 柱穴26 (7・12)

約 $\frac{1}{2}$



b. 5-A・B地区 土壌I (20) 包含層上層 (13~16)
包含層下層 (17~19)

約 $\frac{1}{2}$



a. 郡家今城遺跡（93-1） 調査区全景（西側から）



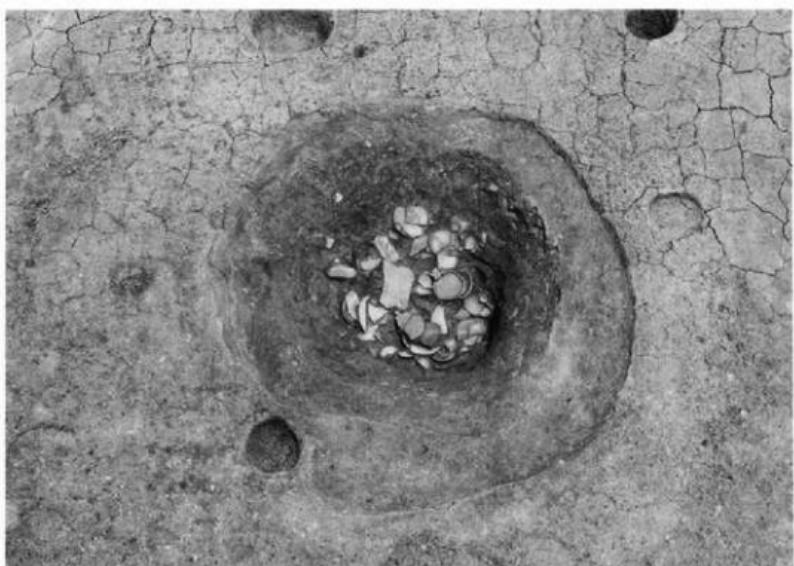
b. 郡家今城遺跡（93-1） 調査区全景（東側から）



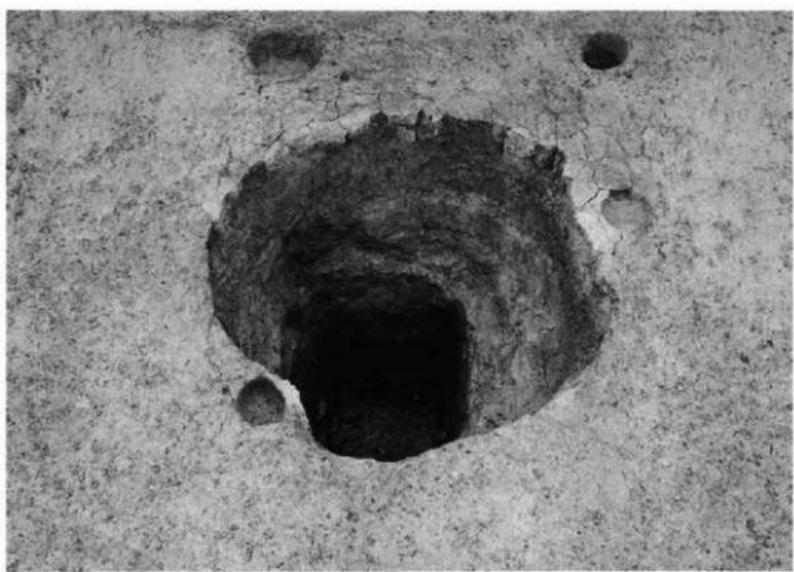
a. 郡家今城遺跡（93-1） 調査区東半部（西側から）



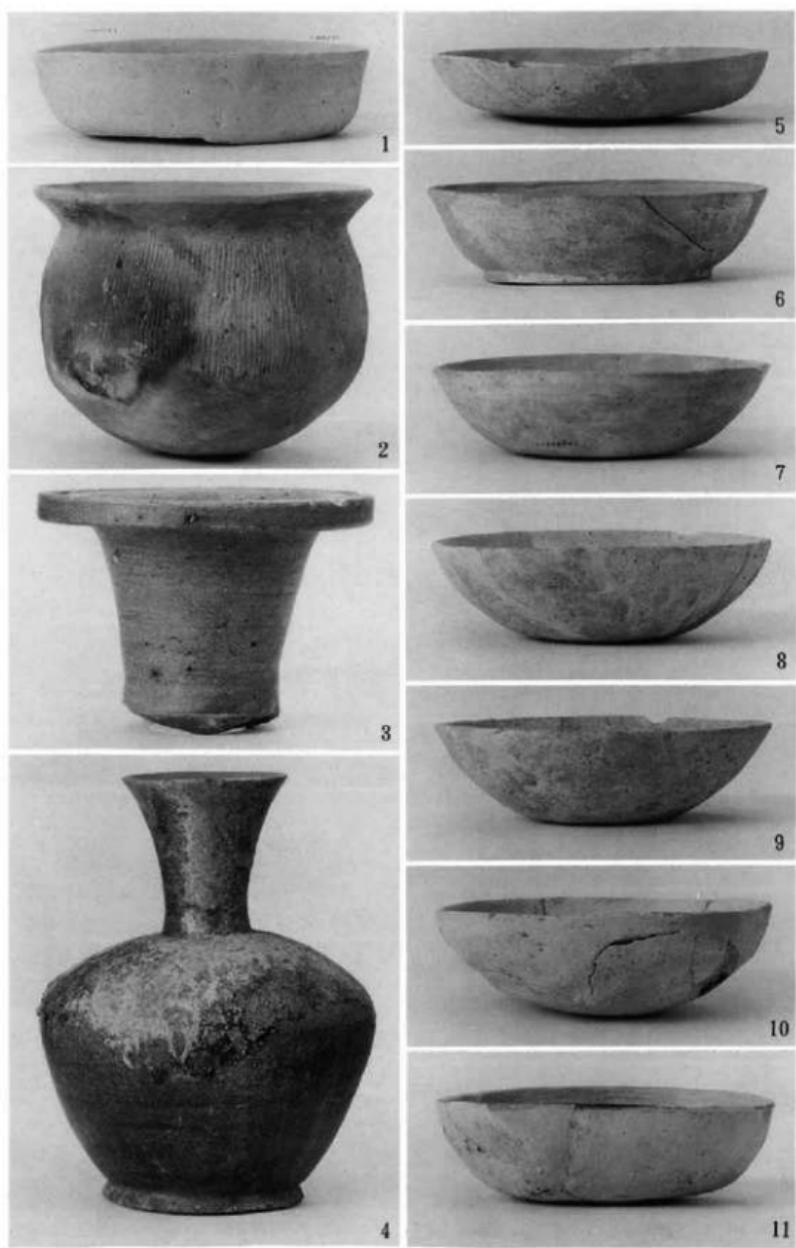
b. 郡家今城遺跡（93-1） 調査区東半部（南側から）



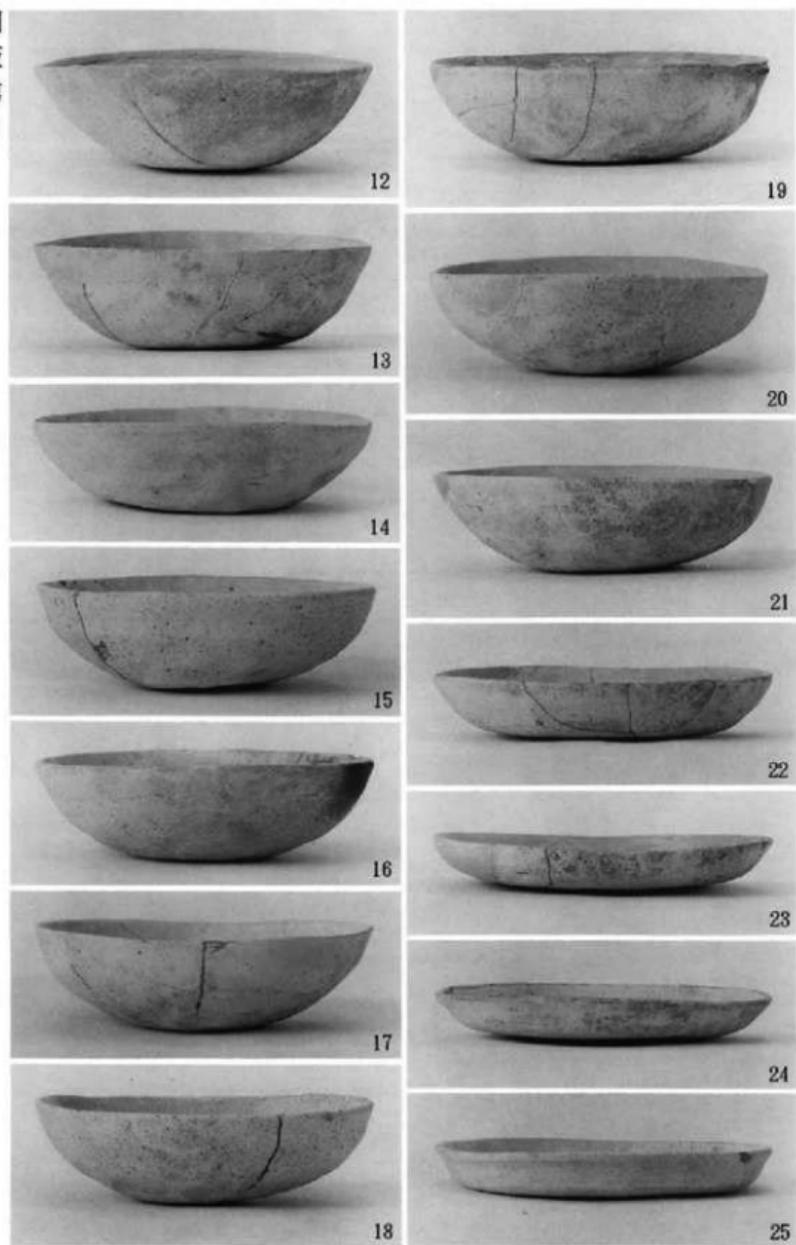
a. 郡家今城遺跡（93-1） 井戸1上層土器出土状況（南側から）



b. 郡家今城遺跡（93-1） 井戸1（南側から）



郡家今城遺跡(93-1) 井戸1下層(1~4) 上層(5~11)



郡家今城遺跡(93-1) 井戸1上層(12~25)



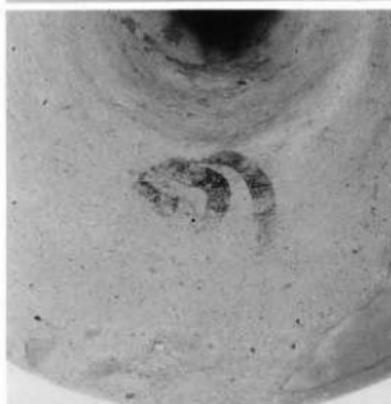
26



28



29



26'



30

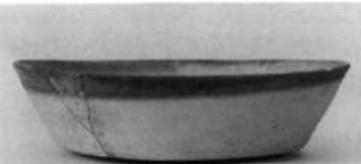


27



31

郡家今城遺跡(93-1) 井戸1上層(26~31)



32



38



33



39



34



35



40



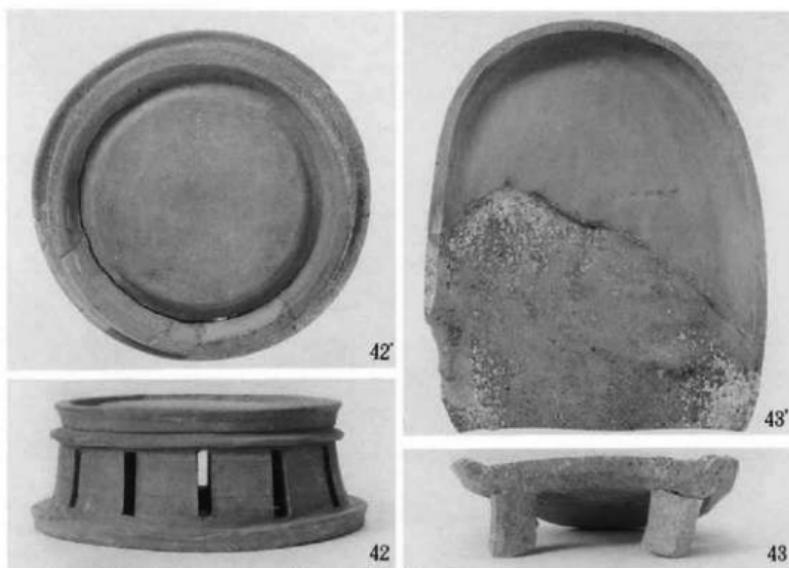
36



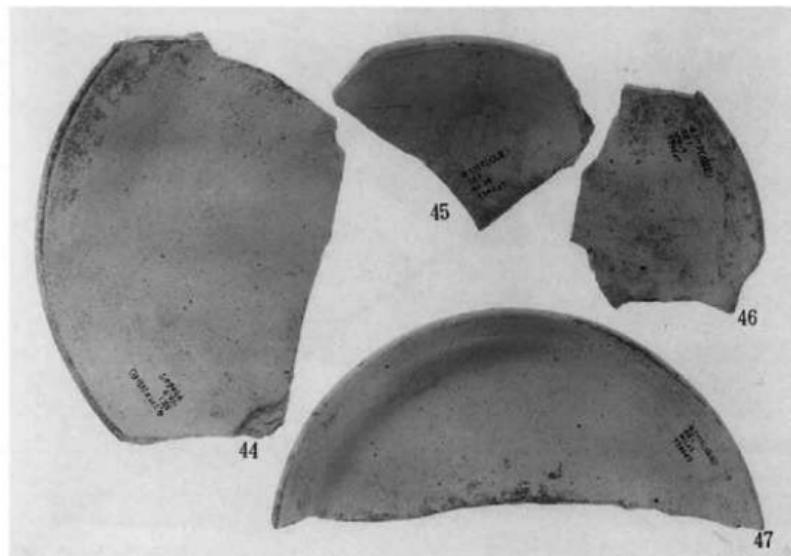
37



41

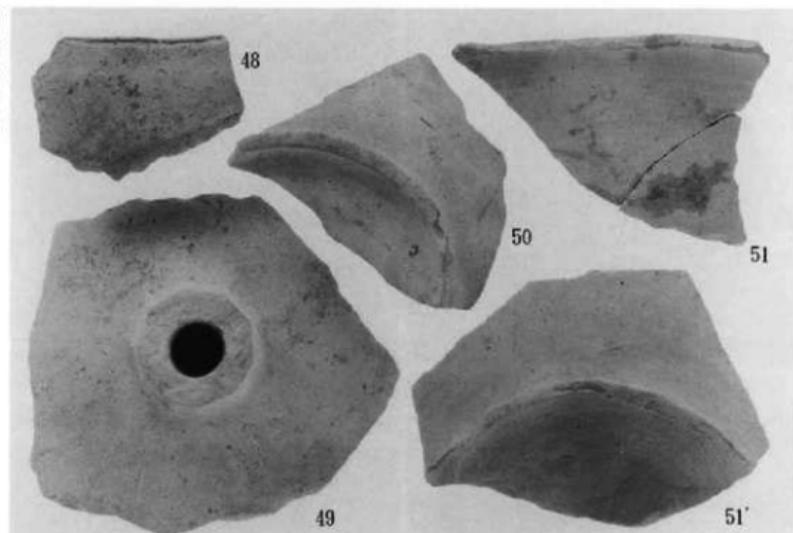


a. 郡家今城遺跡(93-1) 井戸1上層(42・43)



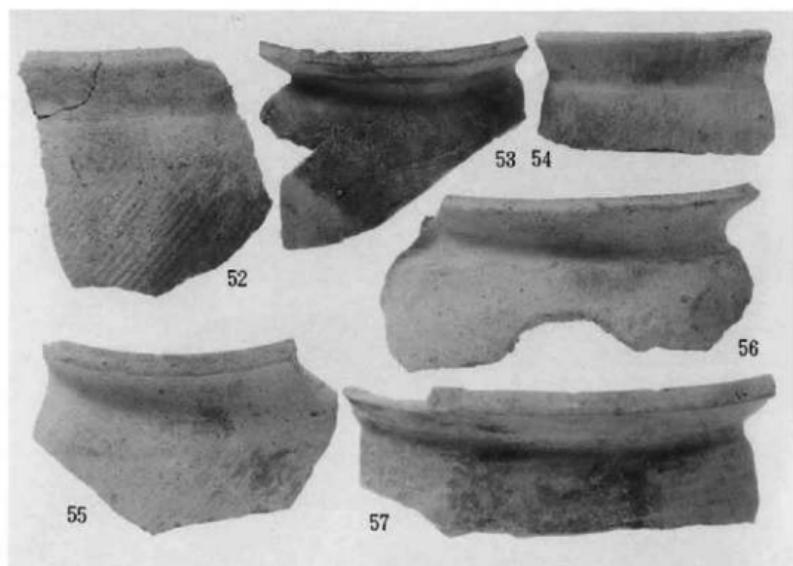
b. 郡家今城遺跡(93-1) 井戸1上層(44~47)

約 $\frac{1}{2}$



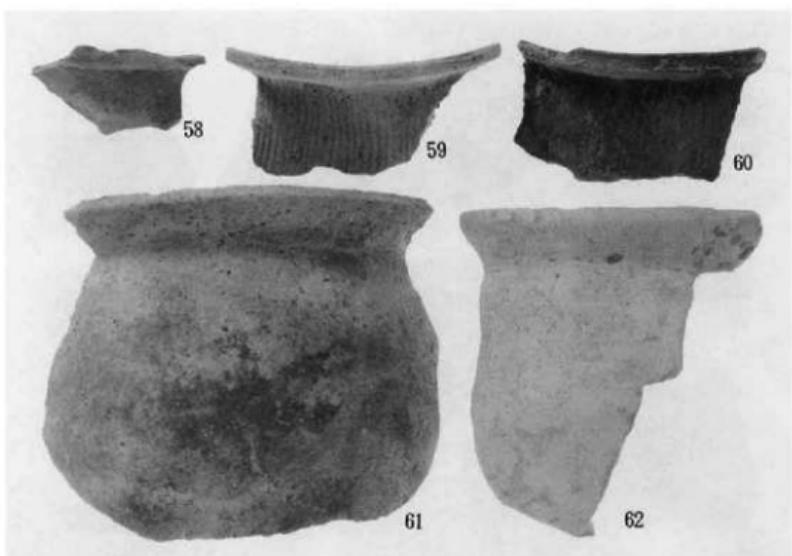
a. 郡家今城遺跡 (93-1) 井戸1上層 (48~51)

約 $\frac{1}{2}$



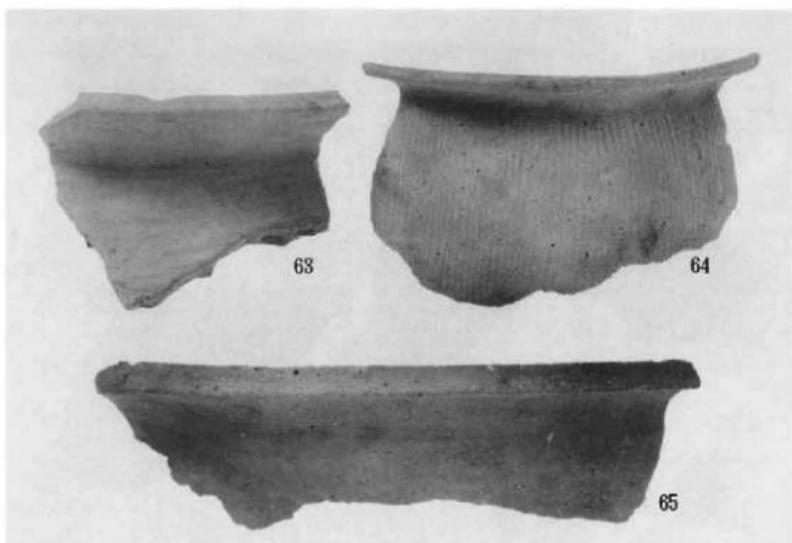
b. 郡家今城遺跡 (93-1) 井戸1上層 (52~57)

約 $\frac{1}{2}$



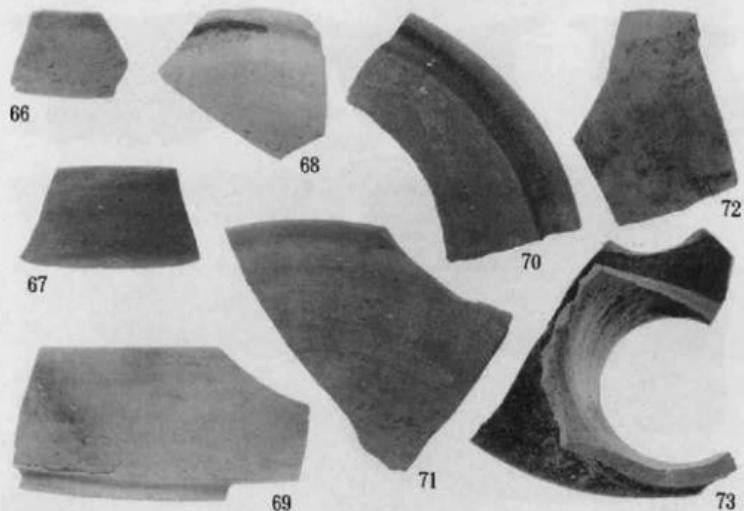
a. 郡家今城遺跡 (93-1) 井戸 1 上層 (58~62)

約 $\frac{1}{2}$



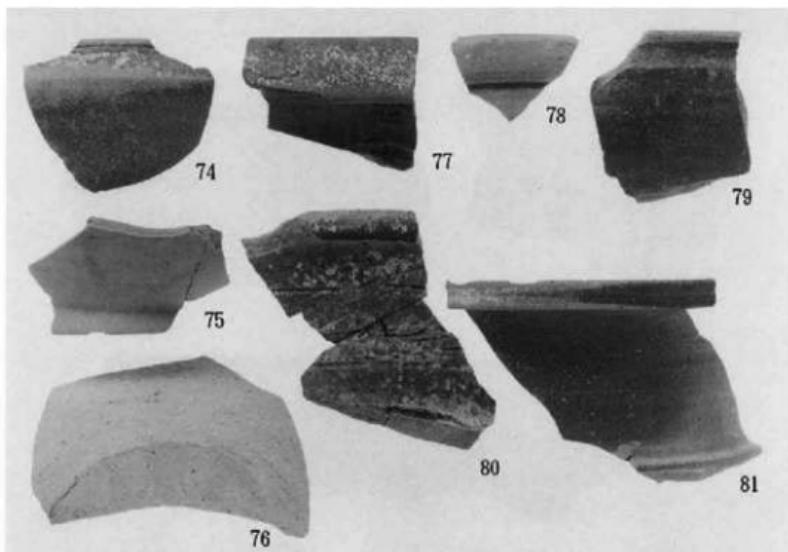
b. 郡家今城遺跡 (93-1) 井戸 1 上層 (63~65)

約 $\frac{1}{2}$



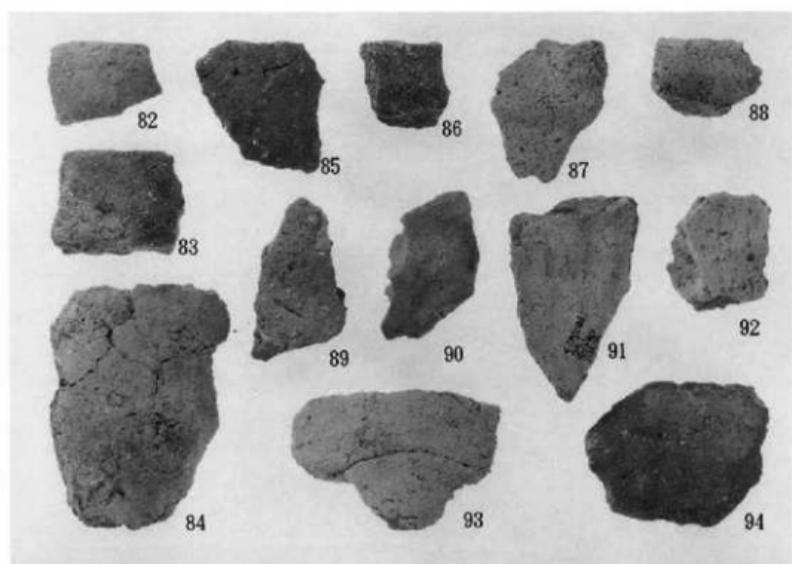
a. 郡家今城遺跡 (93-1) 井戸1上層 (66~73)

約 $\frac{1}{2}$



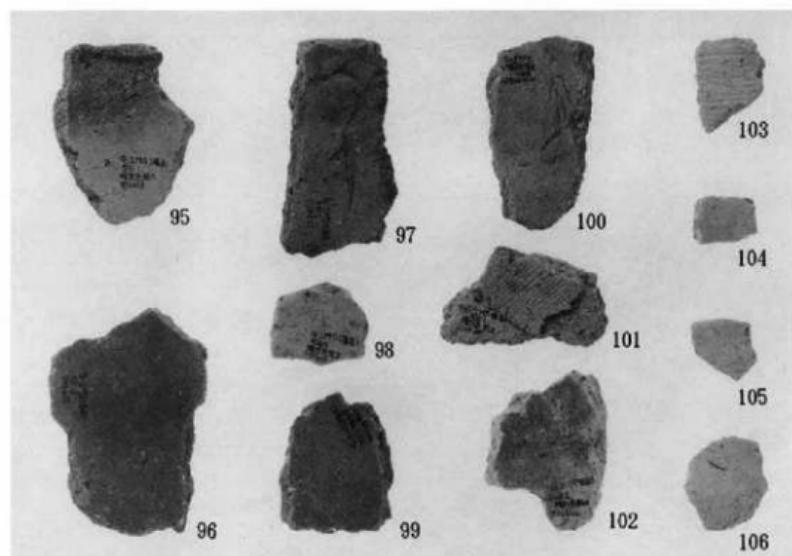
b. 郡家今城遺跡 (93-1) 井戸1上層 (74~81)

約 $\frac{1}{2}$



a. 郡家今城遺跡 (93-1) 井戸1上層 (82~94)

約 $\frac{1}{2}$



b. 郡家今城遺跡 (93-1) 井戸1上層 (95~106)

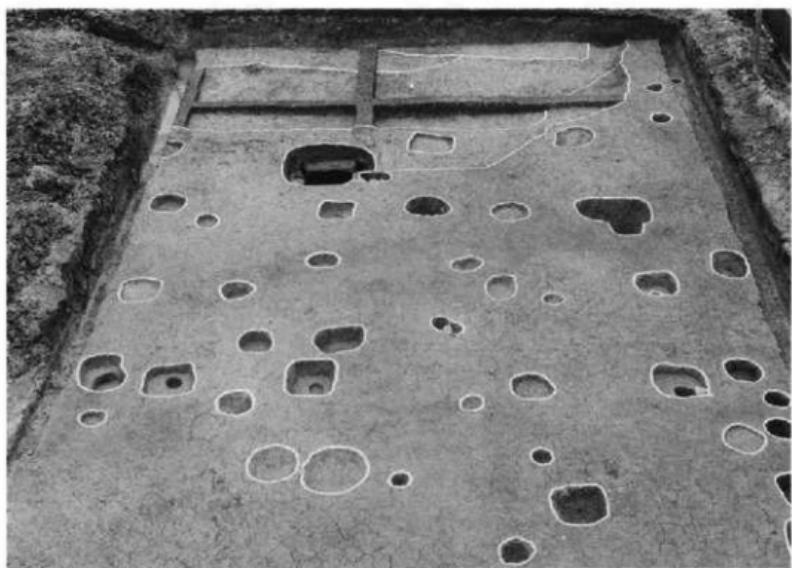
約 $\frac{1}{2}$



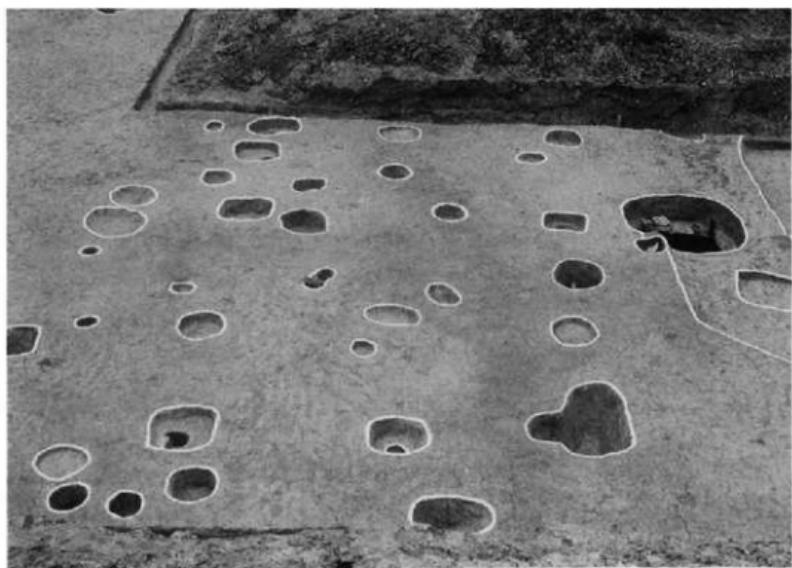
a. 郡家今城遺跡（93-2） 調査区全景（東側から）



b. 郡家今城遺跡（93-2） 調査区全景（西側から）



a. 郡家今城遺跡（93-2） 調査区東半部（西側から）



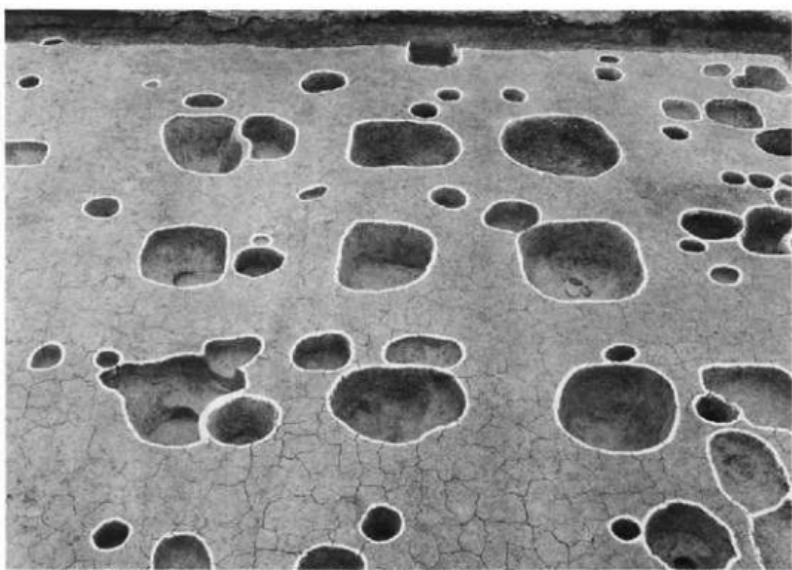
b. 郡家今城遺跡（93-2） 調査区東半部（南側から）



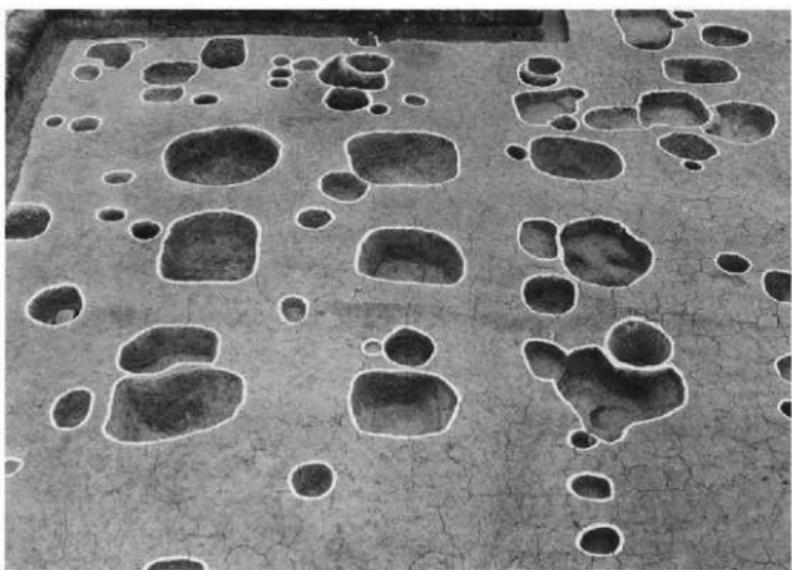
a. 郡家今城遺跡（93-2） 井戸2（東側から）



b. 郡家今城遺跡（93-2） 挖立柱建物8~10（東側から）



a. 郡家今城遺跡（93-2）掘立柱建物12（北側から）



b. 郡家今城遺跡（93-2）掘立柱建物12（東側から）



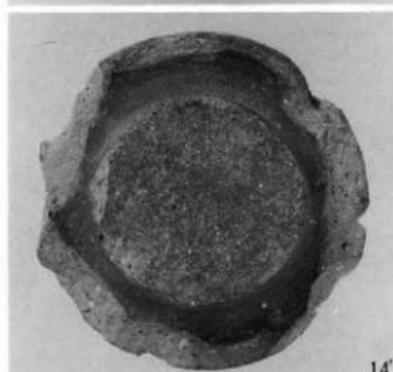
1



2



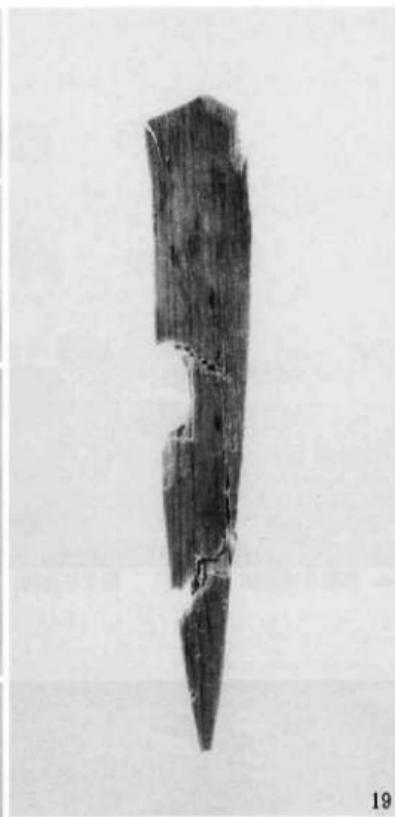
3



14'



14

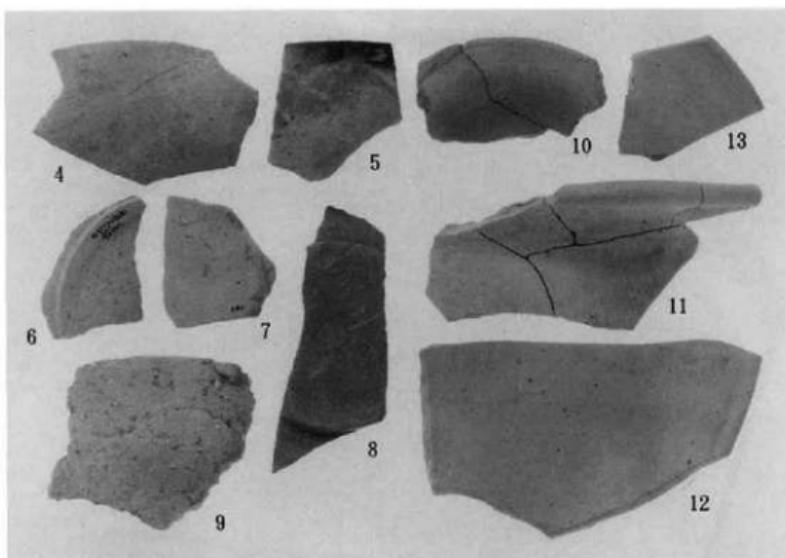


19

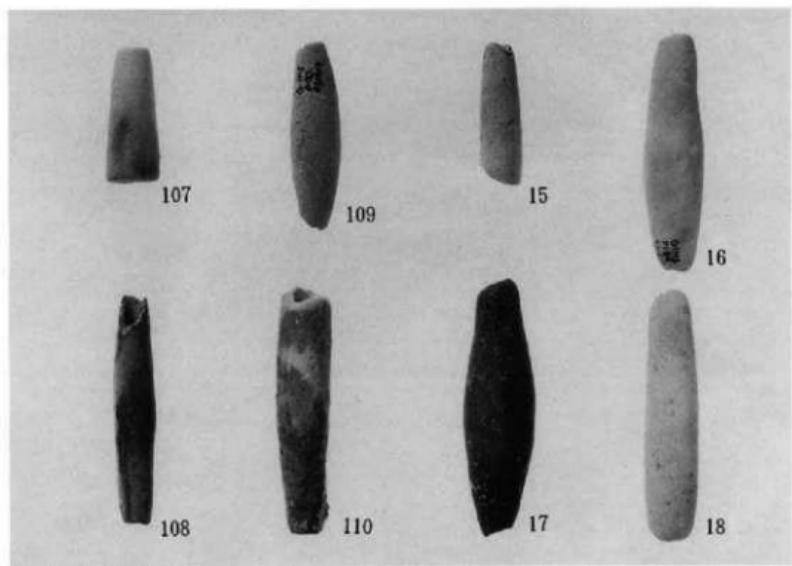


20

郡家今城遺跡(93-2) 井戸2 (1・2・19) 掘立柱建物14 (3) 土坑1 (14・20)



a. 郡家今城遺跡(93-2) 土坑1(4~9) 土坑2(10~13) 約 $\frac{1}{2}$



b. 郡家今城遺跡(93-1・2) ピット44(107・108) ピット122(109・110)
ピット184(15・16) ピット130(17) 土坑(18) 約 $\frac{1}{1}$



a. 郡家今城遺跡（93-4） 全景（北側から）



b. 郡家今城遺跡（93-4） 全景（南側から）



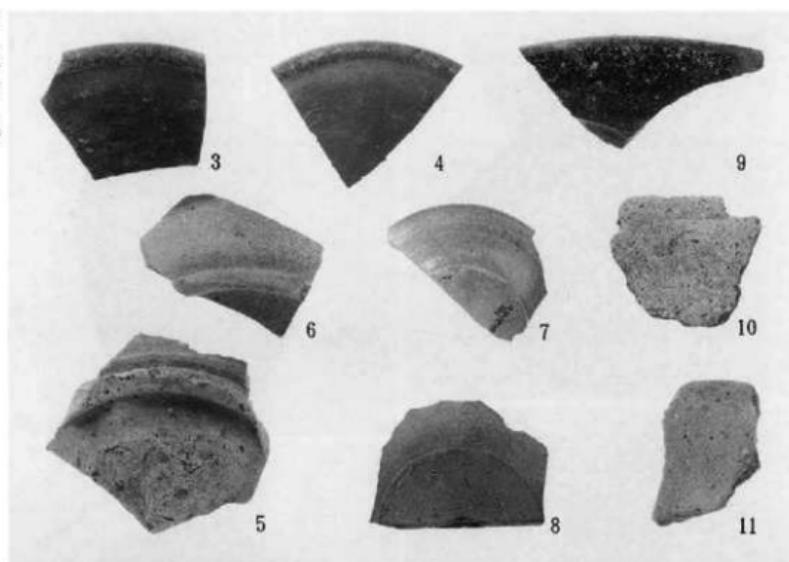
郡家今城遺跡(93-4)

溝2(1・2)

溝1(16)

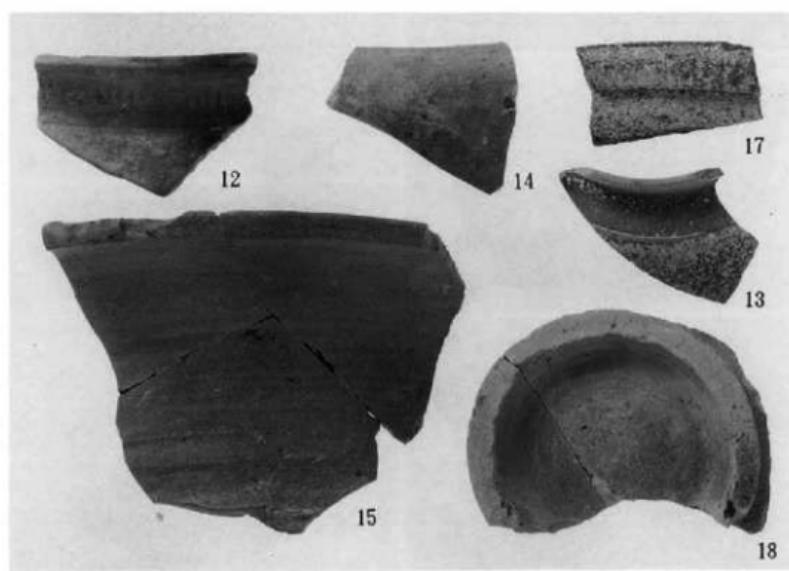
落ち込み(41)

包含層(42・46)



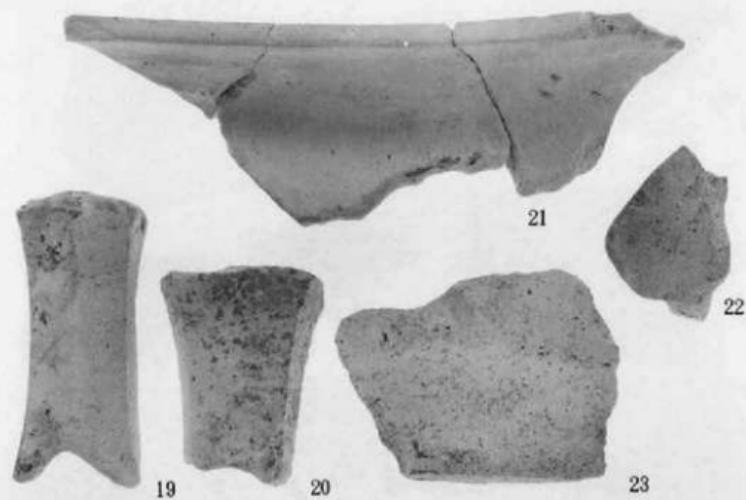
a. 郡家今城遺跡 (93-4) 溝1 (3~11)

約 $\frac{1}{2}$



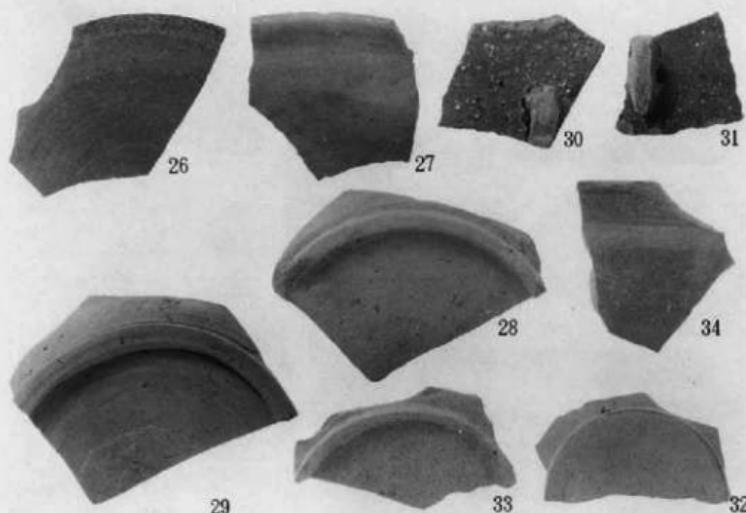
b. 郡家今城遺跡 (93-4) 溝1 (12~15・17~18)

約 $\frac{1}{2}$



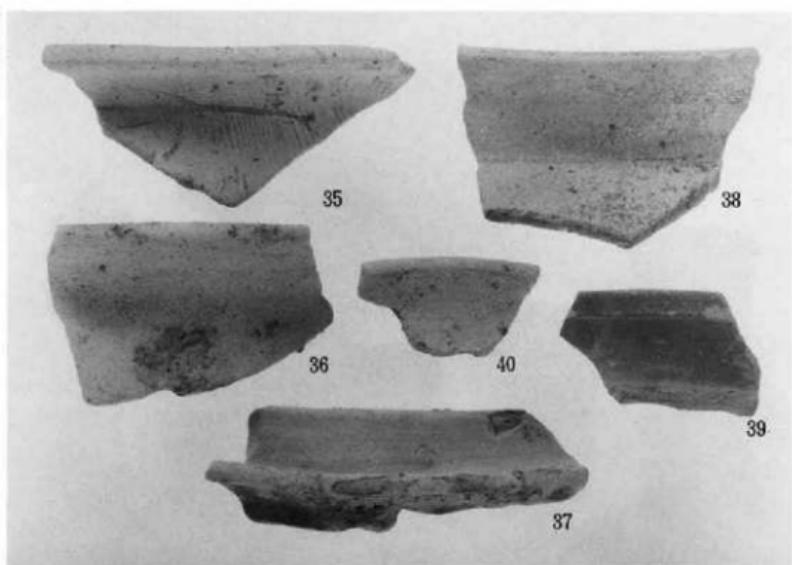
a. 郡家今城遺跡 (93-4) 溝1 (19~23)

約 $\frac{1}{2}$



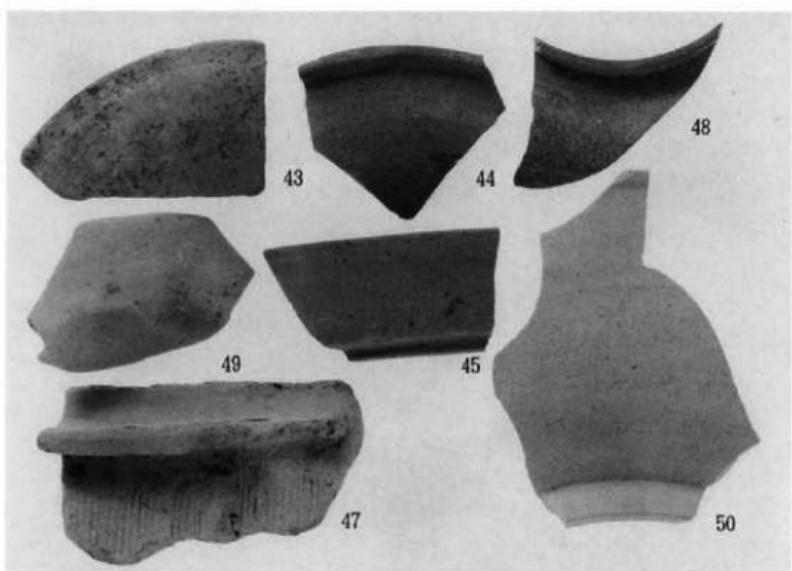
b. 郡家今城遺跡 (93-4) 落ち込み (26~34)

約 $\frac{1}{2}$



a. 郡家今城遺跡 (93-4) 落ち込み (35~40)

約 $\frac{1}{2}$



b. 郡家今城遺跡 (93-4) 包含層 (43~45・47~49) 粘土採掘坑 (50)

約 $\frac{1}{2}$



a. 郡家今城遺跡（93-5） 全景（南側から）



b. 郡家今城遺跡（93-5） 南半部（北側から）



a. 郡家今城遺跡（93-5） 山陽道南側溝A（左） B（東側から）



b. 郡家今城遺跡（93-5） 南北溝1a（左） 1b（南側から）



a. 郡家今城遺跡（93-5） 建物1（北側から）



b. 郡家今城遺跡（93-5） 建物2 建物3（北側から）



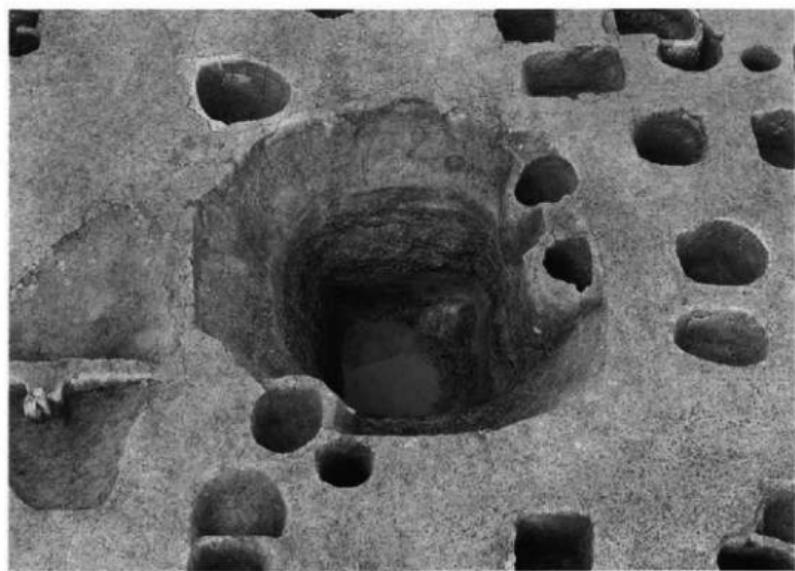
a. 郡家今城遺跡（93-5） 建物5（東側から）



b. 郡家今城遺跡（93-5） 建物6（北側から）



a. 郡家今城遺跡（93-5） 井戸1（西側から）



b. 郡家今城遺跡（93-5） 井戸2（南側から）



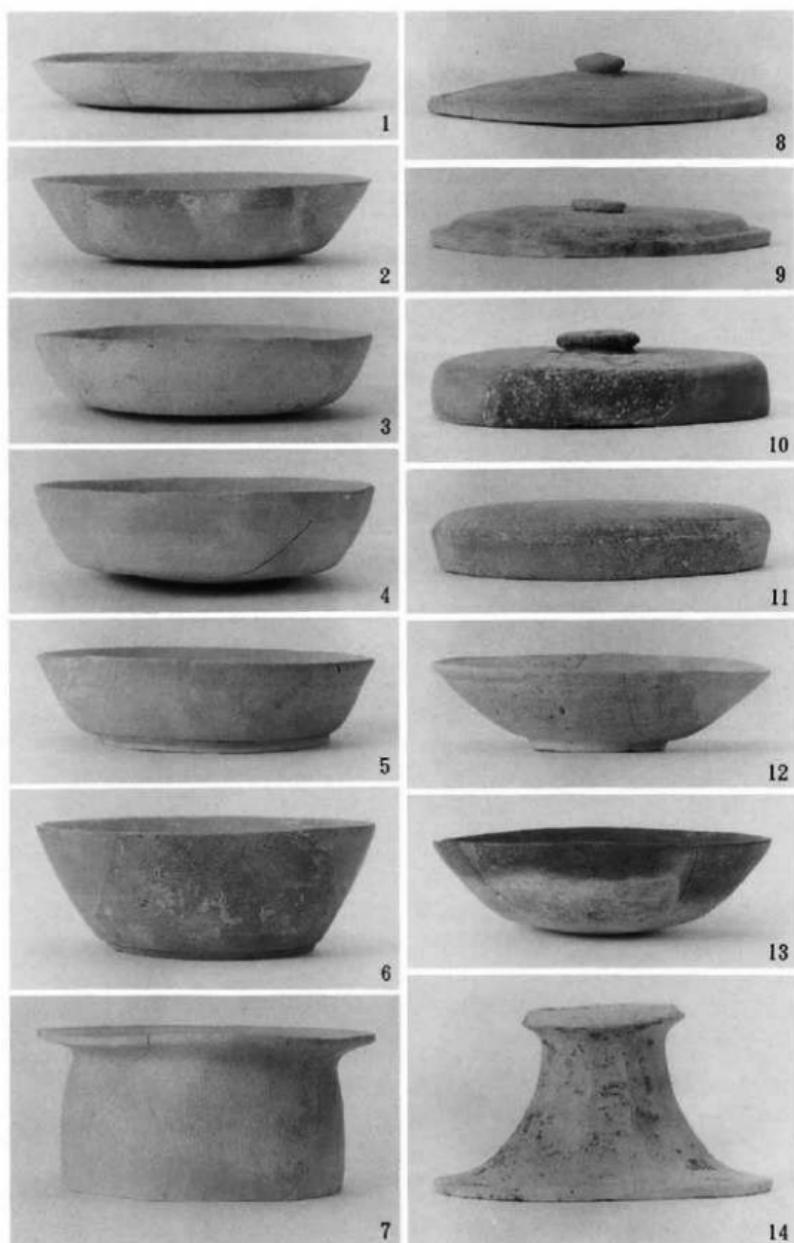
a. 郡家今城遺跡（93-5） 井戸3（北側から）



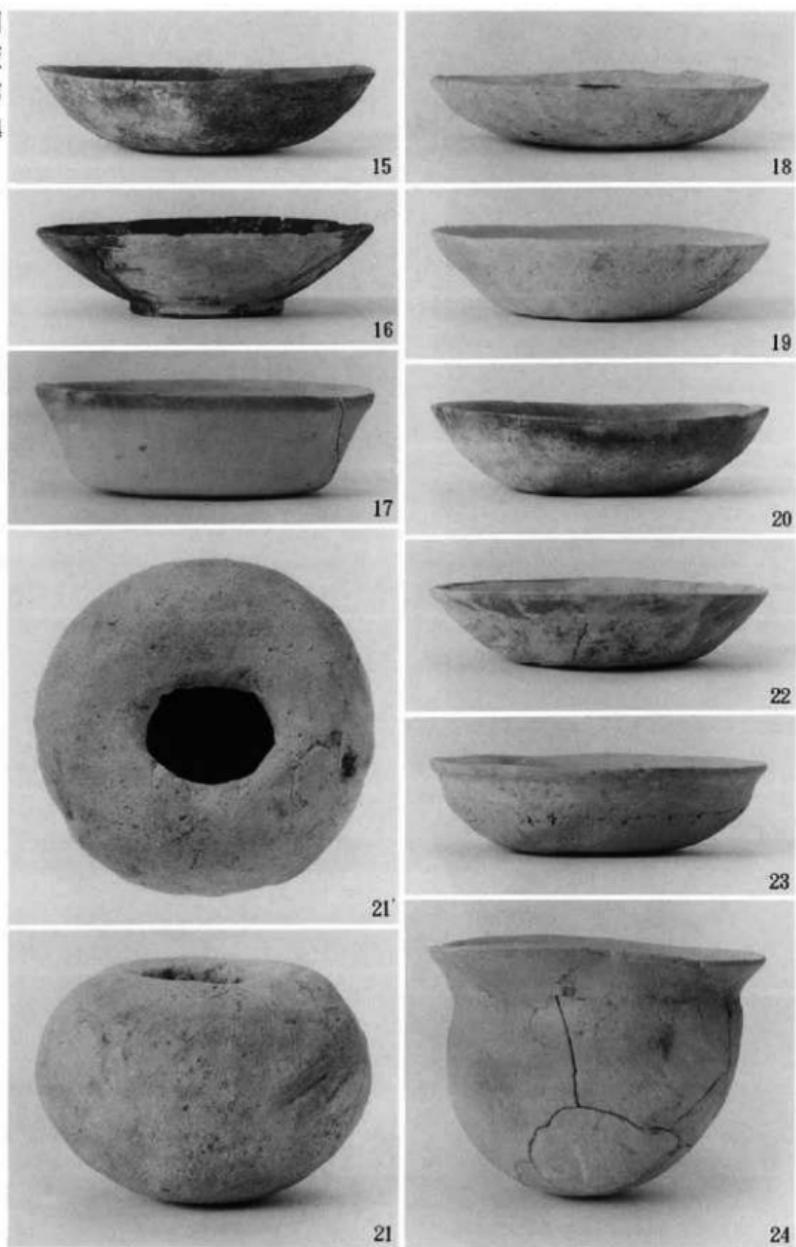
b. 郡家今城遺跡（93-5）
井戸3井戸枠（北側から）



c. 郡家今城遺跡（93-5）
井戸3たちわり後（北東側から）



郡家今城遺跡(93-5) 南北溝1b(1~7) 南北溝1a(9~14) ピット(8)



郡家今城遺跡(93-5) 井戸1(15~21) 井戸2(24) 井戸3(22・23)



25

a. 郡家今城遺跡 (93-5) 井戸1 (25) 南北溝1b (26)



約 $\frac{1}{1}$



27



29



32



28



30



31



33

b. 郡家今城遺跡 (93-5) 土坑2 (27) 井戸2 (28) 小溝 (29)
整地土 (30・31) 南北溝1b (32・33)

約 $\frac{1}{2}$



34



35



36

a. 郡家今城遺跡 (93-5) 井戸1 (34・35) 井戸3 (36)

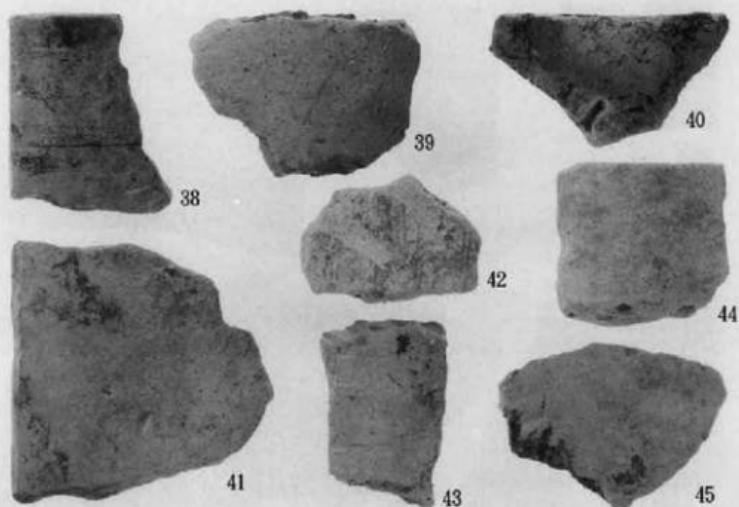
約 $\frac{1}{1}$



37

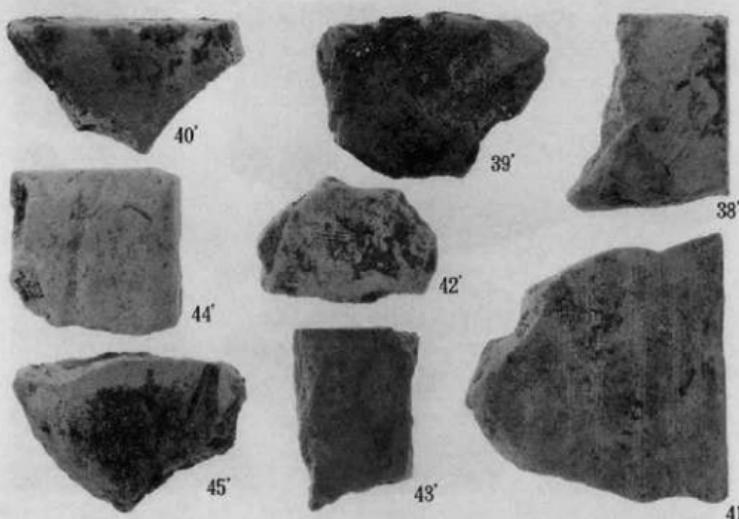
b. 郡家今城遺跡 (93-5) 大土坑1 (37)

約 $\frac{1}{2}$



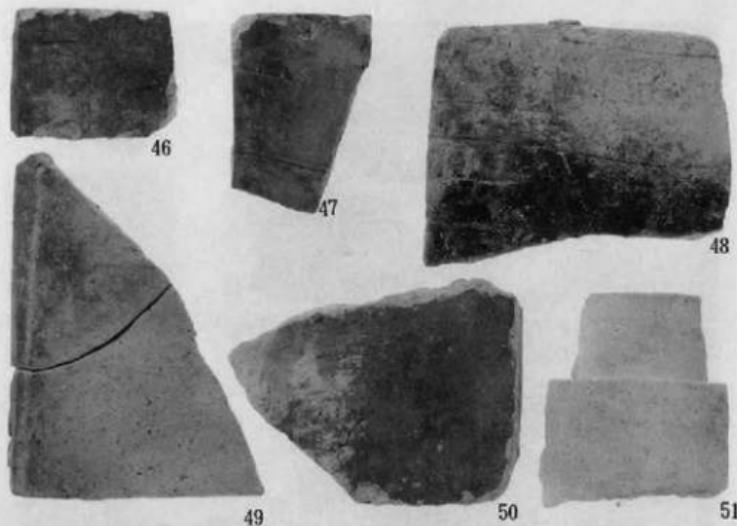
a. 郡家今城遺跡 (93-5) 大土坑1 (38~45)

約 $\frac{1}{3}$



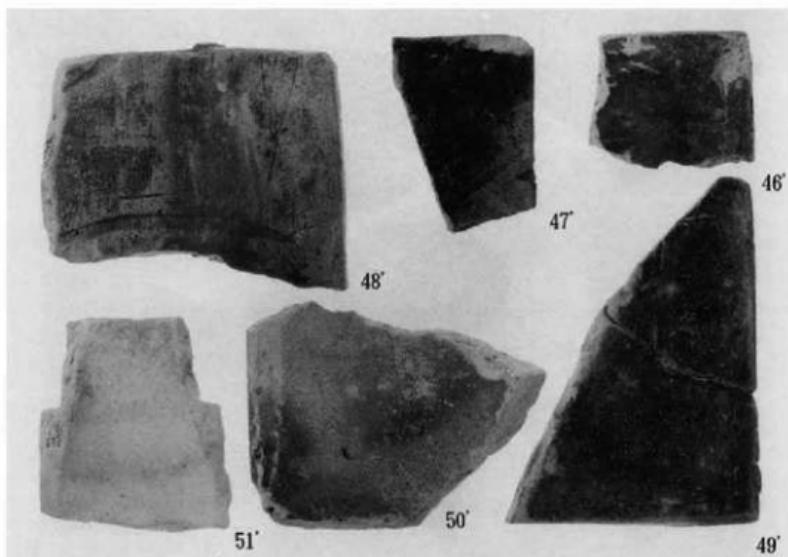
b. 郡家今城遺跡 (93-5) 同上裏面

約 $\frac{1}{3}$



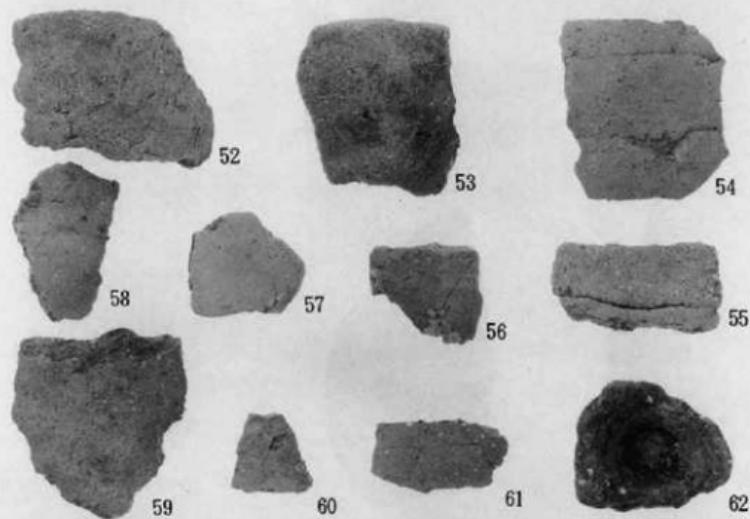
a. 郡家今城遺跡 (93-5) 井戸1 (46) 井戸2 (47・48)
ピット (49・51) 土坑2 (50)

約 $\frac{1}{3}$



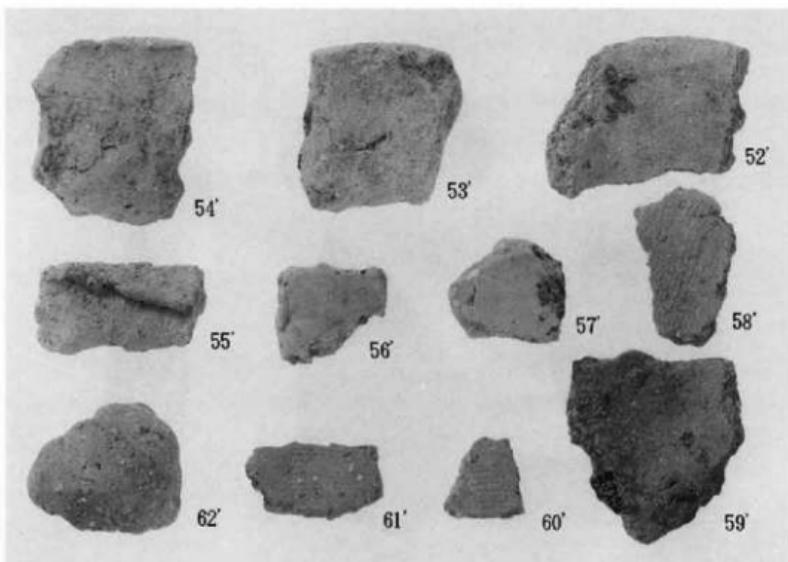
b. 郡家今城遺跡 (93-5) 同上裏面

約 $\frac{1}{3}$



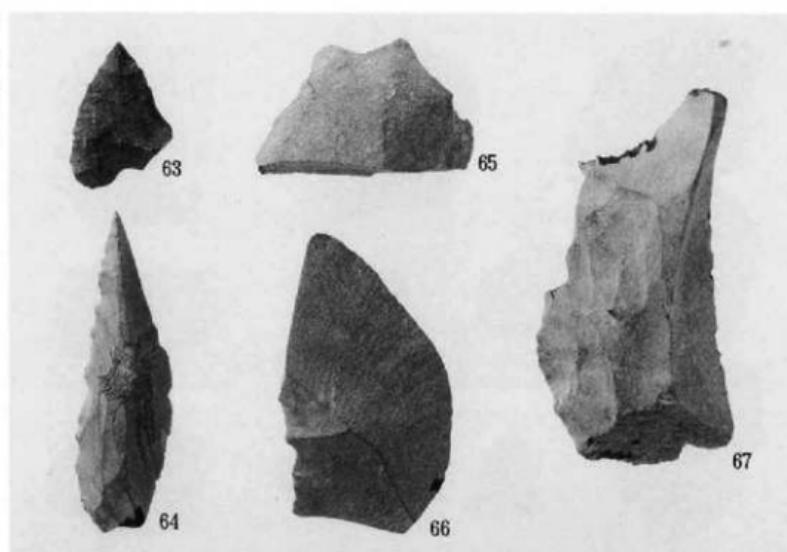
a. 郡家今城遺跡 (93-5) 南北溝 1 b (52~62)

約 $\frac{1}{2}$



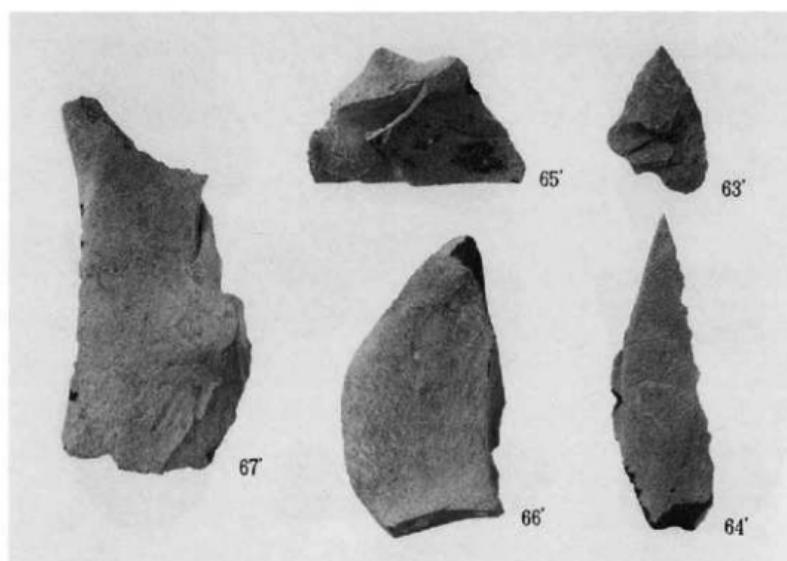
b. 郡家今城遺跡 (93-5) 同上裏面

約 $\frac{1}{2}$



a. 郡家今城遺跡 (93-5) 黄灰色土 (63・66)
ピット (64) 井戸 3 (65・67)

約 $\frac{1}{1}$



b. 郡家今城遺跡 (93-5) 同上裏面

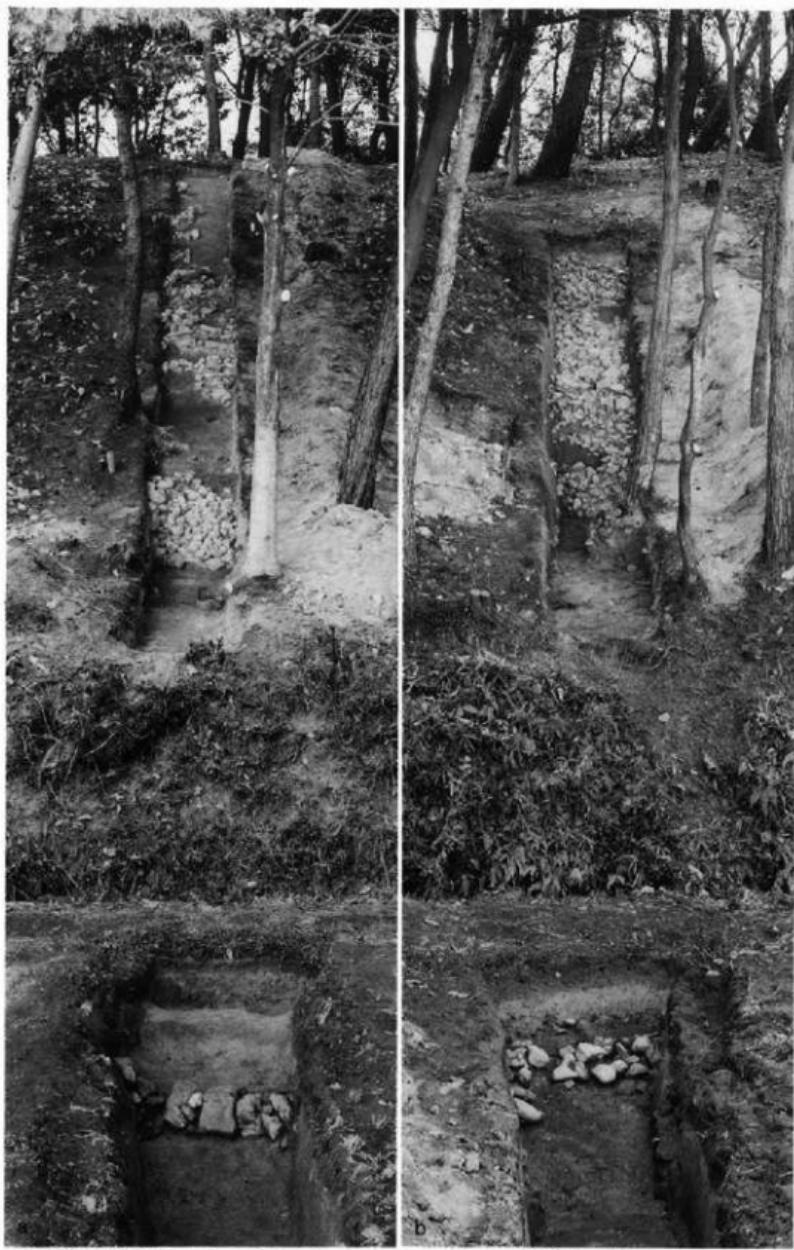
約 $\frac{1}{1}$



a. 郡家車塚古墳（東南側から）



b. 郡家車塚古墳（西南側から）



a. 郡家車塚古墳 トレンチ 1・4

b. 同 トレンチ 2・5



a. 郡家車塚古墳 トレンチ5（南西側から）



b. 郡家車塚古墳 トレンチ4（南側から）



a. 郡家車塚古墳 トレンチ5・6（南西側から）



b. 郡家車塚古墳 菁石層部トレンチ1



c. トレンチ3



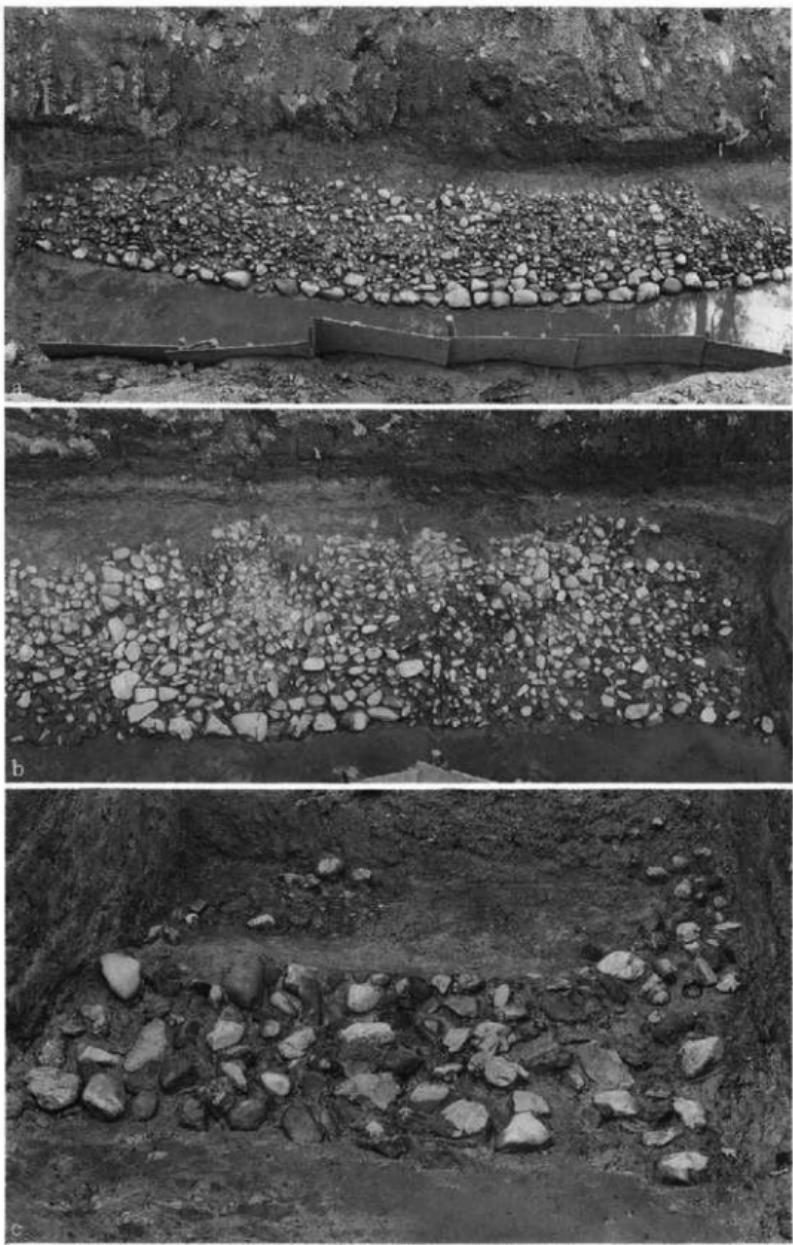
d. トレンチ2



a. 郡家車塚古墳 トレンチ7 後円部葺石裾部（北東側から）



b. 郡家車塚古墳 トレンチ7 後円部葺石裾部（西側から）



a. 郡家車塚古墳 トレンチ7 後円部(東端) b. 後円部(西端) c. 前方部(北西部)



a. 郡家車塚古墳 トレンチ10（前方部前面） b. トレンチ4（埴輪列）
c. トレンチ5（埴輪列）



芥川山城跡 主郭部空中写真



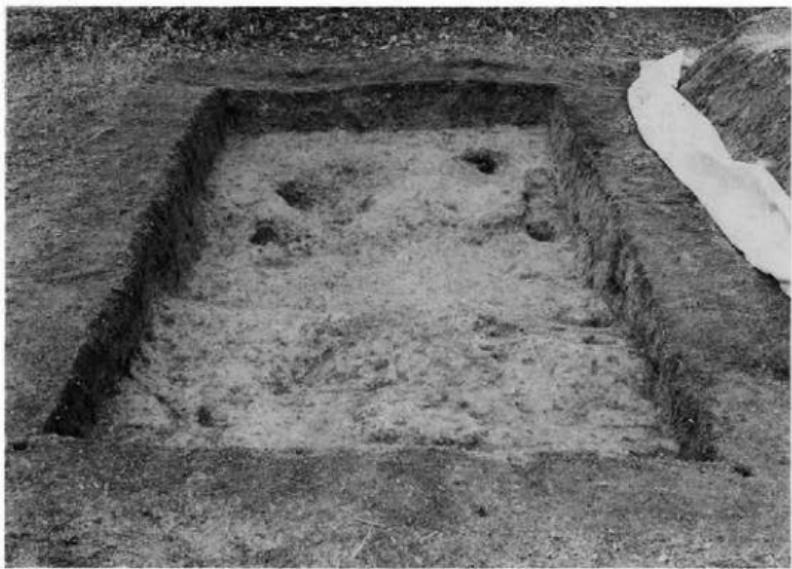
a. 芥川山城跡 主郭部（北側から）



b. 芥川山城跡 B区（南側から）



a. 芥川山城跡 B区東側（北側から）



b. 芥川山城跡 D区（北側から）



a. 芥川山城跡 土壌2（北側から）



b. E区（北側から）



c. B区西部（東側から）



d. F区（西側から）



a. 芥川山城跡 C区（南側から）



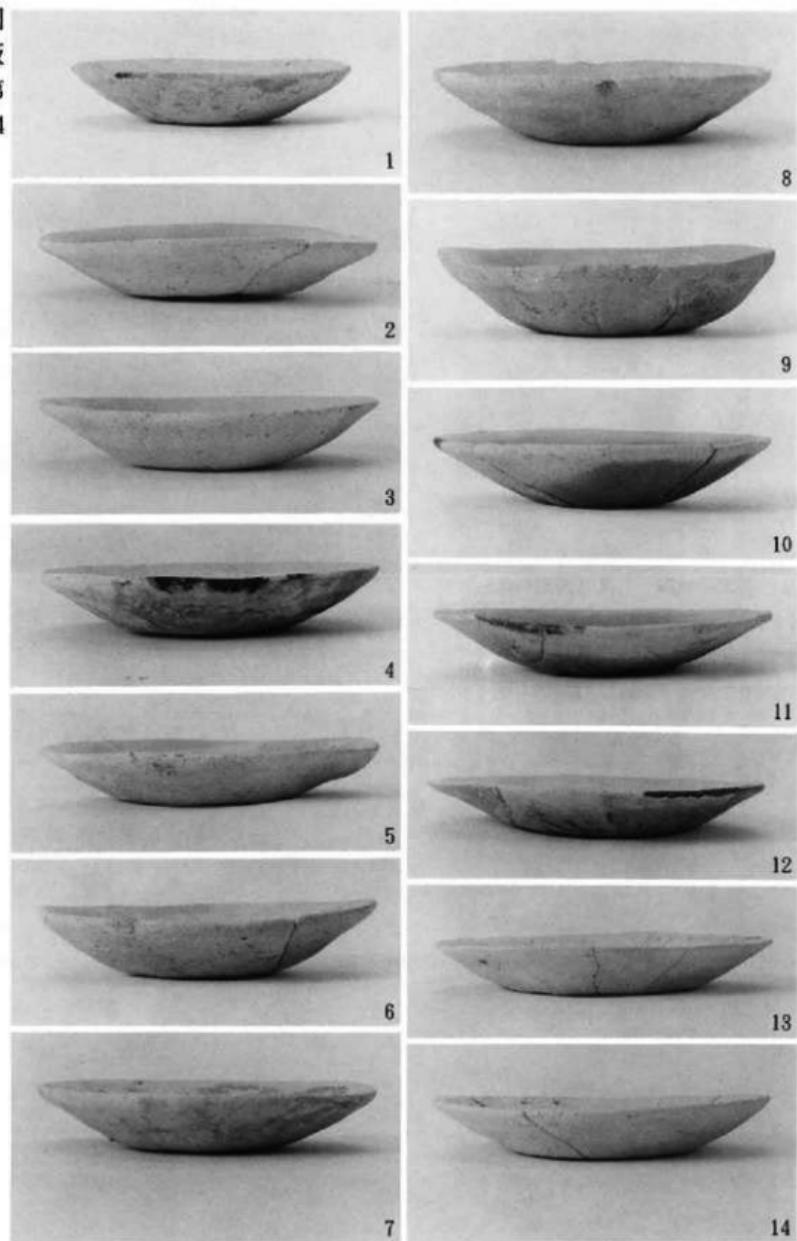
b. 芥川山城跡 C区（東側から）



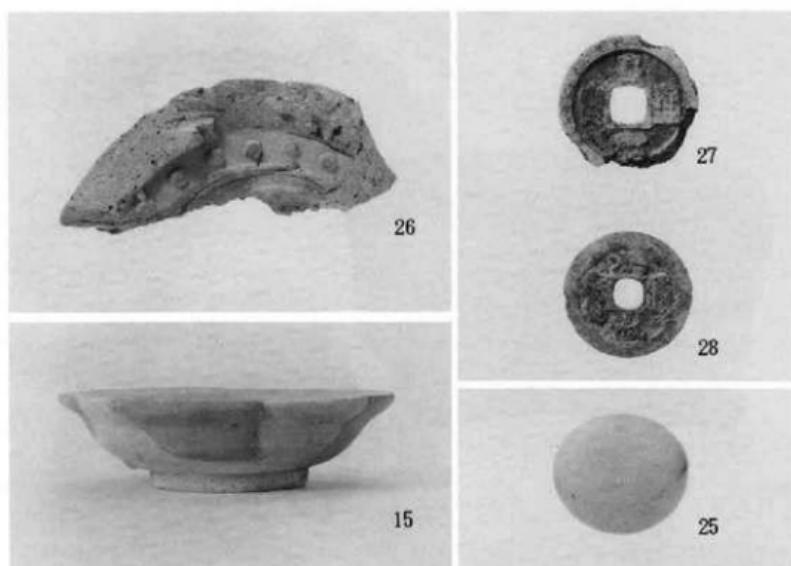
a. 芥川山城跡 C区（西側から）



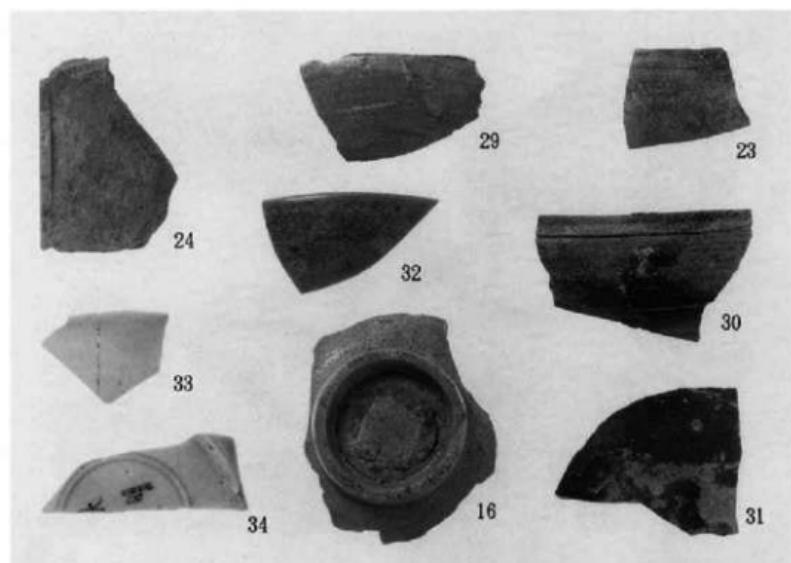
b. 芥川山城跡 郭⑩南西の刻印



芥川山城跡 主郭部（1～14）

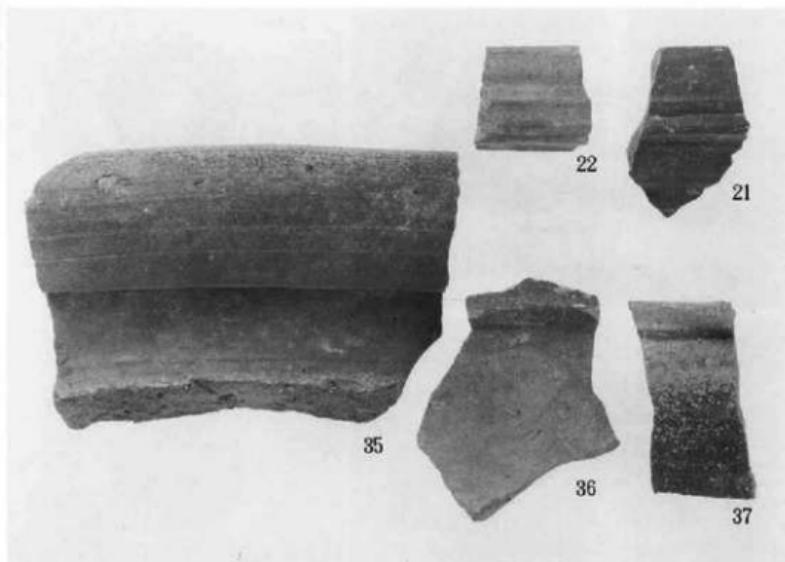


a. 芥川山城跡 主郭部 (15・25・27・28) 採集資料 (26)



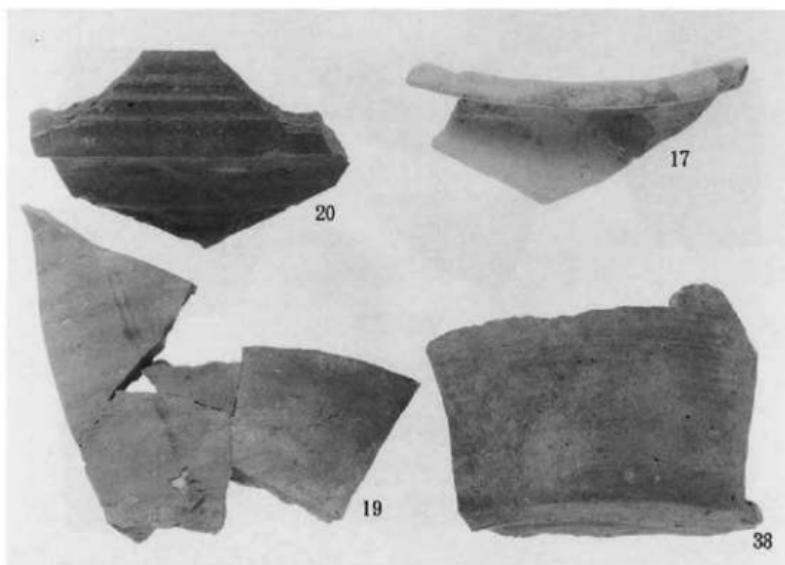
b. 芥川山城跡 主郭部 (16・23・24・29~34)

約 $\frac{1}{2}$



a. 芥川山城跡 主郭部 (21・22・35~37)

約 $\frac{1}{2}$



b. 芥川山城跡 主郭部 (17・19・20・38)

約 $\frac{1}{2}$

高槻市文化財調査概要 XX

山上遺跡群 18

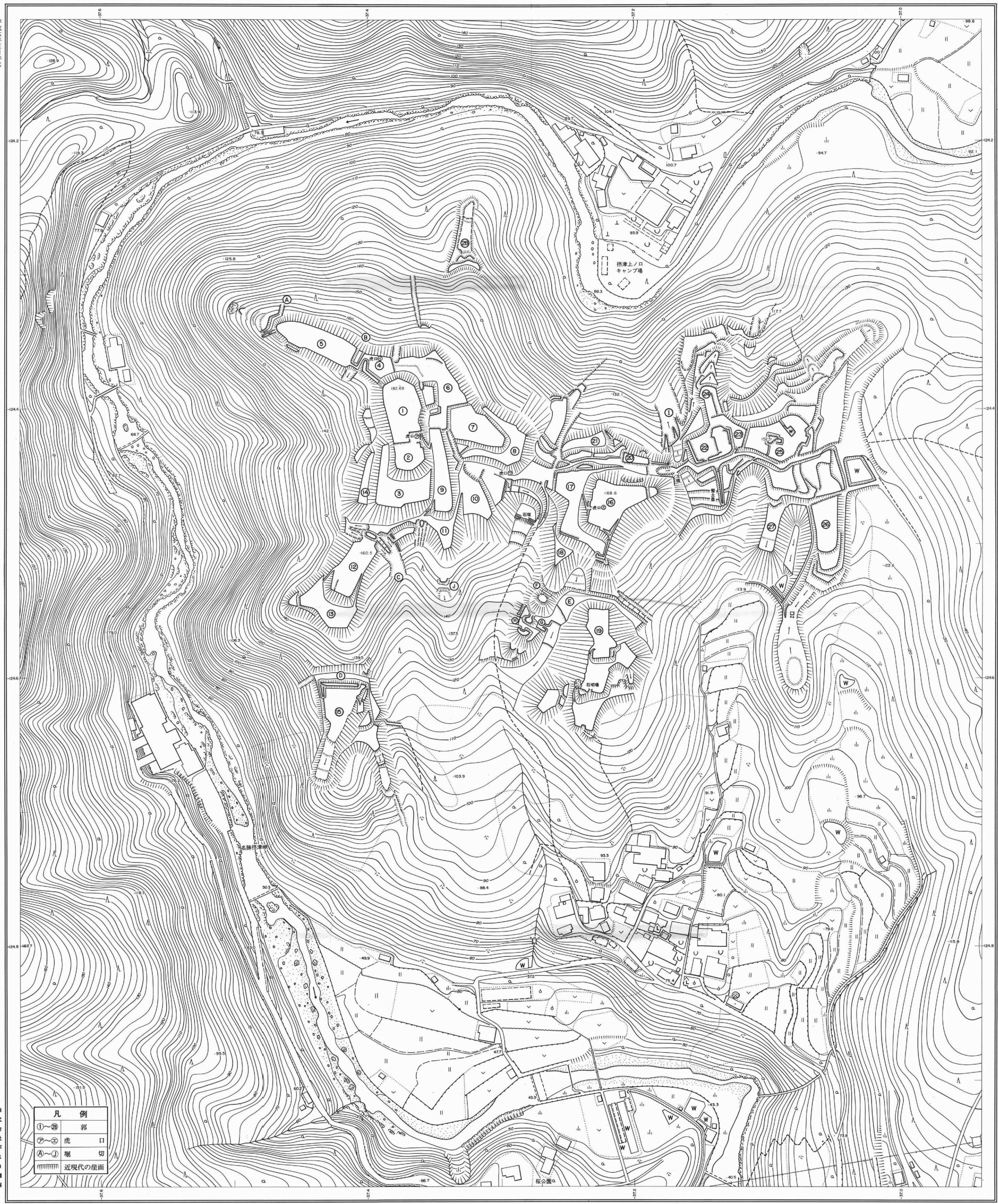
平成 6 年 3 月 31 日

発行者 高槻市教育委員会
高槻市立埋蔵文化財調査センター
高槻市南平台 5 丁目 21 番 1 号

印刷者 株式会社 邦文社
大阪市東淀川区大桐 1 丁目 4 番 9 号

芥川山城跡遺構概要図

平成六年三月作成



高槻市教育委員会

凡例	
①~⑯	郭
ア~エ	虎口
Ⓐ~Ⓑ	堀切
	近現代の崖面

本図は昭和62年作成の1/2,500高槻市より拡大トレース及び
1/1,000芥川山城跡遺構概要図を収集トレースしたものである。

座標系 第6系
等高線間隔 2m

1:1,000 100 200m

芥川山城跡遺構概要図

平成六年二月作成

